年報

平成 25 年度

Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

平成25年度の年報発行にあたって

公立大学法人大分県立看護科学大学
学長・理事長　村嶋幸代

本年報は、大分県立看護科学大学の平成25年度の活動を一冊にまとめたものです。本学では、平成10年の開学以来、毎年年報を発行して参りましたので、もう、12冊目になります。支えて頂いた多くの方々のご支援・ご尽力の賜であると深謝しております。

近年、大学を取り巻く環境は、少子化の流れもあり、益々厳しくなってきています。大学の質の評価が一層求められるようになる中で、年報は、大学のアクティビティを網羅し、反映するものとして重要性が増しています。本学の平成25年度の活動を多くの方にご高覧いただき、忌憚の無いご意見や改善点等をご教示いただければ、幸いです。

平成25年度も、14個の委員会が活発に活動しました。本学の委員会は教員と職員が一つのチームとなって活動しており、改善・改革に努力しています。特筆すべきことの中からいくつかを抜き出しますと以下のようになるでしょう。

① 図書館に電子ジャーナルを導入し、文献を広く渉猟できるようにしました。
② 広報紙「風のひろば」を年2回発行し、学生の保護者・卒業生・教職員等との意思疎通の拡大を図りました。
③ 大学の公式Facebook を開設しました。
http://www.facebook.com/OitaNHS
④ 看護研究交流センターに専任者を配置して、5部門が充実したため機能が強化され、種々の活動を柔軟に行えるようになりました。
⑤ その１つが、文科省「地（知）の拠点事業」の採択です。全学生が地域の高齢者に「予防的家庭訪問」を行うべく、カリキュラム改訂を開始しました。
⑥ 卒業生の動向を把握するよう努力し、同窓会の名簿作成を支援すると共に。ホームカミングディを開催し、厚生学院同窓会を招いて連携を強化しました。
⑦ NP 部門では、修了生が研修会の講師となったり、看護職との交流会も開催されるなど、着実に成果が出ています。制度化に向け、情報も提供しています。

上記の他にも、様々な活動が、教職員・学生・卒業生によって行われています。平成25年度には、5項目中2項目（「Ⅰ大学の教育研究等の質の向上に関する目標」、「Ⅱ業務運営の改善及び効率化に関する目標」）でＳ評価をいただきました。これからも全学挙げて教育・研究・社会貢献を行っていく所存です。今後とも、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

目次

1.　委員会／ワーキンググループの活動 1

2.　学内行事の概要 22

3.　教育活動 25

4.　学内セミナー.....106

5.　学内プロジェクト研究.....107

6.　先端研究.....109

7.　奨励研究.....111

8.　インターネットジャーナル「看護科学研究」 113

9.　業績 115

10.　地域貢献.....128

11.　助成研究.....140

12.　各種研究・研修派遣 143

13.　学外研究者の受入 144

14.　教職員名簿.....145

１　委員会／ワーキンググループの活動

１－１　理事会

委員　　理事長：村嶋 幸代
　　理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 昭邦（以上、学内理事）
　　野口 隆之、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
　　監事：神品 寛子、岩尾 隆志

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。

本年度は５回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

１－２　経営審議会

委員　　理事長：村嶋 幸代
　　理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 昭邦（以上、学内理事）
　　野口 隆之、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
　　立花 充康、本間 政雄、帆足 朋成、松原 啓子（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。

本年度は５回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

１－３　教育研究審議会

委員　　村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、
　　葉玉 哲生（学外委員）、各研究室代表者、各委員長、安部 昭邦（事務局長）

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は12回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告された。

１－４　教授会

構成員　村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）各教授、准教授、講師、
安部 昭邦（事務局長）

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行なうことである。本年度は４回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

１－５　研究科委員会

構成員　村嶋 幸代（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会では、大学院の教育課程における学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項の審議を行った。

１－６　自己評価委員会

構成員　吉村 匠平、平野 亙、猪俣 理恵、小嶋 光明、河野　梢子、朝倉 泰三

１．FD活動
（1）４月１～２日新入職員研修を開催した。参加者８名。実習等の学校行事を概ね経験した年末に、参加者対象に調査を行い、次年度のプログラムを修正した。
（2）海外短期研修、国内短期研修派遣者はいなかった。
（3）６月25日に自閉症スペクトラム障害に関する学内研修会を開催した。参加者41名。
（4）ティーチングポートフォリオに関する学内研修会を開催した。４月26日（参加17名）、12月20日（参加15名）。
（5）看護学実習を担当する教員が交流し、学生・指導法に関する意見交換を行う場として「助助会」を開催。７月29日（19名）、12月24日（12名）参加。
（6）８月１日に全教職員を対象とした科研費申請講習会を開催した。平成26年度科学研究費補助金申請状況は、新規申請39件、新規採択6件、継続は10件だった。
（7）３月７日にアニュアルミーティングを開催した。本年度よりポスター・口頭発表を併用した。口頭発表が11件（奨励研究６件、先端研究４件、プロジェクト研究１件）、ポスター発表が10件だった。
（8）自己評価委員会予算で、学内教員が希望する研修等に参加できる環境を整備した。本年度は２名がこの制度を利用した。
（9）教員による授業参観～講義後の振り返りの会を１件開催した。
(11)双方向的な講義のコンサルテーションを２件行った。

２．授業評価、カリキュラム・卒業アンケート
（1）授業及び実習指導の改善に必要な資料を得るため、学生による授業評価を継続して行った。授業評価14名、実習評価４名。
（2）本学の教育活動全般について資料を収集するため、２年修了時（進級試験後）および卒業時点（卒業研究発表会後）にアンケート調査を行った。

３．議事録整備
　委員会議事録の学内ウェブへの円滑なアップロードを促すため、７月、12月、３月の３回アップロード状況を確認し、委員会に対応を依頼した。

４．人権啓発・ハラスメント防止
（1）７月26日には子どもの人権をテーマに人権研修を行った。35名参加。
（2）７月30日にハラスメント相談員を対象とした学内研修会を開催した。７名参加。
（3）本年度よりNPO法人えばの会に学外相談機関を委嘱した。
（4）学外調査委員に関する規定を設け、二宮孝富大分大学名誉教授に委員を委嘱した。
（5）ハラスメント事案１件に対応した。
（6）ハラスメント相談員の転出に伴い新委員を３名委嘱した。

１．SNSに関する教員対象の研修を開催する。
２．FD（研究）に関する全体研修会を開催する。
３．各種研修支援事業の利用を推進する。

１－７　教育研究委員会

構成員　市瀬 孝道、中林 博道、佐伯 圭一郎、梅野 貴恵、藤内 美保、小野 美喜、
（事務局）池辺 賢一、甲斐 倫明（オブザーバー）、村嶋 幸代（オブザーバー）

本委員会は学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年どおり11回の教育研究委員会を開催した。1)国家試験対策に関しては、解剖、生理、病理等の基礎試験を９月に実施し、国家試験の補講は９月より実施した。模試については例年どおり国試直前まで実施、国試終了直後には国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。平成25年度は看護師と助産師の100％合格を達成した。保健師は89.5％であった。2)看護学実習（第１段階～第５段階）関連では、実習代表者会議のもとで全体の実習日程調整や教員・学生配置等を検討し、本委員会で最終決定した。実習関連ＷＧに関する活動内容は次貢に記述した内容によって看護実習の充実を図った。3)卒業研究に関しては、３月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、テーマや指導内容について調整を行なった。また県立病院、大分日赤病院、アルメイダ病院における卒論研究が研究内容や調査フィールドが重複しないように調整した。卒業研究関連では今年度は卒業発表会のみのサポートグループ（SG）を設置し、卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のセッティング・進行を行った。平成26年度の各研究室学生配置決定はSGを設置しないで教育研究委員会で行った。21年度カリキュラムの「看護研究の基礎」の講義は今年度より平成23年度カリキュラムの中の「看護科学研究」で行った。卒業研究の優秀賞は教育研究審議会にて基礎・看護系教員から７名の査読委員を選出して２件を選別し卒業式に授与した。4)カリキュラム関連では、本年度新たに養護教諭１種の導入について検討し、平成27年度より設置することが教育研究審議会で承認された。そのため、養護教諭１種の科目とCOC事業の予防的家庭訪問実習を加えた新たな平成27年度カリキュラムの構築を行った。これに伴いアドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを見直した。5)４年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、SGの協力により、10月７日より全７回（県外講師３名）の講義を実施し、外部からの参加者も多く見られた。6)進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し平成26年２月27日に実施した。再試験は平成26年３月６日に実施した。7)研究予算関連では例年どおりプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、奨励研究以外はヒアリングを行い、プロジェクト研究は１件、奨励研究６件、先端研究４件採択した。8)平成25年度前期・後期の科目等履修生と平成25年度も研究生の募集を行ったが、本応募者はなかった。9）本年度より既存システムのエルゼビアナーシングスキル日本版を本格導入し、eラーニング方式によって、看護技術演習で活用することとなった。10）平成26年度シラバスの作成を行った。11）教育研究委員会が担当する平成25年度の年度計画に関しては、全て遂行し、100％達成することができた。

来年度計画としては、平成27年度よりスタートする新カリキュラムの文部科学省への申請と時間割を本格的に検討する。

１）　国家試験対策ＷＧ

構成員　梅野 貴恵、小嶋 光明、石岡 洋子、岡元 愛、河野 梢子、栗林 好子、後藤 成人、
中釜 英里佳、池邉 賢一

平成25年度の国家試験受験対象者は看護師73名、保健師76名、助産師８名であった。保健師・助産師・看護師国家試験合格率100％をめざし国家試験対策WG会議を９回行った。教員は、学生の対策委員と連携し役割分担を決め計画を立案、実施した。具体的活動は、昨年総合実習終了直後の７月に実施した国家試験ガイダンスを４月に実施、さらに、昨年から９月に実施している実力試験（解剖・生理を中心とした問題）を実施し、学生の学習への自覚を促した。また模試は、業者模試（看護師７回、保健師３回、助産師２回）、学内模試（看護師３回、保健師３回、助産師５回）を実施し、その結果を分析し、成績不振の学生に対して、11月に個別面接を実施し学習・生活状況を確認し国家試験へのモチベーションを喚起した。今年度は解剖・生理・病理の補講科目を９月から実施し、学習の機会を早めた。12月の卒論発表後から、成績不振学生数名に対してWGの教員が小グループでの学習支援や学習進捗状況の確認を行った。また、卒論配置研究室の教室主任に現状を報告し、学生の状況を把握していただき指導強化を求めた。３月25日に発表された合格率は、看護師、助産師は100％、保健師89.5％であった。

２）　実習代表者会議

構成員　村嶋 幸代、市瀬 孝道、甲斐 倫明、藤内 美保、梅野 貴恵、小野 美喜、影山 隆之、
桜井 礼子、佐藤玉枝、高野 政子、林 猪都子

本会議は実習運営を行う研究室の責任者で構成している。今年度は、平成27年度カリキュラムの計画を立てるなかで、実習に関するカリキュラム、演習のカリキュラム（看護技術修得プログラム）、総合看護学実習などの目標の方針などについて検討した、その他、実習履修の単位認定に関すること、各実習運営に関する情報共有を行った。

１．平成27年度カリキュラムの実習に関する検討
1）実習段階、実習週数、実習時期について検討した。初期体験実習は基礎看護学研究室が担当することとなった。COCの予防的家庭訪問実習は、１年次保健管理、生体科学、２年次看護アセスメント、生体反応、３年次成人老年看護学、環境保健、４年次地域看護学、健康情報科学の研究室が担当することとなった。地域看護学実習が１週間から２週間に変更された。また、養護教諭一種のカリキュラムとの調整のため演習などの時期を見直した。
2）看護技術習得プログラムについては、平成23年度カリキュラムと同様に４段階の演習を実施することで合意された。方法については評価をしながら改善していく。
3）総合看護学実習について、来年度の平成23年度カリキュラムで新たに実習目標や実習方法を変更するため、方針についてディスカッションし共有した。

2.各実習について
1）昨年度から原則常駐体制としたことから、一部で教員配置に調整が必要なところがあり、教員配置の方針を文章化し、決定した。
2）基礎看護学実習、看護アセスメント学実習の時期について、インフルエンザや積雪のため実習に支障がでるなどの課題があるため今後検討する。
3）実習中の学生のSNSの課題、個人情報などの問題があり、対策を講じた。
4）教員の感染症対策のため、抗体価の検査の徹底、ワクチンの推奨を行った。
5）学生の事故対応についての学生保険に関する情報の共有を行った。

３）　実習関連ＷＧ

構成員　小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、
草野 淳子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳

実習関連WGは、教育研究委員会のもと、看護系研究室からそれぞれ１名を選出し、月１回の定例会議を開催し主に実習に関連し以下の活動を行った。

１.実習センター及び各領域の実習施設の実習環境の整備等

２.実習に関連する文書等の見直し

・実習ガイドブック/個人情報の取り扱いに関するガイドライン/事故対応マニュアル等
実習ガイドブックには、実習時に問題となったSNSの使用に対する留意事項および記録紛失のための対応について記載を充実させた。

３.看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

・新新カリ（第１～３段階）の企画・運営・評価

・新新カリ（第３段階）の企画
4年次の新たに実施する第3段階看護技術演習は、Eラーニングおよび在宅・総合看護学実習をイメージした自主的な演習としてプログラムを検討完成させ、来年度の実施に　向けた準備を行った。

４.新新カリキュラム総合看護学実習の企画
4年生の最後の実習としての目標を新たに設定し、看護マネジメント、夜間実習、多重課題等を経験する実習、および成果発表会を導入することを検討し、来年度実施に向けた準備を行った。

５.実習関連予算の管理

６.Webページの活用（看護学実習に関する資料）

７.看護技術修得確認シートの活用の促進

・新新カリキュラムにおける看護技術習得状況を調査し評価を行った

４）　進級試験ＷＧ

構成員　中林 博道、佐伯 圭一郎、石田 佳代子、松本 初美、定金 香里、田中 佳子

今年度試験作成のための出題基準・出題範囲を確認し、各教員に問題作成依頼を行い、学生へは７月10日に進級試験ガイダンスを行った。平成26年２月27日に２年次生80名に対し進級試験を実施した結果、17名合格、63名が不合格となった。

不合格者に対し３月６日に再試験を実施した結果、63名が受験し、１名が不合格となったため、教育研究委員会および学生生活支援委員会へと当該学生への対処を依頼した。

５）　助産学選考ＷＧ

構成員　梅野 貴恵、佐伯 圭一郎、吉村 匠平、伊東 朋子、樋口 幸、石岡 洋子、安部 真紀

本年度が学部での助産学教育最終年度であり、４年次生の助産学実習履修条件を確認するのみで、本件に関する問題が発生しなかったため、その他の活動は実施していない。

１－８　学生生活支援委員会

構成員　桜井 礼子、宮内 信治、石岡 洋子、岩崎 香子、江月 優子、工藤 哲生、関根 剛、
津留 由美、巻野 雄介

学生生活支援委員会の主な活動として、学生生活が快適かつ充実したものとなるように、４月の全学オリエンテーションをスタートに、コンタクトグループ、新入生宿泊研修、交通安全実技講習会、スポーツ交流会、キャンパスクリーンデー、DV講演会などの行事の企画・運営を行った。また、学年担任制をとり、年間を通して、学生の留年、休学、復学及び退学に関すること、交通安全、健康管理に関すること、奨学金等に関すること、サークル活動、自治会活動に関することなどについて学生からの相談を受け対応した。また、学生生活実態調査を実施するとともに、学年担任を中心に学生への個別面談などを実施し、問題把握と解決に努めた。さらに学生の留年、休学を減らすために、学習支援の必要性について検討、１年次生に対して学習相談等の日を設定したが、相談に来た学生は２名のみであった。また、学生生活実態調査の結果を基に、学生からの学生生活の環境面での要望を把握し、一部改善することができた。

今年度の課題となった点は、学生の留年、休学、退学をいかに減らすかである。今年度も留年生が出る結果となった。特に、必修科目の確実な単位取得、進級試験の合格に向けては、学生生活支援委員会だけではなく、教育研究委員会等との連携が必要であると考える。次年度は１年次～３年次までの担任を複数とし、さらに学習支援、相談体制を充実させることと、学生生活の環境づくりや安全については、学生の協力を得ながら充実させていきたいと考えている。

１－９　就職支援委員会

構成員　林 猪都子、品川 佳満、栗林 好子、田中 佳子、小川 三代子、安部 昭邦、工藤 哲生、大賀 淳子（～６月）

学生の就職の円滑化と県内就職率50％を目指して、就職活動を支援し年間計画に沿って活動を行った。

１．求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国 21953人（483件）、大分県 404人(45件)であった。全国からの求人訪問対応は59件であった。

２．学生の就職・進路状況：卒業生75名であり、就職決定者73名（保健師７名、助産師６名、看護師60名）、進学者２名であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行った。必要な学生には個々にメールで情報を提供した。

３．就職相談室の開設：就職相談員１名を配置し、学生が就職について相談できる体制を構築した。学生の就職相談日を第２、４水曜日の午後として合計 169名の相談を得た。就職相談員は３、４年次生全員に就職面接を実施し、学生の就職希望に関する実態を把握し相談にのった。本学ＨＰに既卒者の県内Ｕターン就職相談について掲載したが相談者はいなかった。

４．県内施設就職説明会：３年次生対象に県内施設就職説明会を開催した。（ 2/26；24施設参加）説明会の方法は学生全体へ施設概要を説明し、その後個別相談を行った。卒業生の参加による勧誘も見られ好評であった。

５．公務員対策講座：県内の保健師や県立病院への就職希望者のための公務員対策講座を、３年次生、４年次生、大学院生（広域看護学）対象に、6/16（日）、8/27（火）、11/30（土）、1/25（土）の４回開催し、合計55名の学生が受講した。

６．就職ガイダンス：３年次生対象に就職ガイダンスを7/3（水）、2014年2/19（水）の2回開催した。

７．身だしなみ講座：株式会社フタタに身だしなみ講座の講師を依頼し、４年次生全員対象に4/24（水）開催した。スーツの基本的な着こなしについて学び、学生から多くの質問があり就職面接に役立てることができた。

８．面接講座：集団面接講座は東京アカデミーに講師を依頼し4/24（水）開催した。保健師を希望する４年次生６名が参加した。個人面接講座はマイナビに講師を依頼し、7/9（火）４年次生全員を対象に開催した。

９．模擬面接：模擬面接を９回開催し54名の学生に実施した。

10．県内就職フォローアップ：７月から８月に湯布院厚生年金病院、大分大学医学部附属病院、大分医療センター、豊後高田市保健所の４カ所を各委員が訪問し、勤務状況の調査や施設からのコメントを頂いた。

11．県内施設インターンシップ：大分県看護協会が主催する県内のインターンシップに３年生28名が参加し、学生に就職選択に関する支援を行った。

本年度は県内出身者が65.3％と多く県内就職率は52.8％であった。３年次生の１～２月から就職相談員による学生への就職面接指導と２月に県内施設就職説明会を開催した成果と思われる。今後実習基幹施設の本学卒業生との交流会を開催し、大分県における卒業生の活動状況を得ること、次年度から看護師のみの資格になるので大学院進学が増加することを考慮しながら就職指導を行っていく。

１－10　広報・公開講座委員会

構成員　高野 政子、関根 剛、安部 眞佐子、松本 初美、後藤 成人、岡元 愛、池辺 賢一、
中野 麻梨子

1)若葉祭

５月11日、12日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。全体の参加者は２日間で1080名で、教員企画は８企画を開催し、大学の教育内容や設備の紹介を行った。企画参加者数は631名であった。教員イベントを学生とともに実施することで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。教員の研究紹介では、６人のポスターの掲示を行い、７月のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

若葉祭と同時に開催したホームカミングデイは、合同新聞で記事紹介された。

2)オープンキャンパス

平成25年度の開催は、夏休み中の７月14日（日）に実施し、参加者は300名で、本学について大いにアピールできた。講堂での説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。食堂も営業してもらい、保護者等来学者に利用してもらった。教育・研究の展示はパネル展示物を一部新規作成した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業などを企画した。在学生が相談コーナーや実習室への誘導を行うことで、高校生や保護者には在学生との交流の機会ともなり、入学後のイメージを深めることができたと思われる。

3)地域ふれあい祭り

平成25年度の地域ふれあい祭りは、「ななせの里まつり」参加者5000人に参加した。大学に隣接するみどりの王国で開催された11/３（日）に参加し、大学紹介のパネルを掲示した。また、大学案内パンフレット配布やCOC地の拠点事業の紹介を行った。その他に、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員も参加し活躍した。また、健康増進プロジェクトと協働し、血圧測定、体成分分析、栄養評価などの健康指導・健康チェックを実施した。

4)出前講義

看護系進学を希望する高校生を対象とした高校の出前講義に講師を派遣した。高校からの依頼で、助教以上の教員を派遣した。国東高校(６/26)、中津南高校(７/10)、由布高校(７/17)、雄城台高校(10/2)、佐伯鶴城高校(10/16)、大分鶴崎高校(10/28)、竹田高校(11/12)、舞鶴高校(2/27)。

5)大学見学

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。熊本八代清流高校45名、蒲江小学校16名の他、単独の教員や保護者など５組に対応した。

6)大学オリジナルグッズの作成

大学名の入った大学オリジナルグッズを作成し、大学広報の１つとして活用した。クリアファイル（2000枚）、４色ボールペン（2000本）を追加で購入した。

7)マスメディアによる広報

新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。大学イベントや学生のボランティア活動などの社会貢献活動について、随時Webに公開した。また、定期的に県政記者クラブに情報提供を行い、情報発信を行った。また、大学HPで教員の研究紹介として、９件を掲載した。

8)大学案内パンフレット

５名の教員と委員会委員とでWGを運営した。2014年度版として次年度５月に完成予定である。

9)大学広報紙

総括責任者を事務局長として、５名の教職員でWGを運営した。これまで毎年発行していた後援会通信を発展的に解消し、新たな大学広報紙として平成24年度に創刊した「風のひろば」の第２号、第３号をを作成した。教育活動、教員の研究紹介、地域への貢献事業などを掲載し、後援会、同窓生や地域社会との交流紙として、関係機関に配布した。

10)公開講座

「看護教育の最前線」と題した有料公開講座を９月13日（小児看護の最前線:高野教授）、９月27日（成人老年看護の最前線:小野教授）、10月11日（看護アセスメント学の最前線：藤内教授）、10月25日（PM2.5:吉田准教授）の計４回、学内で開催した。訪問看護の活用：佐藤弥生助手は中津市で開催し、延べ66名だった。事前にパンフレットを3,000部作成し、市報など地域広報に加え、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

１）　大学案内パンフレットＷＧ

構成員　江月 優子、小嶋 光明、田中 佳子、定金 香里、森田 慶子

平成26年度版大学案内は平成25年度版をベースとして作成した。５月上旬に完成し、若葉祭を始め、広く本学の広報活動に活用される予定である。

２）　英文大学案内パンフレットＷＧ

構成員　Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、岩崎 香子、桑野 紀子、田原 歩

本学の特徴と教育内容・活動を英文でまとめ、対象が主として海外の教育・研究関係者であることを考慮した“University Bulletin”を３年に１回の計画で改訂する。

３）　大学広報紙ＷＧ

構成員　安部 昭邦、巻野 雄介、朝倉 泰三、池辺 賢一、池邉 尚美、佐藤 めぐみ

平成24年度に後援会との協働で創刊した大学広報紙「風のひろば」の第2号及び第3号をそれぞれ７月、１月に発行した。本学の現在の取組や地域との協働事業、トピックス、研究紹介などを掲載し、在学生の保護者や卒業生を始め、関係機関に配付、広く情報発信を行った。

４）　学外WebＷＧ

構成員　品川 佳満、岩崎 香子、田原 歩

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）および管理・運営を行った。

５）　英文WebＷＧ

構成員　Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、定金 香里、田原 歩

海外の利用者を重視した内容とし、学内行事等の報告掲載を随時行うことで、常に最新の情報を分かりやすく閲覧できるようにした。

１－11　国際交流委員会

構成員　Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、崔 明愛、松本 初美、桑野 紀子、水野 優子、
石川 純也、江本 華子

国際交流委員会が平成25年度に行った活動は以下のとおりである。

1）ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計８名（７月14日～７月21日までの８日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

2）本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計８名を（８月18日～25日までの８日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

3）第15回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを平成25年10月26日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場にて開催した。本年は「在宅ケアの推進とその方略 -臨床・退院支援・地域における看護の連携-」をテーマとし、オーストラリアから１名、韓国から１名、国内から１名の講師を招聘した。参加者は251名と盛況であった。

4）NP国際会議の開催

平成25年10月28日（月）に、本学にて、第13回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。オーストラリアから１名の講師を招聘した。

5）第16回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会として、平成26年3月17日（月）に本学23講義室で開催した。姉妹大学の韓国ソウル国立大学校看護大学から２名の講師を招聘した。海外講師２名および本学教員２名の計４名が講演を行い、参加者と共に活発に意見交換を行った。

平成25年度の計画を踏襲した計画を検討する予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研修の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と内容を検討するよう試みる。そして、毎年、看護国際フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

１－12　図書委員会

構成員　小野 美喜、Gerald T. Shirley、福田 広美、足立　綾、朝倉 泰三、白川 裕子、
工藤 信二

毎月１回の委員会を開催し以下の活動を行った。

１）CINAL with Full Text、cochrane Libraryを導入し、cochrane Libraryの研修会を開催することで、電子ジャーナルの活用促進につなげた。
２）館内案内板を新たに設置し、館内の利用環境を充実させた。
３）不要図書を整理し、閉架書庫再配置等所蔵スペースの確保に努めた
４）館内での水分補給を可とし、利用者の利用環境を改善した。
５）著作権処理済みの視聴覚教材の貸し出しを開始し、利用者の利便性を改善した。
６）購入雑誌の見直しのためのアンケート調査を行い、利用ニーズに応じた雑誌の購入を検討決定した。

今後の課題としては、洋雑誌の高騰への対応策の検討、電子ジャーナル等の利用促進は引き続き課題として委員会にて取り組む。

１－13　入試委員会

構成員　構成員は非公開としている。

本委員会は、平成25年度に実施した学部入学試験、大学院博士課程（前期）に関する全ての事項、および大学院博士課程（後期）に関する一部の事項について審議し、全ての入学試験を統括した。

大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（2回、8/30、12/11）および試験場設定大学連絡協議会（10/22）の他、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（6/6-7）、大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会（6/17）、公大協入学者選抜実務担当者協議会（10/29）に入試委員会委員が参加した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は22箇所、高校教諭に対する進学説明会（6/7）の来場者は35名（前年度より7名増、約21％増）であった。この他、若葉祭及びオープンキャンパス会場に、進学相談コーナーを開設した（5/12）。

大学院入学試験は例年通り8月に実施した（8/24）。大学院博士課程（前期）入試は、筆記試験と面接試験を行った。また、今年度から博士課程（後期）入試は筆記試験と口頭試問とした。

大学院博士課程（後期）入試は、特に大学院研究科教育研究委員会と連絡を取り各種試験問題について協議した。しかし、一部連携が不十分であったため、今後はより緊密な連携を取る必要がある。

学部の特別入試（11/23）の志願者数は県内79名、県外15名、社会人4名で、前年度より減少した。学部の一般入試（前期2/25、後期3/12）の志願者数は前期224名（前年度より約38％増）、後期262名（前年度より約86％増）であった。

大学入試センター試験では、監督者等が説明会を欠席することがないよう開催回数を増やし、実施要領等の周知徹底を図った。

前年度、後期試験の問題に脱字があり、博士課程（前期）の問題に誤りがあったため問題作成の段階毎にチェックリストを作成して、出題ミスの防止に努めた。また、入試委員が実際に問題を解き出題ミス等がないかを確認することにした。引き続き再発防止方法について検討する必要がある。

入試の広報と運営方法の両面について、引き続き改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動を行っていく予定である。

１－14　研究倫理・安全委員会

構成員　影山 隆之、平野 亙、吉田 成一、伊東 朋子、樋口 幸、小嶋 光明、美登 弘美

1)承認申請があった研究計画98件を審査した。
2)研究倫理・安全についての研修として、新任教職員に対しては新任教職員研修会（4/4）、４年生に対しては看護研究の基礎１（12/5）、大学院生に対しては看護研究特論／研究のすすめ方（4/16）で、配慮すべき事項と学内での手続きについて教育した。
3)毒物・劇物の管理について学内規則は定められていたが、実際の運用がなされていなかったことから、管理簿の様式を整備し、該当研究室における使用・管理状況を把握して管理者（理事長）に報告した。
4)動物実験に関しては、「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針（文部科学省）、「動物実験施設 利用の手引き」、「研究計画の申請に関する手引き」の学内規定に基づき審査を実施している。また、動物実験施設の全般的な管理運営は動物実験施設管理責任者が「動物実験施設 利用の手引き」に基づいて実施している。使用動物数（屠殺数）はマウス1,446匹およびラット144匹であった。
5)学内規定である「研究の倫理・安全に関する指針」と「研究計画の申請に関する手引き」にわかりにくい点や不明確な点があったことから、両者を整備して改定した。特に、前者で定める研究計画書の書式に、外部研究資金等に関する記載項目が欠けていたので、研究費の出所および利益相反について記載するよう書式を改定し、記入要領を整備した。
6)学外者が研究責任者となって承認申請をできるようにしてほしいとの要望が県庁などからあったため、そのための規定を次年度当初に制定できるよう検討を行った。

現行のシステムではWeb申請画面の改訂や新しい委員の登録に手間がかかることから、新しいシステムのあり方を検討する。「研究計画の申請に関する手引き」に掲載されている依頼文書・同意書等の様式は簡素なものなので、より詳しい解説を検討して学内Webに掲載する。

１－15　情報ネットワーク委員会

構成員　佐伯 圭一郎、品川 佳満、首藤 信通、井伊 暢美、足立 綾、岩崎 瑞穂

本学の情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティ対策の推進や教職員のICTスキル向上のための活動を継続した。特に今年度は、
1)教職員用クライアントPCの更新
2)「情報セキュリティ対策基準」改訂作業
3)学生を対象とした「私物情報機器の活用に関するアンケート調査」を実施し、学生持ち込みPCの利用環境（電源や無線ネットワーク等）の改善計画を作成
4)情報処理教室更新計画も含め、ICT環境の維持管理に関する総コストを考慮した今後の計画について、活動を行った。

今後も情報ネットワークの運用管理を安全で効率的なものとして遂行するが、特に平成26年度においては、
・学生持ち込みPC向け環境の改善作業に着手
・本学の中・長期的なICT環境の整備に関する情報収集
を進める予定である。

１）　ネットワークシステムＷＧ

構成員　品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウエア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット・無線LAN）の管理・運営を行った。また、サーバのクラウド化の検討を行った。

２）　WindowsユーザーサポートＷＧ

構成員　首藤 信通、佐伯 圭一郎、井伊 暢美、足立 綾、岩崎 瑞穂

学内（教職員、情報処理教室、メディアセンター・教材作成室、看護研究交流センター、CALL用ノートPC)の管理およびユーザーサポートを行った。また、教職員用クライアントPC更新作業において、進行管理および各種作業を行った。

３）　MacユーザーサポートＷＧ

構成員　小嶋 光明、石川 純也

教職員用および学内に設置しているMac PCの管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

１－16　研究科教育研究委員会

構成員　甲斐 倫明、藤内 美保、梅野 貴恵、吉村 匠平、赤星 琴美、江田 真砂実、
村嶋 幸代（オブザーバー）

大学院研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

1) 大学院の規定類・ガイドラインの修正および整備を行った。
2) 学部から大学院に進学を奨励する大学院進学者特待生制度を新設した。
3) アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの作成を各コースごとに行った。
4) 大学院の広報の強化策として大学院説明会を本学で開催した。
5) 研究指導の強化の一環として、論文レビュー報告会を導入し実施した。
6) 研究計画報告会、研究中間報告会、研究成果報告会の企画・運営を行った。

１－17　看護研究交流センター運営委員会

構成員　甲斐 倫明、Gerald T. Shirley、桜井 礼子、桑野 紀子、江本 華子、佐藤 玉枝、赤星 琴美、佐藤 弥生、福田 広美、草野 淳子、伊東 朋子、安部 真紀、後藤 成人、村嶋 幸代（オブザーバー）

１．国際交流部門
１）JICA/モザンビーク国「医療従事者学校教員指導能力強化」プログラム（７月）
「医療従事者学校教員等指導能力強化(看護教員)」研修を看護教育研修員８名に実施
２）Dr. Kathy Magilvy来学（University of Colorado）（11月）
講演「Circles of Care and Fragmentation of Care Discovered through Ethnography」
３）韓国：江原生活科学高校（55名）視察平成（11月）

２．地域交流部門
１）大分県国民健康保険団体連合会との連携
大分県保険者協議会特定健診データ分析事業の協議、地区組織活動調査結果の分析
２）大分市ＣＫＤ対策事業の推進～ハイリスク者の家庭訪問調査
３）楽しく健康になれるまちづくり推進事業（豊後高田市）
４）在宅医療従事者資質向上事業
（１）DVD作成（在宅吸引・フィジカルアセスメント）
（２）研修
・ベッドサイドからの医療関連感染予防（講師：塚本容子氏）10月終了70名出席
・講演「アドバンストスキンケア最前線―エビデンスを使うそして創る」11月実施
　東京大学大学院医学系研究科老年看護学創傷看護学分野真田弘美教授　参加約200名
・フィジカルアセスメント研修（９月～12月）大分市、竹田市、佐伯市
　講師：原正範氏、塩月成則氏、廣瀬福美氏、中村恒之氏　参加者約40名

５）文部科学省地（知）の拠点整備事業
「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」
（１）第１回COC事業推進会議平成（10月）
（２）平成25年度テスト訪問（12月）
（３）H25事業報告会（富士見が丘団地１月、野津原地区２月）
６）第1回看護研究交流会（３月）看護研究支援７施設の関係者出席
７）研究支援・大分県看護協会講師派遣

３．継続教育部門
１）ホームカミングデー開催；参加者（講演）63人、参加者（交流会）53人
２）大分県立厚生学院同窓会（草の実会）１０月トキハ会館
学長特別講演「大分県立看護科学大学の現状の状況と大分県の看護の未来」
江月同窓会長、田中副会長、河野委員、事務局長、伊東部門長出席、他１００名出席。
３）卒業生の動向、名簿作成(学部卒業生)の充実
４）大分県立看護科学大学公式Facebookを開設

４．NP推進部門
１）平成25年度修了生フォローアップ会議開催
２）平成25年度日本NP協議会第４回試験委員会開催
３）平成25年度日本NP協議会研究会開催
４）平成25年度日本NP協議会資格認定試験開催
５）NP講演会「米国におけるNPと医師との連携」スタンフォード大学病院ICU御手洗剛医師（１月）

１）　インターネットジャーナルＷＧ

構成員　甲斐 倫明、平野 亙、Gerald T. Shirley、定金 香里、河野 梢子、森田 慶子

大学院や学会等各種イベントでの広報、「看護科学研究」第11巻第１号、第２号および第12巻第１号の審査・編集・発刊に関する実務を行った。

２）　大学公式 facebook ＷＧ

構成員　後藤 成人、江本 華子、石川 純也

平成25年度11月より運用を開始し、大学行事の予告・開催報告や日々のキャンパスの様子、本学ホームページの紹介などを卒業生、在校生、一般に向け、計43件を発信した。

１－18　衛生委員会

構成員　安部 昭邦（１号委員）、角 匡幸（２号委員）、赤星 琴美（３号委員）、
影山 隆之、朝倉 泰三（以上、４号委員）、津留 由美（オブザーバー）

本年度、３回の衛生委員会を開催し、苦情相談および健康相談等について再確認するとともに、定期健康診断結果の概要報告や職場巡視を行った。

昨年度に引き続き、メタボリックのフォローアップとして『健康増進活動支援事業』を実施し、教職員44名が参加した。事業に関連して、『大学周辺ウォーキングマップ』を作成するなど教職員の健康増進に努めた。

また、職場巡視の結果、キャンパスプロムナードに６基の外灯を設置し安全対策を行った。

１－19　評価委員会

構成員　市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 昭邦、藤内 美保

前年度と同じ評価方法に従って実施した。学長指名の教員評価委員に藤内教授が指名された。１月17日を評価書の提出期限として、教員評価結果を２月１日に学長報告し、最終評価結果を２月7日に各教員に配付した。

１－20　ＮＰプロジェクト

構成員　村嶋 幸代、藤内 美保、安部 昭邦、石田 佳代子、江月優子、小野 美喜、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、草野 淳子、桜井 礼子、工藤　哲生、中林 博道、高野 政子、福田 広美、松本 初美、宮内 信治

ＮＰプロジェクトは平成25年度の年度計画を掲げ、1）カリキュラム部会、2）修了生フォローアップ部会、3）研究・広報部会の３部会を設定した。また、厚労省のチーム医療推進会議などの国の情勢を常に把握しながら対応した。

1）カリキュラム部会：

（1）実習関連：修士１年次生は６名、修士２年次生は５名で、そのうち２名は長期履修者である。１年次学生１名が小児NPコースで学んでいる。その他は老年ＮＰ学生である。修士１年次生は修了生が活動する施設でNP Early Exposure実習を１週間実施した。年度末に進級試験を実施した。修士２年次生は、実習前試験、14週間の実習、課題研究、修了試験とハードなスケジュールをこなした。学生の実習施設の交通費などの検討を行った。

（2）老年ＮＰの実習施設の指導者との合同会議を実習前と実習終了後に２回実施した。
厚生労働省の養成試行事業の予算がなくなり、交通費のみの参加を依頼したが、非常に多くの方の参加があり、実習に関する理解が得られている。

（3）海外のＮＰ研修を従来は韓国視察を行っていたが、今年から米国のＮＰの視察を希望したいとの学生の希望があり、ハワイで活動するＮＰの研修をＮＰ協議会が企画し、本学から福田広美准教授（看護研究交流センター専任教員　ＮＰ推進部門）が参加した。

（4）就職支援は、３名の学生に対して希望を聞きながら就職支援を行った。１名は長崎、２名は大分県内に就職が決定した。

2）修了生フォローアップ会議

（1）修了生のフォローアップ会議を３ヶ月に１度開催した。県外の修了生の参加もあった。それぞれの活動の近況報告、厚労省の業務調査試行事業の指定の進捗状況を報告したり、大学への要望などの意見を聞き、可能な限り対応できるようにした。

（2）来年度のフォローアップ会議がより有意義となるための会議内容と年間計画を検討した。

（3）ＮＰ修了生によるフィジカルアセスメント研修　①学内研修9月28日担当：原氏
2月14日担当：原田氏、黒木氏　②大分県内出前研修　老人保健施設　担当：塩月氏、広瀬氏、村井氏

3）研究・広報部会

（1）以下の５つの研究を推進した。①老健施設における特定看護師の効果に関する研究、②医行為に関する研究、③修了後１年目のon the job trainingの研修に関する研究、④Donabedianの質評価に関する研究で英文レビューを行った。

（2）大分県立看護科学大学競争的研究費のプロジェクト研究費を獲得した。

（3）講演会を行った。①7月19日：大田エリカ先生（成育医療センタ室長）「特定看護師の効果を可視化するための戦略」②10月25日　塚本容子先生（北海道医療大学教授）PICCの理論と実践
③10月28日　学内国際会議1Dr. K. Francis氏の講演、ディスカッションを開催　④11月26日　Dr. Kathy Magilvy氏(コロラド大学教授) NPの最新情報についての講義 ④1月9日　御手洗剛医師　スタンフォード大学　NPと働く医師の立場から講演

（4）広報については、雑誌、学会発表、日本看護科学学会での交流集会、講演会などで推進した。

（5）修了生の４名の活動報告がインターネットジャーナルに掲載された。

（6）日本看護科学学会交流集会（東京）「“特定看護師”の今後を支える支援体制について考える」を開催した。

4）制度化のための活動

（1）法制化に向けて、日本NP協議会を一般社団法人化するための準備を進め、日本NP教育大学院協議会と名称変更を予定し、本学が事務局を担うことが決定した。

（2）日本ＮＰ協議会は、本年度に修了するプライマリケア領域成人・老年、プライマリケア領域小児、クリティカルケア領域のＮＰ資格認定試験を実施することとしＮＰ資格認定試験ワーキンググループが準備を行い、３月２日に試験を東京で実施した。本学学生は３名受験し全員が合格した。この試験の質保証のため、ＮＰ資格認定試験評価委員会を開催した。

平成25年度は、看護研究交流センターにＮＰ部門の専任教員が配属されたため、カリキュラムに関すること、研究に関することを重点的に活動している。今後制度化にむけての定員の見直しや広報活動を活発に行うことを予定している。

１－21　健康増進プロジェクト

構成員　稲垣 敦、桜井 礼子、佐藤 弥生、吉田 智子、赤星 琴美、岡元 愛、河野 梢子、田中 佳子、植田 みゆき、河野 優子

【事業・研究協力】
・ 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業「健康・体力・人づくり推進事業」（大分県教育委員会）
・ 東九州メディカルバレー医療機器研究開発補助事業「脳卒中患者の機能回復のための二筋同時電気刺激装置」（デンケン、井野辺病院）
・ 大分県地域課題提案事業「楽しく健康になれるまちづくり推進事業」（豊後高田市）
・ 森林セラピー事業（大分市）
・ 大分空港施設改善プロジェクト（県産学官連携推進会議、県総合交通対策課、㈱大分空港ターミナル、日本文理大、芸短大、県産業科学技術センターほか）
・ 大分県介護予防二次予防事業（大分県）
・ 姫島村健康づくり事業（姫島村）
・ スポーツ救護ナース及びスポーツ救護士の育成事業（大分県スポーツ学会、大分県看護協会）
・ 温泉と運動プログラム研究会（大分県、別府市ほか）
・ Smart Life Project（厚生労働省）

【研究活動】
・ 大分県介護予防運動「めじろん元気アップ体操」の研究・開発
・ 姫島村住民の健康寿命と運動機能（第72回日本公衆衛生学会総会10/23）
・ 脳卒中患者の機能回復のための二筋同時電気刺激装置の開発（東九州メディカルバレー構想）
・ 大分市森林セラピーロード歩行のエネルギー代謝（高崎山9/5、9/24、9/30、10/4、宇曾山12/14、鎧ヶ岳12/17、1/10、平成森林公園3/16）
・ 地域在住高齢者の運動器障害の実態と日常生活の困難度との関連
・ 地域在住高齢者が５年間で経験したライフイベントと生活への影響
・ 高齢者の社会参加とＱＯＬおよび生活習慣との関連
・ 温泉入浴のリラクゼーション因子
・ 一回の軽登山がセルフエフィカシーおよび達成動機に及ぼす影響

【地域貢献・社会貢献】
・ 健康教室など：野津原地区高齢者サロン（4/16）、野津原地区児童育成クラブ（7/22～8/30）、大分市の高齢者サロン５ヶ所（新町、田島、竹ノ内、上詰、野津原）、健康イノベーション会議（豊後高田市10/18、10/29、11/12、11/26、12/10、12/20）
・ 講演・研修会：竹田市ヘルスサポーター養成講座（竹田市総合社会福祉センター6/20）、大分県介護予防二次予防事業モデル研修会（別府7/29）、スポーツ救護講習会（県看護研修会館8/24、3/8）、楽しく健康になれるまちづくり研究会（9/26、1/28）、体力チェックサポーター養成研修会（本学9/29、別府大10/13、日本文理大11/17）、健康フェア（西別府病院10/19）、大分県介護予防二次予防事業強化研修会（県庁1/20）、姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター1/23, 2/4）
・ 健康・体力チェック等：本学若葉祭（5/12-13）、本学オープンキャンパス（7/14:45名）、ホルトホール大分開館記念イベント（7/21:1755名）、大分トリニータホームゲーム（大銀ドーム7/10:500名、9/21:646名、11/10:564名）、おおいたスポーツ広場（コンパルホール9/16:690名）、大分市野津原地区ななせの里まつり（みどりの王国11/3、295名）、大分空港（12/8: 296名、12/15: 326名、2/2: 388名、2/9: 530名）。
・ 森林セラピートレイルランニング大会実行委員、救護班（3/2）、エネルギー代謝量測定（3/16）
・ 森林探検ウォーキング時の健康チェック（3/29）

【広報など】
・ めじろん元気アップ体操を大分県HPに掲載（http://www.pref.oita.jp/site/790/mejironntaisou.html）
・ 「旬感3ch」（OBS 10/16取材10/23放映）
・ 「たけしの健康エンターテインメント!みんなの家庭の医学」（日本テレビ11/14取材）

・ 「絶好調！」（毎日テレビ1/16取材）
・ 「めじろん元気アップ体操」（姫島村CTV 2/4～）
・ 若葉祭（5/12-13）、オープンキャンパス（7/22）でパネル展示
・ 本学のパンフレットで活動を紹介

１－22　看護系全体会議

構成員　村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、看護系教員全員

看護系全体会議は例年３回開催した。

第１回看護系全体会議（４月）

３年次の成人・老年看護学実習では学生の成長段階に合わせた指導体制とし昨年度原則常駐を試行した結果、今年度本格的な原則常駐の指導体制とする。初期体験実習も20施設から18施設に変更となった。大学院の実習では、NPコース、広域看護学コース、助産コースで長期の実習が予定されている。

実習関連ワーキンググループから、看護技術修得プログラムは平成23年度改正カリキュラムで昨年度から看護アセスメント学実習の前の12月に第１段階技術チェックを新たに加え、これまで３段階だったものを４段階の技術チェックとした。４年次のサードステップでは看護技術の学習ツールとしてe-ラーニングの「エルゼビア ナーシング・スキル日本版」を導入予定である。

第２回看護系全体会議（７月）

1）各実習の報告を行い、実習に関する情報を共有した。

2）来年度から新たになる総合看護学実習の目標や方法についての検討内容が報告された。実習指導者・教員交流会を7月31日に大分県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院と合同で実施する計画を進めている。

3）現在、カリキュラム検討を行っており、カリキュラムポリシーや４年次に行った実習アンケート結果の報告がされた。

第３回看護系全体会議（12月）

1）実習報告では成人・老年Ⅱ看護学実習は、「原則」常駐という指導体制および患者を複数担当するなどの多重課題を導入した。大部分は達成感があったようだ。小児・母性看護学実習はほぼ例年通りで、無事に実習が終了した。精神看護学実習は今年度から障がい者福祉事業施設の実習を導入し対象者を生活者として捉えることができた。大学院のNPコース、助産コース、広域看護学コースの実習報告を行った。

実習関連WGより、看護技術修得プログラムの報告、総合看護学実習の目標を共有した。実習代表者会議から、カリキュラム検討において、看護技術修得プログラムを検討したが４段階のプログラムを踏襲することが決定した。平成26年度教員配置の方針の説明をした。20週ルールを見直し担当教員の専門領域を生かしながら、領域の枠を超えて実習指導する。学生の学習到達度を基本に考え、学生指導の質を落とさないよう教員配置を考慮することが確認された。
COC実習についての平成27年度カリキュラムから導入され、今年度は一部の学生が家庭訪問を試行した報告がされた。

今年度試行で行った実習指導体制の評価を生かし、さらなる改善を図る。

２　学内行事の概要
２－１　学年暦

前期

4月

8	入学式
9	全学オリエンテーション
10,11	新入生オリエンテーション
10	2～4年次生授業開始
9,17	健康診断
17	交通安全講座（自動車:4年次生）
12～19	前期履修登録
12	1年次生授業開始
26	全学スポーツ交流会

5月

7～6/21	地域看護学実習， 在宅看護学実習Ⅱ（4年次生）
8	キャンパスクリーンデー
11,12	若葉祭
27～6/7	老年看護学実習（3年次生）

6月

10	前期後半授業開始
12	学生大会
19	開学記念日（休講）
24～7/5	総合看護学実習（4年次生）
17～8/9	助産学実習・前半（4年次生選択）

7月

9～17	初期体験実習（1年次生）
14	オープンキャンパス
14～21	学生交流プログラム（ソウル大学より）
22	夏期休業開始
22～8/6	小児看護（保育所）実習（3年次生）

8月

26～30	助産学実習・後半（4年次生選択）
24	大学院入学試験

9月

5	夏期休業終了
6～	成人急性期，成人・老年慢性期，小児，母性，

後期

10月

1	後期授業開始
1～11	後期履修登録
26	看護国際フォーラム

11月

23	特別選抜試験（推薦・社会人）
～ 29	成人急性期，成人・老年慢性期，小児，母性， 精神看護学実習（3年次生）
29	卒業研究要旨提出締切（4年次生）

12月

2	後期後半授業開始
6 正午	卒業研究論文提出締切（4年次生）
9,10	卒業研究発表会
24	冬期休業開始

1月

7	冬期休業終了
10～28	基礎看護学実習（1年次生）
17	大学入試センター試験準備 （2,3,4年次生休講）
18,19	大学入試センター試験
31～2/17	看護ｱｾｽﾒﾝﾄ学実習（2年次生）

2月

下旬	看護師・保健師および助産師国家試験
25	一般選抜試験（前期）および特別選抜 試験(私費外国人留学生)（休講）
27	進級試験（2年次生）
28	後期授業終了

3月

1	春期休業開始

２－２　オープンキャンパス

平成25年度の開催は、７月14日（日）に実施し、参加者は300名で、本学について大いにアピールできた。講堂での説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。食堂も営業するようにし、保護者等来学者の利用の便宜を図った。教育・研究の展示はパネル展示物を一部、新規作成した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業などを企画した。在学生が相談コーナーや実習室への誘導を行うことで、高校生や保護者には在学生との交流の機会ともなり、入学後のイメージを深めることができたと思われる。

２－３　公開講座

「看護教育の最前線」と題した有料公開講座を９月13日（小児看護の倫理－教育最前線:高野教授）、９月27日（からだを看る看護教育:藤内教授）、10月11日（高齢者看護の教育最前線：小野教授）、10月25日（PM2.5の健康への影響:吉田成一准教授）の学内講座と、中津市で学外講座、平成26年３月７日（在宅療養における訪問看護の役割と活用）の計５回を開催した。参加者は延べ66名であった。事前にパンフレットを3,000部作成し、地域への広報に加えて、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある団体等への参加を呼びかけた。

２－４　第15回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「在宅ケアの推進とその方略 -臨床・退院支援・地域における看護の連携-」をテーマに、平成25年10月26日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。オーストラリアから１名、韓国から１名、国内から１名の講師を招聘した。参加者は251名と盛況であった。

２－５　NP国際会議

平成25年10月28日（月）に、本学にて、第13回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。オーストラリアから１名の講師を招聘した。

２－６　第16回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会

平成26年3月17日（月）に本学23講義室で開催した。姉妹大学の韓国ソウル国立大学校看護大学から２名の講師を招聘した。海外講師２名および本学教員２名の計４名が講演を行い、参加者と共に活発に意見交換を行った。

２－７　姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：
　ソウル国立大学校看護大学から大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計８名（７月14日～７月21日までの８日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

本学の学部生および大学院生の派遣：
　大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計８名を（８月18日～25日までの８日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

２－８　若葉祭（大学祭）

　５月11日、12日に開催された若葉祭にて教員イベントの募集や調整をした。参加者は２日間で約1000名を超えており、大学の現在の姿を伝える場としては有用であった。実習室の廊下に掲示したパネルは、大学概要、カリキュラム、大学院概要、研究室紹介などで、変更が生じているものは更新した。教員イベントを学生とともに実施することで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。実習室・実験室、カレッジホールにて、妊婦の疑似体験、小児の救急法の体験、放射線の解説、身体組成の解説などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。その他にアロマハンドマッサージのケア技術の実際、アンチエイジング・エクササイズや猫車などで来場者に親しみを持ってもらうイベントなど地域住民が参加して楽しめるプログラムを展開した。教員の研究紹介では、６人のポスターの掲示を行い、７月のオープンキャンパスの案内チラシ、今年度版大学案内パンフレットを自由配布し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

２－９　地域ふれあい祭

　平成25年度の地域ふれあい祭りは、大分市（野津原支所）主催のみどりの王国で開催された「ななせの里まつり」11/3（日）に参加した。当日は約5,000人が参加した。大学のテントでは、健康指導・健康チェックコーナーを担当し、健康増進プロジェクトと広報公開講座委員会メンバーで協働して、血圧測定、体成分分析、栄養評価などの健康指導・健康チェックを実施した。また、広報では、文部省「地（知）の拠点整備事業（ＣＯＣ）」で野津原地区、富士見ヶ丘地区の看護学生が予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業を行うことをＰＲした。パネル展示とともに大学案内パンフレットや広報用チラシなどを配布した。駕籠かきレースでは、学長を含む５チームが参加した。

２－10　アニュアル・ミーティング

　本年度のアニュアルミーティングは、３月７日に開催した。本年度より、口頭発表とポスター発表を併用した。口頭発表が11件（奨励研究6件、先端研究4件、プロジェクト研究1件）、ポスター発表が10件だった。

３　教育活動

３－１　平成 26 年度入学者選抜状況

１）概　要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学　部	学　科	入学定員	募集人員					
			一般入試		特別入試			
			前期日程	後期日程	推薦		社会人	私費外国人留学生
					県内	県外		
看護学部	看護学科	80 人	35 人	10 人	35 人	注 1) 5 人以内	注 1) 若干名	注 2) 若干名

注 1）推薦県外の「5 人以内」及び社会人の募集人員「5 人以内」は推薦の（県内）35 人に含める。

注 2）私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 35 人に含める。

入学者選抜試験の概略　（単位：人、倍、%）

区　分			志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
							計	県内（率）	男（率）
特別	推薦	県内	79	79	32	2.5	32	32(100.0)	4(12.5)
		県外	15	15	3	5.0	3	0(0.0)	1(33.3)
	社会人		4	4	0	0.0	0	0(0.0)	0(0.0)
	計		98	98	35	2.7	35	32(91.4)	5(14.3)
一般	前期		224	205	45	4.6	37	11(29.7)	1(2.7)
	後期		262	115	15	7.7	12	5(41.7)	1(8.3)
	計		486	320	60	5.3	49	16(32.7)	2(4.1)
合　計			584	418	95	4.4	84	48(57.1)	7(8.3)

試験教科等

区　分		教　科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接	平成 25 年 11 月 23 日（土）	平成 25 年 11 月 1 日（金）～11 月 7 日（木）
	社会人			
一般	前期	総合問題、面接	平成 26 年 2 月 25 日（火）	平成 26 年 1 月 27 日（月）～2 月 5 日（水）
	後期	総合問題、面接	平成 26 年 3 月 12 日（水）	

２）特別入学試験

① 推薦入試

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総

合問題」と「面接」により実施した。

② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を３年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

３）一般入学試験

平成 26 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

<table>
<tr><th>日　程</th><th>教科名</th><th colspan="2">科　　目　　名</th><th>教科・科目数</th></tr>
<tr><td rowspan="4">前期日程</td><td>国　語</td><td colspan="2">『国語』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">４教科６科目</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』、『数学Ⅱ・数学Ｂ』</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td colspan="2">「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」から２科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』（リスニングを含む）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">後期日程</td><td>国　語</td><td>『国語』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">３教科
３科目
を選択</td><td rowspan="5">４教科４科目</td></tr>
<tr><td>地理歴史
公　　民</td><td>「世界史Ａ」、「世界史Ｂ」、「日本史Ａ」、
「日本史Ｂ」、「地理Ａ」、「地理Ｂ」、
「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・経済』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td>『数学Ⅰ・数学Ａ』、「数学Ⅱ」、
『数学Ⅱ・数学Ｂ』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td>「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」
から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』（リスニングを含む）</td></tr>
</table>

注１）「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注２）「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位３教科を合否判定に用います。

注３）前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注４）上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

３－２ 平成 26 年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」、「専門問題」（実践者養成のみ）及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		３名
			実践者養成	ＮＰコース	５名
				管理コース	２名
				広域看護学コース	５名
				助産学コース	10 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	28	28	20	1.4	19	10(　52.6)	2(　10.5)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 専門問題 面　　接	平成 25 年 ８月 24 日（土）	平成 25 年 ８月１日（木）～８月８日（木）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	２名

試験の概略　（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	2	2	2	1.0	2	2(100.0)	2(100.0)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 25 年 8 月 24 日（土）	平成 25 年 8 月 1 日（木）～8 月 8 日（木）

３－３　平成 26 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」と「口頭試問」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名

試験の概略　（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	0(　00.0)	0(　00.0)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 25 年 8 月 24 日（土）	平成 25 年 8 月 1 日（木）～8 月 8 日（木）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成する

こと、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、募集した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2 名

試験の概略　（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(　00.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 口頭試問	平成 25 年 8 月 24 日（土）	平成 25 年 8 月 1 日（木）～8 月 8 日（木）

３－ ４　平成 26 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成２６年３月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略　（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	3	3	3	1.0	3	3(　100.0)	3(100.0)

審査科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
特別研究 面　　接	平成 25 年 8 月 26 日（月）	平成 25 年 7 月 17 日（水）～7 月 24 日（水）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的とする。対象者はいなかった。

３－５　進学相談

概　要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験についてＰＲするため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内 18 カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、８，０４９人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、２５９人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は３５人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

３－６　在学生の状況（平成 25 年 4 月 1 日現在）

学生総数　382 名（学部生 328 名、院生 54 名）

（単位：人）

学　　生　　数					
	計	県　内	県　外	男	女
1　年　次　生	87	55	32	8	79
2　年　次　生	83	54	29	12	71
3　年　次　生	82	47	35	8	74
4　年　次　生	76	49	27	12	64
（うち編入学生）	(2)	(2)			(2)
計	**328**	**205**	**123**	**40**	**288**
割　合（%）	100.0	62.5	37.5	12.2	87.8
大学院博士前期（１年次生）	19	13	6	3	16
大学院博士前期（２年次生）	16	9	7	4	12
大学院博士後期（１年次生）	4	2	2	1	3
大学院博士後期（２年次生）	5	4	1	1	4
大学院博士後期（３年次生）	10	7	3	1	9
計	**54**	**35**	**19**	**10**	**44**
合　計	**382**	**240**	**142**	**50**	**332**

３－７　各研究室の教育活動

３－７－１　生体科学研究室

１　教育方針

優秀な看護職を育てるという本学の第一の使命に沿って、本研究室では生体（人体）の構造やしくみ、働きを十分に理解した看護職を育てるということを教育目標に掲げている。

２　教育活動の現状と課題

現状においては、学部１年次生ならびに大学院生に対しての生体科学（構造、生理、代謝）についての教育効果は十分であると考える。今後の課題としては、学部１年次生の学習習熟度をさらに向上させることである。

３　科目の教育活動

１）　生体構造論

１年次前期

中林 博道、岩崎 香子

学部１年次生に対して生体（人体）の構造（解剖学）についての講義を行った。

２）　生体機能論

１年次前期

中林 博道、岩崎 香子

学部１年次生に対して生体（人体）のはたらき（機能）についての講義を行った。

３）　生体代謝論

１年次後期

安部 眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義した。生体分子の種類、性質、機能について講義した。生体での反応がイメージできるように、低分子から高分子へと話しを進め、酵素、ビタミン、ミネラル、生理活性物質について解説を加えた。クエン酸回路、電子伝達系、酸化的リン酸化によるエネルギー代謝を生化学と、マクロな視点から栄養学で講義した。栄養の中では、対象者に対して食事指導ができるように、食事バランスガイドや食品についての内容も加えている。

４）　生体科学特論

４年次前期

安部 眞佐子

疾病時とライフステージでの栄養学をとりあげ、食事療法について代謝メカニズムからの解説を加えた。栄養補給ルート、循環器疾患の栄養、消化器疾患の栄養、代謝性疾患の栄養、妊娠期と授乳期の栄養、食品表示について講義した。

５）　健康科学実験　Ⅰ　組織学

中林 博道

学部２年次生に対して人体の代表的な８つの組織（肺、胃、肝臓、膵臓、甲状腺、腎臓、精巣、卵巣）について概説した上で実際に顕微鏡下に組織を観察しスケッチし、人体の組織についての学生の理解を深めた。

６）　健康科学実験　II　心電図と心拍変動

松本 佳那子、安部 眞佐子、岩崎 香子

心電図が意味する生体情報について解説を行い、正常波形の読み取りおよび異常波形との区別を講義した。また学生全員が個人の12誘導心電図を測定し、電気軸の測定を行った。

７）　健康科学実験　III　食物栄養学実習

安部 眞佐子

健康を維持増進させるために有効な食事について実習した。特に、生活習慣病予防として減塩を考慮した食事の摂り方を、塩分計を用いた食品の分析と現在の自分の食事中の塩分量計算、並びに、尿中のナトリウム濃度の測定による一日の塩分摂取量の把握をとおして理解するように務めた。また、嚥下困難者のための嚥下補助食品をとりあげ、物性を観察し試食することによって理解できるようにした。

４　卒業研究

1. 大分市東部地域の中核救急施設における来院時心肺停止症例の検討
2. 悪性グリオーマ細胞に対する S14161の抗腫瘍効果について
3. 1歳6か月健診時までの食物アレルギーの発症と両親のアレルギー既往について
4. 妊娠前の体格別にみたつわりいて
5. 透析患者の動物性蛋白質の摂取割合とQOLとの関連
6. 透析患者の食欲とQOLの関連-食事摂取状況調査を中心に-

３－７－２　生体反応学研究室

１　教育方針

生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の作用、病原微生物による生体反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が１年次～４年次に行われる看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。

２　教育活動の現状と課題

本年度は平成21年度カリキュラム（病態特論：４年次生）と平成23年度カリキュラム（生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：１年次生、生体薬物反応論：２年次生）の中で講義を進めている。看護学を学ぶ学生はこれらの専門基礎分野の科目の理解度が低く、２～４年次での実習に結びつけられていない場合が多い。また２年次で行なっている進級試験でもこれらの科目の正答率は低い。それ故に、看護実践を行ううえで、様々な外的、内的要因によって起こる疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めることが重要である。教育上の工夫として、生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。しかしながら現状では３年、４年になっても生体薬物反応論の単位が取得できない学生がいる。マンツーマン方式で学生が理解できるまで教育、再試験を行っている。生体反応学各論では、看護専門基礎の看護疾病病態論の講義に繋げるために、系統別疾患を病理学総論の病気の基本事項と結びつて理解させるのに努めている。

３　科目の教育活動

１）　生体反応学概論

１年次後期

市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学総論を講義している。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリントを配布してパワーポインも使って講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

２） 生体反応学各論

１年次後期

市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学各論を講義している。生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

３） 微生物免疫論

１年次後期

吉田 成一、西園 晃、松本 昴

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学、アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍と免疫。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

学生の学習修得状況は例年と比べて高い学生から低い学生まで幅広く分布した。また、学習修得状況の低い学生の割合は例年より低かった。

４） 生体薬物反応論I

２年次前期

吉田 成一

本年度より、生体薬物反応論Iとして昨年度まで開講していた生体薬物反応論のうち薬理学総論、末梢神経系に作用する医薬品に関する講義を行う科目として開講した。

学習範囲が絞られたことから、履修者の学習修得状況は比較的高いものであった。この点は、生体薬物反応論を生体薬物反応論IとIIの二科目にしたことの価値を見いだせるものであった。しかし、そのような状況の中、学習取得状況が芳しくない履修者がおり、今後対策が必要である。また、生体薬物反応論Iの単位を取得せずに、次年度、同時期に開講する生体薬物反応論IIを履修する履修者に対して、生体薬物反応論IIの履修までに、生体薬物反応論Iに関する理解を深めるよう指導する必要がある。

５） 病態特論

４年次前期後半

市瀬 孝道

本講義では、これまで教科書中心で病気や病態を講義してきたものを臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。例年どおり、県立病院の臨床検査部において、1回目、2回目の講義では炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。3回目の講義では県立病院病理部ト部先生によるスライドによるプレゼンテーションも取入れた。

６）　健康科学実験　IV 血液検査

定金 香里

貧血・感染症に関わるヘマトクリット値の測定、CRP検査、赤・白血球数測定、末梢血血球・組織球の形態観察を行った。実習では、ラット静脈血を検体とした。検査方法はヒトの血液検査に準じて行い、それぞれミクロヘマトクリット法、CRP定性測定法、ミクロピペット法による視算法、ディフクイック染色法を用いた。標本の作製は学生が行い、貧血かどうかの診断も教員の指導の後、学生自身が判定した。また診断基準に関する考察や計算演習も行いレポートとして提出した。

７）　健康科学実験　V　基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

８）　健康科学実験　VI　ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。例年と同様にラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

４　卒業研究

1. 煙霧時に採取したPM2.5の気管支喘息増悪作用
2. 細菌成分のリポポリサッカライド（LPS）と黄砂の気管支喘息増悪作用
3. 越境微小粒子（PM2.5）のマウス雄生生殖機能に与える影響
4. フタル酸ジイソノニルの低用量経母乳曝露によるアトピー性皮膚炎増悪作用
5. 黄砂付着微生物由来成分のLPSによる雄性生殖機能への影響とそのメカニズム探索
6. アトピー性皮膚炎を増悪する手指消毒薬、増悪しない手指消毒薬の作用機序

３－７－３　健康運動学研究室

１　教育方針

①　体を動かすことの楽しさを体感する
②　健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する
③　個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する
④　自分に合った運動を見つける
⑤　運動習慣を身につける
⑥　科学自体や科学的なものの見方や考え方などを知る
⑦　ボランティアを通して様々なことに気づき、考える

２　教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れ、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

大学に入学すると身体活動量は低下し、特に、一人暮らしになると、食事や休養等がおろそかになりがちである。これにより、体力の低下、体脂肪率の増加、ストレス、自律神経活動の低下やアンバランス等も懸念される。このような点を考慮して、授業にはできるだけ実習を入れて体を動かす機会を増やし、１年生の健康運動では運動強度と運動量の確保のために、行動変容理論等を活用している。

健康運動ボランティア演習も3年目を迎え、多くの教職員の協力で17のイベントに学生がボランティアとして参加した。当日、学生の発言や様子、レポートから有意義な体験が出来ていることが伺える。ある学生は、何時間も立ったままで健康チェックをしながら、笑顔で思わず「すごく楽しい！」と漏らした。この授業では、学生が複数のボランティア体験から何かを見つけ出す、いわゆる発見学習であり、帰納的プロセスを重視しているのが特徴である。これは科学的思考の発達にもつながる。

来年度以降、科目の編成が変わってくるため、運動療法や運動指導に関する内容を独立した科目として扱えないので、他の科目の流れの中で扱えるように工夫する必要がある。

３　科目の教育活動

１）　健康運動ボランティア演習

１年次前期

稲垣 敦

教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に19のイベント（うち2つは雨天中止）を提示して希望調査を行って調整し、各学生が3つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。

２）　健康運動

１年次後期

稲垣 敦、大津留 麗理

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーション、ニュースポーツ、バドミントンに加え、今年から学外講師によるヨーガを取り入れた。運動量や運動強度の確保にも配慮した。また、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、社会や個人におけるレクリエーションの重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

３）　身体運動科学

２年次前期

稲垣 敦

はじめに科学についての授業を行い、人間固有ともいえる二足歩行や人間にはできなかった飛行について考えた。また、生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義した。さらに、骨密度、身体部位別の体脂肪率・筋量等の測定実習も行った。

４）　健康運動学

２年次後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。また、これらに加え、運動療法について講義した。

５）　運動療法特論

３年次後期後半

稲垣 敦

カリキュラムの変更に伴い開講せず

６）　運動指導特論

４年次前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子、大津留 麗理

精神障害者の運動表現療法、レクリエーション、介護予防運動、ウォーキング、ネイチャーゲーム、ヨーガ等を体験し、指導法について解説した。

７）　健康科学実験　VII　呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにし、実験中は全ての学生に対し個々に指導した。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。計算方法のわからない学生には、個別に指導した。

４　卒業研究

1. 温泉入浴におけるリラクゼーション因子
2. 一回の登山が達成動機および自己効力感に及ぼす影響

３－７－４　人間関係学研究室

１　教育方針

人と喜びや苦しみを分かち合い、自他の独自性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。１）人間関係を形成し維持する方法についての体験的理解（「コミュニケーション論」）、２）カウンセリングの基礎理論の理解とコミュニケーションスキルの習得（「カウンセリング論」）、３）環境を認識し、環境に働きかける存在としての人の機能・発達についての基本的知識の理解（「人のこころの仕組み」）、４）人間を社会や集団内の人間関係を通して状況論的に理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、５）対人援助技術の習得（「行動療法と発達心理」「カウンセリング論」、６）発達心理学の知見をベースとした発達障害の理解（「行動療法と発達心理」）、７）看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「発達心理と行動療法」「カウンセリング論」）。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるようにするため、授業時間内に演習を行ったり、学生同士が話し合い交流する時間を確保している。授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

２　教育活動の現状と課題

基本となる教育目標は、人間の行動の法則性に関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解および体験である。表面的な理解に留まることのないよう、レポート作成、カウンセリングスキル実践、ペアワークなど、アクティブラーニングの機会を取り入れている。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと結びつけている。第20回大学教育研究フォーラムに置いて、ペアワークのアセスメントツールの開発について発表した。

課題としては、ペアワークの際の学生間交流を活性化すること、時間外学習環境を充実させることを挙げる。

３　科目の教育活動

１）　人のこころの仕組み

１年次前期

吉村 匠平

前期前半は１クラス編成、前期後半は２クラス編成で進行した。外界の対象や自分自身を認識する存在としての人間の機能の特徴、２年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識について、小実験＋ペア活動＋意見交流を行いながら授業を行った。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、教室全体での交流を求めた。学生が発言した場合、その場でクーポン（平常点１点）を付与し、発言を奨励した。時間外学習の機会としては、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求めた。ショートレポートに記載された学生のコメントの中で講義内容の理解を促進するものを「講義通信」として集約し配布した。評価における期末テストの比重を軽くし、平常の学習の積み重ねで評価を行うようにした。また、ネコバス上に講義内容の理解を促進するための自己学習課題を提示し、提出者には平常点を付与した。

２）　コミュニケーション論

１年次前期

関根 剛

コミュニケーションは、情報の受信－理解－発信の繰り返しである事を軸にして、それぞれの領域についての知識とスキルに関する講義を実施している。まず、これらを体験的に理解させる為のグループエクササイズ、受信として行動観察、発信としてプレゼンテーション、全体を通したプロセスレコード等を行った。また、グループワークの為に、リーダーシップ／メンバーシップについて講義を実施した。また、文化やインターネットにおけるコミュニケーションなどについても解説をした。全体として、座学として単なる知識の教授に終わらせず、エクササイズや演習など、実際に体験を通じて理解させることを重視している。

３）　人間関係学

１年次後期

吉村 匠平

自他の「人格、性格」をどのように理解するかについて、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。加えて、自他を状況論的に理解するための態度としてカウンセリングマインドについて取り上げた。授業は２クラス編成で進めた。教室の机をコの字型に配列し、学生相互がお互いの発言を対面状況で確認できる環境を構成した。前期の「こころの仕組み」同様、毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを行った上で全体への発言を求めた。発言ペアだけではなく、授業中のペアワークの態度が優れているペアに対してもクーポンを付与した。その結果、授業時間内の活動が活発になった。授業時間外の学習機会として、ショートレポートの作成に加え、ネコバス上に提示された自由課題への投稿を求めた。

４）　カウンセリング論

１年次後期

関根 剛

カウンセリングスキルの習得（基本的なマイクロカウンセリングとロールプレイ）、カウンセリング理論（基本となる精神分析、認知行動療法、クライエント中心療法の基本知識と看護場面での応用）、看護で関わる対象別の理解（看護師、養護教諭として関わる対象者－不登校・非行、災害被害者等－）を実施した。特にロールプレイでは、自己理解とスキル習得をねらって、ＩＣレコーダーを用いて、学生に自分自身の応対を確認させる方法をとっている。

５）　行動療法と発達心理

２年次前期

関根 剛、吉村 匠平

行動分析、認知行動療法の基礎について解説した上で、学生自身の日常の健康行動などの改善プログラム作成を行わせた。作成したプログラムは夏期休暇中に実施して、問題点や改善点などについてレポートさせるなど、具体的・体験的に行動療法的なアプローチを理解させた（行動療法）。

進化発達心理学の知見に基づき、言語発達、運動発達、アタッチメントについて、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進めた。加えて、ICFモデルによる発達障害の理解をベースとして、発達障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて理解させた（発達心理）。

４　卒業研究

１．小児科外来待合室の環境構成についての実態調査
２．コミックスに描かれた食行動の内容分析
３．健康行動における危機感を促す脅威刺激
４．動物介在療法における代替療法　動物動画視聴の心理的効果
５．誘導された快感情が表情認知に及ぼす影響

３－７－５　環境保健学研究室

１　教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。大学院教育では、広域看護学コースの環境保健学特論（必修）、NPコースの放射線・超音波診断演習の支援を中心に、健康科学専攻の院生の研究指導を行っている。

２　教育活動の現状と課題

１年次から２年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。２年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。４年次の選択科目である「環境倫理学」は選択する学生が年々少なくなっているため、平成23年度入学生からは、「環境リスク論」と統合して、演習方式で環境保健全体に関係する課題へのアプローチについて基礎力をアップする「環境疫学・生物学演習」に衣替えしている。。

３　科目の教育活動

１）　環境保健学概論

１年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)環境と健康に関する社会問題、2)環境保健の基礎概念（曝露、量反応関係）、3)環境保健の基礎概念（因果関係と相関関係）、4)がんの生物学、5)がん以外の健康影響、6)人における発がん、7)環境疫学:基礎、5)環境疫学:事例、9)安全性試験１、10)安全性試験２、11)ライフスタイルと健康、12)環境リスク論、13)環境リスク心理学、14)環境リスクの諸問題とまとめ、15)試験および解説

２）　環境保健学詳論

２年次前期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。
1)環境と健康、2)身の回りの環境因子、3)疫学データ解析、4)リスクアセスメント、5)リスク比較、6)リスクと便益、7)温熱環境と気圧、8)電気と電磁界、9)騒音、振動、悪臭、10)室内汚染、11)上水道と下水道、12)食品添加物と食品中の残留物質、13)食中毒、14)試験

３）　放射線健康科学

２年次後期前半

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。講義内容は次の通りである。
1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)放射線と物質との相互作用、5)放射線の線量、6)身近な放射線・放射線源、7)放射線の生体応答（DNA損傷と突然変異）、8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9)放射線の健康影響（確率的影響）、10)放射線の健康影響（確定的影響）、11)放射線リスクの評価とその不確かさ、12)安全の考え方と放射線防護基準、13)患者のための放射線防護、14)医療における放射線利用、15)試験および解説

４）　環境疫学・生物学演習

３年次後期後半

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

健康と環境（生活習慣を含む）との関係は疫学的な統計によって明らかになってくる知見、分子細胞レベルの生物的な仕組みを通して明らかになってくる知見とがある。基礎的事項の演習と事例を通して、健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みの基礎を論じた。講義内容は次の通りである。１）生命表と平均寿命・平均余命、２）データのバラツキとヒストグラム（血圧、身長、体重、BMI）、３）ポアソン分布と正規分布、４）年齢調整死亡率と標準化死亡比、５）ケースコントロール研究とオッズ比、６）コホート研究と相対リスク、７）バイオインフォマティクスとゲノム科学、８）バイオテクノロジー、９）染色体と遺伝子、10）遺伝性疾患と遺伝子診断、11）ウイルスとインフルエンザ

５）　環境倫理学

４年次前期

甲斐 倫明

環境倫理が看護とは距離のある名称であることから学生の関心は高くないため、生命倫理との比較を交えながら、現代の環境倫理問題を考える講義にしている。講義内容は次の通りである。1)倫理とは、2)代理母などの生殖問題、3)現代の生命倫理学の考え方、4)人間中心主義と生命中心主義、5)現代の環境問題と倫理、6)自然の生存権の問題、7)世代間倫理の問題、8)地球全体主義。講義のみでなく事例討論を行い、参加型の授業を行った。

６）　健康科学実験　VIII　放射線

石川 純也

本実験では、実験前に身近な放射線の種類、自然放射線または人工放射線による被ばく線量の概略、放射線測定方法及び測定機器の概略などについて講義し、実験では実際に屋内外の自然放射線量、人体を構成する物質の放射線量、臨床で想定されるベッドサイドでの放射線量を測定させた。これらの実験より、普段、人々が生活している空間における年間被ばく線量、人体を構成する物質からの年間被ばく線量などを算出させ、その量を具体的に把握させた。また、ベッドサイドの実験では、臨床の現場で日常的に使用される放射線による被ばく線量を具体的に把握させ、放射線防護の観点から非験者以外の患者や医療従事者に対して講じるべき措置について科学的に把握させた。

７）　健康科学実験　IX　測定誤差と変動

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子よる変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1)血圧測定の誤差と変動、2)体温測定の誤差と変動

８）　健康科学実験　Ｘ　染色体異常

小嶋 光明

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

４　卒業研究

1. ヒト正常線維芽細胞における放射線照射後の細胞動態の経時的変化
2. γ線を長期連続照射したマウスの造血幹細胞における細胞動態の変化
3. 造血幹細胞および前駆細胞の負フィードバック数理モデルによる造血細胞動態の 分析
4. 放射線照射したヒト正常線維芽細胞における細胞老化への影響
5. ヒト正常線維芽細胞における放射線照射後の活性酸素種及びDNA損傷の量的関係の変化
6. 小児白血病の原因としての環境要因と先天的要因に関するレビューからの考察

３－７－６　健康情報科学研究室

１　教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践と基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

２　教育活動の現状と課題

看護師のみの養成となった学部カリキュラムにおいて，EBNや看護業務の基盤となる知識・技術を教授することを主目的とした教育内容及び進め方についてもおおむねひと区切りとなった。看護の臨床における情報の取り扱い技術やEBNの中核となる疫学・統計学の知識ならびに一般教養としての統計学を中心とした数的処理能力、情報リテラシーの獲得を目指した教育内容を整理して、充実することができた。

しかし、教授内容に関する理解不足や興味関心の欠如といった問題への対策は今後も継続する必要を認めている。特に、数学的基礎能力の確認とリメディアル教育、自己学習への対応など、学生の状態に注意深く配慮しつつ，更に進めていくことが必要であろう。

３　科目の教育活動

１）　健康情報学

１年次前期

佐伯 圭一郎

保健統計・疫学領域の内容を教育することは継続しているが、で保健師に固有と考えられる部分を一部の事例紹介にとどめ、看護師としての基礎知識、EBNの導入としての内容を一層充実させた。

内容として、様々な保健統計の意味と現状、EBNのための基礎的な疫学の諸理論を教授した。また、健康情報処理演習の演習テーマとして、保健統計の現状について自ら情報収集と分析、疫学データの基本的な解析を設定し、知識の定着と応用能力の向上を図った。

２）　生物統計学

１年次後期

首藤 信通、佐伯 圭一郎

看護学研究を遂行する上で必要とされる記述統計学、推測統計学の基礎的知識を身につけることを目標に講義を行った。

講義の進行については、多くの履修者にとって本講義が本格的に統計学に触れる最初の機会となることから、特に重要となる推測統計学の中心的内容（区間推定、仮説検定）は、前週の講義内容に関する復習を冒頭に行い、確実な定着を図った。

問題演習については、講義の合間に具体的な問題を解く時間を与えることで、講義が単調になることを防ぐとともに、学生の理解度の把握や指導方法の調整に努めた。また、各単元ごとにレポートを課すことで、履修者個人の定着度の確認を行うとともに、自己学習を習慣づける取り組みを行った。

データ解析手順については、推測統計学を具体的に捉えるために、コイン投げ等の試行や簡単な官能検査の演習を行い、得られた実データに対して統計的仮説検定を適用するなどの実験的演習を取り入れた。また、健康情報処理演習において計算機を用いたデータ解析手順も併せて学ぶことで、理論と実践を切り離すことなく理解するための工夫を施した。

３）　健康情報処理演習

１年次

品川 佳満、首藤 信通、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立てるための技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール、ファイルサーバ、コミュニケーションサーバ）、データ管理、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、データベースの利用、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱う情報システム（オーダリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。さらに、コンピュータの技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラルなど情報を扱う上で重要となる知識についても解説を行った。

復習および技術習得のチェックが行えるように、コミュニケーションサーバを活用して練習問題や課題を提示した。

４）　実務情報処理学

４年次前期後半

佐伯 圭一郎

主に保健師領域におけるテーマをオムニバス形式で行った。主要なテーマは下記の通りである。

・疫学および保健統計、統計学の復習
・尺度の作成と評価
・統計パッケージSPSSの高度な演習
・因果推論
・外部講師（商業デザイナー）によるデザインの基本（講義と演習）

例年と同じく、履修登録者が17名と少なく、出席者がさらに少ない点は問題であったが、少人数で活発な意見交換も可能であった。

４　卒業研究

1. 多胎育児支援における助産師の役割
2. 看護師・看護学生における患者の個人情報取り扱い事故の分析
3. 新卒看護師の職場ストレスとコーピング　－文献研究による経年的変化の検討－
4. 我が国における近年の乳児死亡率に関連する要因について
5. 児童の虐待死に関する国際比較　－OECD加盟国のデータを用いた関連要因の検討－
6. サーカディアンリズム障害を有する認知症高齢者における高照度光療法の効果に関する文献的研究

３－７－７　言語学研究室

１　教育方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL（Computer Assisted Language Learning:コンピューターを用いたウェブ学習システム）によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

２　教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習する。１年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、２年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について３～４週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、１年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。１クラスを２グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてくることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生（１～４年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している（前期：１年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALLシステムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、７月22日（日）のオープンキャンパスにて、２回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

３　科目の教育活動

１）　英語Ⅰ－Ａ１

１年次前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、デイル・カーネギー、アン・リンドバーグ、ミッチ・アルボム、バートランド・ラッセルなど20世紀のエッセイや文学、哲学を題材にした英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源CDを活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる英文テキストの一部を暗唱することにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。

２） 英語Ｉ－Ａ２

１年次後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、リチャード・ファインマン、アインシュタインのエッセイに触れて理解を深めると同時に、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文として、新渡戸稲造『武士道』、鈴木大拙『禅と日本文化』を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。

３） 英語Ｉ－Ｂ１

１年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

４） 英語Ｉ－Ｂ２

１年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

５） 英語II－Ａ１

２年次前期

宮内 信治

原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格を描写する語彙、医療職者を表す語彙を学び、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に３回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。

６） 英語II－Ａ２

２年次後期

宮内 信治

前期に引き続き、原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。医療職者を含めた実践者（practitioners）と、科学者についての語彙を学習し、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に３回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。

７）　英語II－B１

２年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

８）　英語II－B２

２年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

９）　英語III

３年次後期後半

Gerald T. Shirley、宮内 信治

講読担当　語源学の知見を基に医療や看護に関連する語彙を習得させた。また、論文構成を確認したうえで、実際に発表された英語の原著論文を読解させた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れさせることができた。

４　卒業研究

1. 看護学生と若手看護師における高齢患者との関係形成の相違
2. 電子カルテ導入に伴うコミュニケーションの変化と対応
3. 長崎県Ｓ市における救急外来での外国人患者対応の実態と課題
4. 臨床現場で使用されるカタカナ表記またはアルファベット表記の専門用語、外来語および略語の現状

３－７－８　基礎看護学研究室

１　教育方針

基礎看護学では看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は(1)看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解する(「看護学概論」)、(2)日常生活の援助技術および医療に伴う看護技術の基礎を理解する(「生活援助論・医療技術論」)、(3)看護を学ぶ初学者が実践と理論は表裏一体の関係であることを知る(「看護理論入門」)、(4)入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、専門職としての看護師の役割を理解する(「基礎看護学実習」)等である。講義を行うにあっては上記の科目の学習進度にそってさまざまな看護実践と関連づけたり、実際に体験させたりしながら、双方向の教育をめざし、看護の基盤としての理解が進むように配慮している。

２　教育活動の現状と課題

カリキュラムの改正にともない、講義・演習・実習が有機的に結合されるように具体的な教育目標の実施に当たっては特に配慮をした。専門職である看護師について理解させ、将来の進路に対しても方向づけできるように学生同士の討議やグループワークも取り入れて行った。演習での視聴覚教材の活用や講義、実習前後のレポート指導なども強化して行った。また昨年同様にe-learningシステムの充実に取り組み、学生が活用できるDVDの作成を行った。学生が大学だけでなく、自宅でもe-learningシステムが活用できるように、関係部署への働きかけや情報収集を行った。今後、少ない講義時間や演習時間を補う効果的な指導の検討や講義等では時間制約の中で不足しがちな自らがやってみる、考えてみる活動を増やすことを目標に取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　看護学概論

１年次前期

伊東 朋子、秦 さと子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。講義中心の授業展開に偏らないようにできるだけ、学生が主体的に考えることができるように教材の精選や提示方法を検討して、学生が興味を持って積極的な参加が可能となるように配慮した。学生が調べたものを発表する機会を多く設け、筆記試験だけの評価ではなく、発表した内容や回数も点数化して加点した。

２）　看護理論入門

１年次後期

伊東 朋子、秦 さと子

看護活動に必要な看護理論に焦点を当てて、看護理論とは何か、看護理論の必要性などについて理解させた。主な理論家について事前学習させて、学習内容を発表させながら、講義を展開した。2段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、生活援助論で学んだ具体例などを取り上げ、実際の臨床現場における看護理論の考え方について指導した。

３）　生活援助論

１年次前期後半・後期前半

秦 さと子、伊東 朋子、栗林 好子、水野 優子、巻野 雄介

学内演習は援助技術のさらなる習得を目指し、２人１組を基本的枠組みとして展開しているが、新新カリキュラムの実施により、座学と演習が乖離しないように復習や予習で課題を出し、技術習得を補った。少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて技術試験や筆記試験に臨ませた。e-learningシステムもかなり軌道に乗り、コンテンツも増加してきており、自学自習にビデオ学習なども取り入れさせることで反復学習を促すことができた。看護援助を行う意義や、これまで学習した基礎知識を根拠として看護援助と結び付けること、看護基礎技術を対象者にどのように応用していくのかという点を主軸に授業構成をして、授業展開の工夫をした。また、演習では、原理原則にのっとった手順+応用力の習得のために毎回、単元の担当教員を中心に演習構成に関しての事前の打ち合わせを行い、対象学生のレディネスに応じた授業展開に努めた。

４）　医療技術論

２年次前期

秦 さと子、伊東 朋子、栗林 好子、水野 優子、巻野 雄介

学生は１，２段階実習が終了しているため多少患者のイメージがしやすいと判断し、講義後レポートで当該技術が対象へ与えるリスクについて考えさせた。演習ではさらにそれを予防するために実際どのような配慮をすべきかを考えさせるように展開することで知識と実践のつながりを意識づけさせた。自立した反復学習の習慣化を期待し、各技術の達成レベルを示し、期限内での達成を求めた。その際、教員の直接指導も可能であることは勿論であるが、それ以外の教材としてe-learningシステムの整備も行い、技術習得環境の調整も行った。学生のレディネスと当該授業の達成目標を照らしあわせながら、最良と判断した方法を吟味し取り組んだ。

５）　基礎看護学実習

１年次後期

藤内 美保、伊東 朋子、石田 佳代子、秦 さと子、河野 優子、巻野 雄介、川野 明子、草野 淳子、植田 みゆき、中釜 英里佳、河野 梢子、堀 裕子、吉田 智子、田中 佳子、井伊 暢美、水野 優子、栗林 好子、岡元 愛、安部 真紀

１年次後期後半(01/11～01/29) に２単位を担当した。

既習科目の学習内容と実践が統合できるように実習前・実習後指導を入念に行った。患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけを事前のオリエンテーションで実施した。また3つの実習施設(17病棟)での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生の構成メンバーを十分に検討し、実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。冬季という実習時期の問題もあり、インフルエンザや風邪による欠席生がでたが、帰学日の病棟実習やレポートにより補講指導とした。

４　卒業研究

1. 筋萎縮性側索硬化症患者における催眠レベル測定値(BIS)を用いた後頸部温罨法による睡眠支援の検討
2. 高齢者の睡眠時嚥下回数と嚥下反射および唾液分泌量との関係
3. 女子大学生における隠れ肥満者の身体的特性の検証
4. 筋萎縮性側索硬化症患者における催眠レベル測定値(BIS)を用いた概日リズムの実態調査

３－７－９　看護アセスメント学研究室

１　教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題について、根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としている。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。

「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえた看護過程の展開ができるための基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開ができることを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。個人およびグループワークを通し、一人一人が看護過程の展開ができる基礎的能力を養う。2週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、看護過程の展開を行い、患者の立場を常に考え、患者の健康問題を見極め、適切な看護ケアにつなげられるための思考と実践能力を養い、専門看護学領域の基盤を作る。

２　教育活動の現状と課題

平成23年度改正カリキュラムが進行し、4年間で看護師教育を充実させることを考え教育している。特に看護アセスメント学が担う科目では、エビデンスに基づく思考過程、判断能力を高める教育を行うことである。授業の目標、授業構成、授業方法、授業評価等に対して、例年のように見直し少しずつ改善を試みている。今年度は、学生自らが自主的に思考することを強化するため、2年次の看護疾病病態論Ⅱにおいて、各講義で病態のメカニズムに関する個人レポート課題を課し、これらの内容を踏まえ、グループワークをとおして、課題に関する病態の理解を深め、他学生に説明することで、思考訓練の場とし、科学的根拠に基づいた思考力の基盤を形成することをねらいとした。平成21年度改正カリキュラムから新たに加わった「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」の科目の理解度など調査を24年度に行ったが、おおむね理解度は良かった。そのため科目目標や方法は24年度を踏襲したが、時期を半期それぞれ前倒しにし、「ヘルスアセスメント」科目と関連させながら並行して授業を進めるよう計画した。しかし学生にとっては混乱する部分もあり順序性を整理し、授業を進めていくことが課題となった。看護アセスメント実習では、在院日数の短縮や患者の状況の変化に応じて看護過程の展開が困難なケースや、季節的にインフルエンザの流行や積雪などで最終日は実習中止となる場面もあったが、全員が実習目標を到達した。技術面においても、看護アセスメント学実習の前に第１段階看護技術演習を12月に実施し、実習終了後に学生および教員にアンケートを行い、効果がみられたという結果であった。今後は、さらにヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点を深め、エビデンスに基づく判断能力を身につけることが課題である。

３　科目の教育活動

１）　看護疾病病態論Ⅰ

１年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。アレルギー・膠原病・感染症、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかり学ぶ必要性を認識するようである。

２）　看護疾病病態論II

２年次前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義および最後にグループワークを行った。授業内容は、脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。またグループワークは初めての試みで、講義の時に病態のメカニズムに関する個人レポート課題を課した。その内容を踏まえ、グループワークをし、最後に体育館で発表会を行い、他学生に模造紙で図解したもので説明し、理論的・科学的思考をもち意見交換を促した。これらの課題によって疾病や病態に関する理解を深め、思考訓練の場となり、科学的根拠に基づいた思考力の基盤を形成の一助となった。

３）　ヘルスアセスメント

２年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、別日に実施するように変更したことで、学内実習に臨むにあたっては事前に復習する姿勢が確認できた。さらにこれまで既習した知識・技術を活用することを目的に高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルイグザミネーションをさせていただき、高齢者へのインタビューや、正常と異常の判断、フィジカルアセスメントの技術等を効果的に学んだ。最終的に筆記試験と実技試験を実施し、一定の知識・技術の能力を身につけることができた。

４）　看護アセスメント概論

２年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義およびペーパーペイシェントによる個人ワークを行いながら、理解を確実にするよう努力した。個人ワークのペーパーペイシェントはイメージしやすい糖尿病事例を用い、身体面、心理面、身体面からのアセスメントが必要な事例で看護過程を展開させた。個人ワークでは昨年の方法を改善し、段階的にレポートを提出させた。昨年度、病態を深く導けない、検査データをアセスメントできないなどが明らかになり、身体的な知識の充実を図るように指導を強化した。

５）　看護アセスメント演習

２年次後期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、１グループに５名～６名でペーパーペイシェントによる看護過程を展開させた。事例は、乳がん、肝硬変、内包出血、白血病の４事例とし、病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を作成した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行った上で、グループワークで検討させ、グループメンバーとディスカッションすることで視野が広がりや内容の深まりに繋がったようである。中間発表会と全体発表会を行い、患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員にも発表会に参加してもらい、実習指導の際の参考にしてもらった。教員からのアンケート結果では、発表会の参加により学生のレディネスの把握や実習で強化すべき点などが参考になったという意見が多かった。

６）　看護アセスメント学実習

２年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、伊東 朋子、秦 さと子、川野明子、巻野雄介、吉田智子、
中釜 英里佳、植田 みゆき、足立 綾、鈴木 彩乃、河野 梢子、堀 裕子、河野 優子、江月 優子、
田中 佳子、水野 優子、栗林 好子、後藤 成人

１名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院８病棟、大分赤十字病院５病棟、アルメイダ病院４病棟の計17病棟に４～６名の学生を配置した。１年次の基礎看護学実習で配置された同じ病院で異なる病棟に配置をした。基礎看護実習は１年次に行われ、１年ぶりの実習であったが、技術チェックなどの技術練習も学内で行い、実習に臨むことができた。在院日数の短縮や患者の状況の変化に応じて看護過程の展開が困難なケースや、季節的にインフルエンザの流行や積雪などで最終日は実習中止となる場面もあった。１週目は受け持ち患者の病態を考える、２週目では心理・社会面を総合的に捉え患者の全体像を踏まえた看護診断、看護計画、実施、評価ができるように指導を行った。

４　卒業研究

1. 文献からみた被災地自治体職員の災害後における健康状態の特徴
2. 在宅高齢者の傷病経験が延命治療の考え方に与える影響 －本人とその子の語りから－
3. 生活行動レベルと薬剤調整における訪問看護師の判断の実態
   －在宅療養者の事例を用いたアンケート調査より－
4. 大学院NP養成課程修了後の研修実態と到達度 ―効果的な研修プログラムを目指して―
5. 文献からみた被災児に生じやすい症状とその影響要因

１　教育方針

成人・老年看護学は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、担当教員以外に臨床で働く様々な医療職者を学外講師として招き、援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。最終的に、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学べるように組み立てている。

２　教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、対象者を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるようにしている。また、成人・老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　成人看護学概論

２年次前期前半

小野 美喜、松本 初美

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。特に中範囲理論を学習し、成人の理解と看護アプローチの学びを深めた。

２） 老年看護学概論

２年次前期前半

小野 美喜

老年期に生じる健康問題と看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。老人施設から外部講師を招き、施設で生活する高齢者の実情について講義する機会を設け、認知症に伴う症状や援助役割などが実例をもって示されたため、学生の理解が深められた。また、高齢者の機能低下とQOL、高齢者の保健医療福祉における課題など文献学習し論述する機会をつくった。学習効果もあがったため引き続き来年度も実施する。

３） 成人看護援助論

２年次前期後半

小野 美喜、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、河野 優子、堀 裕子、川野 明子

成人期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられられるよう講義を行った。

４） 老年看護援助論

２年次後期

小野 美喜、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、河野　優子、堀 裕子、川野 明子

老年期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。

５） 成人・老年看護援助論II

２年次前期後半・後期

小野 美喜、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、河野 優子　堀 裕子

成人・老年期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられられるよう講義を行った。

６） 成人・老年看護学演習

２年次前期

小野 美喜、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、河野 優子、堀 裕子、川野 明子

学生の臨床実践能力の向上を図るため、成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした演習を行った。
成人期、老年期の特徴を踏まえ、臨床の場で様々な健康問題を持つ、急性期、慢性期、終末期の対象者に必要な援助を計画し、看護過程の展開の中で援助技術を練習できるように演習を行った。また、模擬患者への健康問題の査定や個別性のあるケアプランの立案、および実践、評価についても学生が自ら主体的に取り組むことができるように演習を行った。

７）　成人看護学実習

３年次前期後半・後期前半

小野 美喜、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、河野 優子、堀 裕子、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、岡元　愛、鈴木 綾乃、吉田 智子、川野 明子

成人看護学実習は、急性期・慢性期・回復期・終末期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて12週間（学生一人５週間の臨地実習と１週間の学内セミナー）の実習を実施した。今年度から教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

８）　老年看護学実習Ⅰ

３年次前期前半

小野 美喜、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、河野 優子、堀 裕子、水野 優子、栗林 好子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、川野 明子

施設に入所している高齢者および通所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設６施設、介護老人福祉施設６施設の合計12施設において２週間の実習を行った。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたリクリエーションの企画や実施などができた。

９）　老年看護学実習II

３年次前期後半・後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、岡元 愛、鈴木 綾乃、吉田 智子、川野 明子

老年看護学実習Ⅱは、治療を必要とする高齢者への看護の特性や看護実践を学ぶために大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて12週間（学生一人５週間の臨地実習と１週間の学内セミナー）の実習を実施した。今年度から教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

４　卒業研究

1. 介護保険施設におけるがん終末期入所者に対する看護師の実践と思い―身体的な苦痛症状の有無に着目して―
2. 特定看護師が介護老人保健施設のチームにもたらす効果－導入施設と非導入施設の比較より－
3. 2型糖尿病患者の療養生活を支える家族の思い
4. 一般病院の看護師が認知症をもつ人と関わるために必要なこと―認知症看護に関する文献と認知症をもつ家族へのインタビューから―
5. へき地医療拠点病院に勤務する特定看護師のチーム医療における実践と効果―慢性疾患を持つ高齢者の症例分析を通して―

１　教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、２年次前期に15コマ１単位で行う小児看護学概論と、３年次前期に２単位30コマの小児看護援助論と20コマの小児看護学演習を行った。概論では小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。３年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は少子化で兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は欠席も少なく意欲的に受講していた。小児看護学の学習内容の定着のために２回に分けて小テストを行い工夫した。また、再試験を実施してフォローした。

３　科目の教育活動

１）　小児看護学概論

２年次前期

高野 政子、草野 淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)世界の子どもの健康と医療、3)子ども観の変遷と子どもの権利、4)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)心理的・社会的・言語的発達である。８回～14回までは、乳児から学童・思春期までの成長・発達について理論等を展開した。最終回は、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

２）　小児看護援助論

３年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、足立　綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健を講義し、援助技術の演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。一方、看護過程の展開は、全員で発表会を開催し、グループワークで展開を完成した事例を２グループずつ発表し意見交換を行った。

３）　小児看護学演習

３年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

演習は２つの課題を設定した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を５事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。２つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。小児看護技術の演習は、大分県立病院小児病棟看護師４名を講師として招き、教員と共に援助技術として高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術小テスト、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの４グループに分けてローテーションする方法で指導した。学生と臨床看護師との相互関係が構築されるようにした。

４）　小児看護学実習

３年次後期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾、永井 真美

小児看護学実習は、大分県立病院に１グループ学生８～９人で６グループ（合計54人）、別府発達医療センターに学生４～５人で６グループ（合計28人）配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生１人に対象児１人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、実習期間中に２人の受け持ちする可能性を避けた。１人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもを受け持つことで看護実践まで到達した学生も少なくない。３日間の保育所実習は、７月末から８月第１週までに実施した。子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもの保育は今後も必要と考える。実習の時期は夏季休暇最初に行うことが冬の感染の予防の視点からもよいと考える。

７日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

４　卒業研究

1. 特別支援学校に看護師導入後の医療的ケアの質に関する保護者の評価
2. 特別支援学校における医療的ケアについて看護師導入後の教諭の評価
3. 大分県内の訪問看護ステーションにおける在宅小児の訪問看護の実態と課題
4. 小児がん療養経験がある学童の保護者からみた復学時の経験

３－７－12　母性看護学研究室

１　教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

２　教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学実習においては、男子学生の増加によりグループ編成が困難になってきたこと、対象受け持ち患者が少なくなっておりペアーで１例の事例を受け持つことが多くなってきたため、平成24年度から施設を増加して3カ所とした。受け持ち患者の症例は正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や入院中の妊婦も受け持ち対象者としている。実習施設を3カ所にしたことで１施設の学生数が4～5名となり充実した実習となっている。実習期間中の分娩数は施設によって異なり、施設によって分娩見学ができない学生もいる。今後は分娩件数の少ない施設での学生の実習の工夫が課題である。

３　科目の教育活動

１）　母性看護学概論

２年次前期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性の概念、セクシュアリティ、リプロダクティブヘルス／ライツ、母性看護の歩み、母性の健康と社会、母子保健統計からみた動向、母性看護に関する組織と法律、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の健康と看護などについて教授した。本年度はグループワークを取り入れて、自主学習を進め、学んだ学習の中から課題を抽出し発表する機会を与えた。来年に向けては講義資料や内容を修正して講義内容の充実に努めていきたい。

２）　母性看護援助論

２年次後期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

妊娠期・分娩期・産褥期の母子の生理的変化とその家族への看護について学ぶことをねらいとした。妊娠期では妊娠の生理・経過、妊婦の健康診査、母体と胎児の管理、妊婦への看護、分娩期では分娩の生理・経過、産婦と家族への看護について教授した。産褥期では妊娠から分娩までの経過が褥婦と新生児に及ぼす影響とその看護について授業を展開した。事前学習、授業毎の小テスト、グループ学習を取り入れたTeam-based Learning方式の学習で、学生が積極的に参加し自ら学習を深めることができるよう工夫した。

３）　母性看護学演習

３年次前期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義回数は、看護技術演習7回とウェルネス看護診断に基づいた母性看護家庭の展開８回の全15回であった。看護技術演習では、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常３事例、異常３事例をグループワークでまとめ、発表し学習内容の共有を図った。学生の取り組みは熱心であったが、一部の学生が自分の担当箇所以外の内容についての学習の共有がうまくできない様子もみられたため、次年度は全事例について個別学習をした後、グループで担当箇所を深めるという方法を工夫する必要がある。

４）　母性看護学実習

３年次後期

林 猪都子、猪俣理恵、植田みゆき、桑野紀子、安部真紀

母性看護学実習施設は３施設であり、実習期間は１グループ２週間（延べ12週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生４～５名配置（合計28名）、大分県立病院は学生５名配置（男子学生３名）（合計30名）、アルメイダ病院は学生４名配置（男子学生５名）（合計24名）、担当教員は各施設１名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。本年度は分娩第1期から入室しないと分娩見学できなかったこともあり分娩見学ができなかった学生がいた。また、帰学日は祝日があるときは帰学日を設けず、２週目は木曜日に設け、記録のまとめや技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。今年度は学習ノートを実習前に作成して個人学習を強化した。

４　卒業研究

１．女子看護大学生における子宮頸がん検診受診行動に関連する要因の検討
２．女子大学生の避妊に対する認識
３．妊娠末期の妊婦のセルフケア行動に関する研究
４．都道府県別にみた妊産婦が選択できる出産場所の現状と課題

１　教育方針

学部の助産学（選択科目）は、助産師独自の判断で妊娠・分娩・産褥・新生児期の助産過程を展開し、さらに母子および家族の健康と福祉を促進するための理論と方法を学ぶことを目的としている。助産師国家試験受験資格要件の実習における分娩取扱いについては、指定規則で助産師又は医師の監督の下に学生１人につき10回程度行うことが決められており、本学学部生は９例以上を取扱うことを基本的な考えとしている。学部の助産師教育では、卒業時点までに、少子化や周産期医療に対する社会のニーズの多様化に対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。

大学院助産学コースは、助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術やリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性の性と生殖に関わる健康問題に対応できる能力を修得し、他職種との連携や協働、社会資源の活用を図ることができる助産師を育成することを目的としている。特に、高度な周産期母子医療、ハイリスク妊産褥婦への助産診断能力及び助産技術を身につけさせるために、体験型の演習や技術試験を取り入れ実践力を強化している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指している。

２　教育活動の現状と課題

学部の助産学教育は選択科目であり、４年次生６名が履修した。分娩取扱いを実施する助産学実習は８週間で、規定の実習期間では分娩例数が９例に到達できず、夜間・休日の実習と夏期休暇に最大11日間の延長実習を行い目標数に到達した。今年度の１学生の分娩介助数は、９例から10例で、平均9.3例であった。平成25年度の履修者で、学部における助産師養成教育は終了した。

大学院助産学コースは、昼間に助産学専門科目、夜間に共通科目を履修することにしている。特に１年次の時期によっては、昼間も夜間も講義・演習があり課題レポートが重なるなど、体力的にモチベーションを維持することが困難な場面もみられたが、個別に教員が対応をするなど工夫している。後期は、実習場での学びを学内で振り返り、対象に応じた助産ケアを思考することができ、さらに講義・演習・実習を並行することで、助産過程の思考のプロセスもスムースに理解することにつながった。２年次生は、５月から７月に分娩介助実習とハイリスク妊産婦ケア実習を履修している。今年度の１学生の分娩介助数は、９例から13例で、平均11例であった。夜間・休日の実習は行われたものの、学部生よりも回数は少なく体調面の心配はみられなかった。学生のレディネスの違いで介助例数に差があったが、次年度からは可能な限り目標例数を15例として指導をしていきたい。９月以降は、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、修了後の助産師活動をイメージすることができた。今後は、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながらカリキュラム全体を見直していく。

３　科目の教育活動

１）　助産診断・技術学Ⅳ

４年次前期前半

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

助産学実習で活用するために、ペーパーペイシェントによる分娩期の助産過程の展開を実施させた。日本助産診断・実践研究会のマタニティ診断の概念枠組みを用いて助産診断の考え方を教授した。正常経過をたどる初産婦の事例を用いてアセスメントを自己学習したのち、グループワークを行った。全体発表の後、教員が解説することで理解を深めることができた。

分娩介助演習は、側面介助法、正面介助法をとりあげ、講義とＶＴＲ試聴で一通りの流れを確認した。その後、デモンストレーションを行い３グループに分かれて、役割（直接介助者、間接介助者）を決め、教員の指導のもとで実施した。学生は、最初は手順に沿って実施することで精一杯であったが、毎日評価表を用いて練習を行った。今年度は学生の希望により、個別の技術試験を実施した。課題としては、お互いの役割を手順通り実施することに精いっぱいで、産婦への声かけなど、対象への配慮を意識した技術習得には至っていない点である。

２）　地域助産活動論

４年次後期

梅野 貴恵、宮﨑 文子、宮崎 豊子、生野 末子、戸髙 佐枝子、越田 津矢美、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等をとりあげ、オムニバス形式で実施した。

３）　助産学実習

４年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

助産学実習は、妊娠期から産褥１か月までの母子とその家族に対して助産診断・技術を用いて助産を展開する能力を身につけることを目的に実施した。本年度の助産学選択学生は6名が履修した。実習施設は、分娩介助ができる病院・診療所４施設と助産所２施設の計６施設である。例年通り、分娩介助目標例数を９例以上として取り組み、６名全員が９～10例実施し、平均分娩介助例数は9.3例であった。この実習期間中に全員が就職試験を受験するなど、実習に専念できない事情があり、夜間・休日の待機等とも重なり実習への意欲が低下する時期もあったが、担当・専任教員が面談するなどして終了した。夏季休暇中の休養が十分ではなかったが、実習の成果を振り返ることができ、大きな学びを得られた。

４　卒業研究

１．退院時直接授乳に影響する背景要因～総合周産期母子医療センターＮＩＣＵにおける分析～
２．Ａ県における病院勤務助産師の助産師出向システムに対する思い
３．九州地方の早期新生児期における保清方法とスキンケアの実態
４．高校生の不妊に関する知識の実態とピアエデュケーション前後の意識の変化

１　教育方針

学部教育では、1)精神科領域での看護だけでなく他のさまざまな場で心に焦点を当てた看護を行うこと、2)看護の対象者の症状や疾病だけでなく、社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を宛てた看護を行うこと、および3)対象者だけでなく看護者自身の心や治療的人間関係に目を向けることを強調し、そのために必要な視点・知識、技術、態度の獲得に向けて、講義・演習・実習という流れを構成してきた。また卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などについて、具体的な事例や視聴覚教材を紹介しながら学生にイメージを把握させるよう努めている。演習は、引き続く実習への準備性を高める目的で、紙上事例演習、グループワーク、体験的学習、実習施設や社会復帰施設のスタッフによる活動紹介などで構成している。実習では、不安を抱えて臨む学生も少なくないが、その不安も含めて学生が自己について振り返ることや、相手について、互いの関係性について振り返ることを支援している。ただし今年度から、精神科病棟での実習期間を短縮したため、入院患者に対する看護の展開までは求めず、患者と患者にに行われている看護について理解を深めることを目標とした。これに代わり社会復帰施設での実習を導入し、地域で生活する精神障がい者について理解を深めること、およびこれとの比較で入院患者の退院後の生活について想像力を働かせることを目標とした。卒業研究に関しては、学生の希望と計画の実現性をすり合わせながら進めることができ、学生の満足度も高いので、従来の方針を維持する予定である。

３　科目の教育活動

１）　精神看護学概論

２年次後期

影山 隆之

精神健康の概念、精神疾患と病態、治療の構造と方法、精神医療・精神看護の歴史と法制を中心に、パワーポイント資料を印刷配布（学内ウェブでも公開）しながら講義を行った。出席確認を兼ねて授業中に小レポートを課し（次の回に返却）、自由な感想と質問を無記名記入した用紙とともに回収して、次の回に復習と解説を追加した。学生の理解が不十分な点をフィードバックしたり、学習の重要ポイントを理解させたりするために、上記の方法は効果的であった。

２）　精神看護援助論

３年次前期前半

大賀 淳子

精神看護学の2つの柱（人々のメンタルヘルスに関わる看護と精神科領域における看護）を再確認したうえで、これらの柱にそった講義を展開した。精神科領域以外での精神看護、主な症状のアセスメントとその看護について実例を多用してイメージしやすいよう配慮した。例年のように、毎回の講義後に提出されたミニレポートへのコメントと、重要な質問意見のフィードバックを行い、理解の深化に努めた。

３）　精神看護学演習

３年次前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、後藤 成人

実習への準備性を高めるために、紙上事例について精神看護アセスメントを行い、事例の理解や看護計画について討論する演習を行った。自己理解、対象者理解、関係性の理解を深める方法を学ぶために、「異和感」の対自化、プロセスレコード、自己一致に関する演習を行った。精神障がい者社会復帰施設について講義で深く取り上げていなかったので、実習に向けて関連施設スタッフによる特別講義を行った。学生の提出物から判断して、学生の興味・関心・疑問などを高めることができたものと推察される。

４）　精神看護学実習

３年次後期前半

影山 隆之、後藤 成人、栗林 好子、佐藤 弥生、杉本 圭以子

今年度から、1週間は大分丘の上病院で実習を行い、もう1週間は4つの社会復帰施設に学生が分散して実習を行った。病院実習はすべて病棟で行い、各学生が一人ずつ患者を受け持って、全人的な理解とアセスメントおよび患者に行われている看護の理解に向けて指導を受けるとともに、プロセスレコードやカンファレンス等を通じて対人関係における自己の特徴について理解を深めた。社会復帰施設では利用者に混じって各種のプログラムに参加し、精神障がい者が社会で生活できるための条件、そのために必要な援助、リハビリテーションのニーズを把握するためのアセスメントなどの実際を見て学んだ。実習最終日を帰学日として、二つの場での学びを統合するための最終カンファレンスを行った。ほとんどの学生にとって精神障がい者に接する初めての体験であったが、前年までの病院中心の実習に比べると、リハビリテーション活動を見ることによって、対象者を生活者として捉えるということの意味を深く理解できたように見える。ただし、そのことと病院実習で学んだことを統合して言語化する作業が不十分な学生もいて、事前学習で準備性を高めることや、最終カンファレンスの持ち方とファイナルレポートの課題設定を再調整することが必要と思われた。社会復帰施設の利用者は一見すると症状がわかりにくいこともあって、対象者とのコミュニケーションに困難を感じたり、援助的人間関係の構築で悩んだりする学生が少ないようにも見受けられたが、これは学生の学び方が浅かったと見ることもできる。さらに、二つの場での実習期間が、祝日のためアンバランスになってしまったグループがあった。初めての実習設定だったので反省点が多かったが、基本的な点では初期のねらいに近づけた実習であった。

４　卒業研究

1)男子大学生の性格・志望動機の学部間比較－男子看護学生のQOL向上のための基礎的検討
2)新卒看護師のリアリティショックに関するインタビュー調査－職場選択理由という視点から
3)高校生の部活動と生活時間・日中の眠気・精神的健康度の関連について
4)精神作業によるストレス反応の回復過程に楽器演奏が及ぼす影響

１　教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立ててきた。さらに、新カリキュラムから新新カリキュラムへの移行に伴い、統合領域の科目が増え、今年度から3年次の健康支援論、災害看護論がこれまでの保健活動論から内容を変えて新たな開講となった。また、4年間での看護師教育を進めるにあたって、広域看護学講座としてどのように地域で活動する看護職の役割を教授するかについても話し合いをしながら、講義・演習の内容を検討した。これまでの講義・演習の組み立てに加えて、組織マネジメントやケアマネジメント、地域で生活する人々の多様な健康ニーズにあった看護を提供するためには、地域包括ケアシステムやケアマネジメントが重要であり、1年次からの健康論や初期体験実習の意味付けを考え、社会資源の活用や他職種との連携・共同など、広くマネジメント能力を育成する教育を進めることとした。

２　教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行ってきた。また、例えば３年次生前期の在宅看護論では、１年次、２年次で学習した内容から、学生が在宅で療養する対象について具体的なイメージができるよう、実習で経験した事例をもとに退院後の計画を考えたり、小グループでの演習を取り入れるなどの工夫をした。

今年度は、広域看護学講座としても教育内容を見直す機会となり、制度や政策を踏まえ、災害看護、在宅看護、看護管理など統合領域のカリキュラム内容を充実させるとともに、次年度の4年次の第５段階実習を見据えて、地域の資源を活用したマネジメントができる看護職を育成するための講義・演習内容を実施した。学生の学習状況に応じた教授方法を工夫しつつ、これまで学んだ内容を統合して看護ケアを提供していくことができる能力が養われるよう演習やディスカッションを組み入れたさらなる学習方法の工夫をしていきたいと考えている。

３　科目の教育活動

１）　健康論

１年次前期前半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、坪山 明寛

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本21などの取り組みを交えながら講義を行った。また、日本赤十字社の赤十字救急法基礎講習（AEDを含む）を受講、入学前に救急蘇生法を学習した経験をもつ学生も多かったが、改めて講義と演習を通して心肺蘇生法を習得することができていた。

２） 保健福祉システム論

２年次後期

平野 亙

生活者である対象者をケアする看護職にとって、社会資源に関する理解は不可欠であり、さらに社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。そのため、まず「生存権」について論じたのちに、社会保険、国家扶助および保健・医療・介護・福祉を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。授業回数が限定されているため、福祉・介護をはじめ高齢化社会に求められている制度を中心に講義を整理し、できるだけ体系的に理解できるよう構成した。加えて、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、個人情報保護、障がい論など、患者・障がい者の諸権利を保障するための基本事項について論じ、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

出席した学生の学習態度は比較的良好であったが、出席率が低くない学生の中にも、成績が良好でないものがおり、一つには「一夜漬け」で試験に臨むために理解までに至らない学生が多いことが推測され、講義出席への動機付けによる学習意欲の向上だけでなく、理解を支援するための講義方法について更なる工夫の要があると考えられる。

３） 健康支援論

３年次後期後半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、吉田 智子、佐藤 玉枝、赤星 琴美、岡元 愛、鈴木 綾乃

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。講義にあたっては、地域看護学研究室の教員と分担をして講義を行い、必要に応じて演習も盛り込んだ。後半には健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークによる作業を行った。発表会は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるといった点について、グループワークの過程で学習できていた。また、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていたと考える。

４）　初期体験実習

１年次前期

桜井 礼子、平野 亙、足立 綾、井伊 暢美、植田 みゆき、江月 優子、岡元 愛、小田 千尋、川野 明子、河野 梢子、河野 優子、栗林 好子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、堀 裕子、巻野 雄介、水野 優子、吉田 智子

初期体験実習は、３日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解すること目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させた。特に今年度は、ユニフォームを着用して手洗いの演習を、１日目のオリエンテーションで実施した。実習期間を通して担当教員の指導のもと、施設実習から全体発表会まで充実した実習をすすめることができた。

実習施設：18ヶ所
・事 業 所：新日鐵住金株式会社大分製鉄所
・保健福祉施設：大分県こころとからだの相談支援センター
・健 診 機 関：大分労働衛生管理センター
・学　校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター
・病　院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、大分赤十字病院、国立病院機構 西別府病院、大分市医師会立アルメイダ病院、中村病院、大分三愛メディカルセンター
・介護老人保健施設等：介護老人保健施設　わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑、
・地域保健：大分市

４　卒業研究

1. 訪問看護師が行う認知症高齢者の服薬管理の実態と多職種との連携
2. 地域在住高齢者の運動器障害の実態と日常生活の困難度との関連
3. 地域在住高齢者が５年間で経験したライフイベントと生活への影響
4. 自閉症スペクトラム障害（ＡＳＤ）児・者の医療機関受診における困難に関する実態調査
5. 高齢者の社会参加とＱＯＬおよび生活習慣との関連

３－７－16　地域看護学研究室

１　教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動を行うために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、家族看護学概論、地域看護学実習を展開している。特に地域看護学概論では、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と実習の連動性を考慮して、内容や展開方法に工夫を凝らしている。

２　教育活動の現状と課題

地域看護学概論の講義では、実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師および多職種の連携の必要性が理解できるよう教授している。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開ができるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等を行っている。地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行っている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児の事例を基に、保健師が行う家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解できるよう工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

３　科目の教育活動

１）　地域看護学概論

２年次後期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美、藤内 修二

地域における個人・家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的な内容について講義をした。今年度より看護師養成のカリキュラムとなり、公衆衛生の概要や地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など地域看護の必要性を理解するために時間を十分にかけた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が地域で活動する看護職をイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

２）　家族看護学概論

２年次後期前半

赤星 琴美、佐藤 玉枝、岡元 愛

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。内容は、家族看護学の概念、家族の機能、家族を理解するための諸理論、看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族を一つのユニットとして捉えて支援するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、より具体的に看護過程の展開が学習できるよう工夫した。

３）　地域看護学実習

４年次前期前半

佐藤 玉枝、赤星 琴美、岡元 愛、小田 千尋、桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、吉田 智子、桑野 紀子

大分県下全域の保健所(保健師支所含む)９か所、市町村保健センター及び支所２１か所、合計30か所の施設に、それぞれ２～４名の学生を配置し１～２週間(大分市保健所のみ３週間)の実習を行った。

実習指導体制は、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、中間カンファレンスや終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。実習内容は、市では少なくとも１件の訪問指導と、集団を対象とした健康教育を体験できるように調整した。

４　卒業研究

1. 慢性疾患を抱える児童・生徒に対する養護教諭の役割の在り方の検討
2. 身体障害児のスポーツ活動を通した生活や気持ちの変化と関連要因
3. 生活習慣を改善するための支援のあり方についての一考察－人工透析患者のインタビューを通して－

３－７－17　国際看護学研究室

１　教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of Nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses.

Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

２　教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities: Texts, Presentations, questions and answers are carried out in English.English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of self-study, references, methods of presentation, and a focus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-study and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted.
Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

１）　国際看護学概論

２年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives and contents;
1.To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
2.To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
3.To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4.To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5.To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents;
1.Orientation and introduction to the nature of international nursing -definition, characteristics, aims-
2.Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
3.Main nursing concepts and trends of international nursing and health - Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
4.Trends of international nursing and health, -Global health care problems, history, models for services-
5.Risks to health and life in the world - Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
6.Risks to health and life in the world - Non-communicable disease -
7.International networking of health; WHO
8.Wrap-up, evaluation of the course

２） 国際看護比較論

３年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives:
1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents;
1. Overview of international nursing From international health & nursing to global health perspectives Issues & challenges for health development (Poverty, Gender, Culture & Health Care, Environment)
2. Global strategies for all health Human resources
3. Work force related to ICN International Relief Organization: JICA
4. International Relief Organization Red Cross

３） 国際看護学演習

３年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives of the Course:
1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:
Orientation to the course activities includes;
Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:
Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;
I. Health issues and strategies; of a population group
II. Health issues and strategies; of a nation
III. Foreign Country’s Impact and context of aids by JICA

４　卒業研究

1. 在日インドネシア人看護師が臨床で直面する困難
Difficulties of Indonesian Nurses Faced with While Working at Japanese Hospital
2. 戦争の影響を受けた子どもが抱える問題に関する文献分析
Analysis of literatures to identify the problems of children affected by war

３－７－18　共通科目

１）　自然科学の基礎

１年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、品川 佳満、石川 純也、吉田 成一、首藤 信通、佐伯 圭一郎

自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方について理解するための講義となっている。講義内容は次の通りである。
1) 入学後試験（物理、化学、生物、数学）、2)科学的自然観とは、3)生物：細胞とは、4)生物：細胞分裂の仕組み、5)生物：DNA複製の仕組み、6)生物：遺伝子・遺伝の仕組み1、7)生物：遺伝の仕組み2、8)生物：タンパク質合成の仕組み、9)生物：免疫～遺伝子と生体防御システム、10)生物：分子発生生物学、11)生物：生物化学（エネルギー、酵素、代謝）、12)生物：生物化学（化学エネルギーを獲得する経路）、13)物理：電気と磁気、14)物理：力とエネルギー、15)物理：熱と圧力、16)温度と相変化、17)化学：物質の構造、18)化学：物質の反応（酸化と還元、酸とアルカリ）、19)化学：モルと濃度計算、20)化学：有機化合物の構造、21)化学：人間生活と物質、22)数学：数学の基礎１（基本概念）、23)数学：数学の基礎２（指数と対数）、24)数学：数学の基礎３（微分と積分）、25)数学：数学の基礎４（確率）

２）　健康科学実験

２年次後期

中林 博道、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也、稲垣 敦、松本 佳那子(外部講師)

本健康科学実験は２年次生に実施しており、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは以下、10テーマからなる実験を行った。1）組織学、２）心電図と心拍変動、３）食物栄養学実習、４）血液検査、５）基礎微生物学実験、６）ラットの解剖、７）呼吸循環器系持久力の測定、８）放射線、９）測定誤差と変動、10）染色体異常

３）　総合人間学

４年次後期前半

教育研究委員会委員

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊か知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第１回10月１日	看護師の接遇	岡 耕一
第２回10月15日	医療と報道	中村 通子
第３回10月22日	看護政策	小池 智子
第４回10月29日	服は着る薬	鶴丸 礼子
第５回11月５日	医療資格を持って起業するということ −理学療法士と看護師の挑戦−	大平 高正
第６回11月12日	看護管理	阿南 みと子
第７回11月19日	痰自動吸引装置の開発・起業	徳永 修一
第８回11月26日	ＮＰ活動	村井 恒之、光根 美保

３－７－19　統合科目

１）　看護管理学入門

４年次後期前半

桜井 礼子、伊東 朋子

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解することを目標とした。

昨年度から看護管理学入門を担当し、すでに学習した内容も含まれているが、系統的に看護管理について教授した。次年度は、４年次後期から前期の講義となり時間数も増えることから、看護を実践するにあたって必要なマネジメントについて、実践的な課題を考えられる機会となるよう、講義内容を検討していきたいと考えている。

２） 看護の倫理

２年次後期

平野 亙、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「Profession の責任と倫理」・「生殖と誕生にかかわる倫理」・「生と死のかたちに関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」の７回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。
講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。また講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、学生に予習の習慣がなく、また講義回数の制約もあって少人数での討論が形成できないために、事例演習が双方向的な討論の場になりにくく、教員の注釈に終始する傾向のあることがあげられる。学生の主体的な講義参加を促すためのさらなる工夫が必要と感じられた。

３） 看護と遺伝

開講せず

４） 災害看護論

3年次前期後半、後期後半

桜井 礼子、石田 佳代子

今年度から災害看護論が15コマ・1単位で開始された。まず災害に対する理解を深めるために、これまでの自然災害・人為災害等の実態から災害が人々の健康と生活に及ぼす影響について学生自身が考えられるよう支援した。次に、災害の実態から、①災害発生時の対応（急性期～慢性期・静穏期）に至るまでの災害看護のあり方と連携について、②災害予防・減災のための備えや法制度、地域での取り組みの重要性について教授した。さらに、災害発生時の救急対応につていトリアージ（START法）について、学外講師を招き、災害に関わる専門職および看護職の実際を演習を交えて教授した。

５） 基礎看護技術演習

３年次前期後半

小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、
草野 淳子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤　弥生、秦 さと子、井伊 暢美

実施日程は、学生オリエンテーションを６月12日に実施、練習期間は７月～８月とし、チェック日を９月２日（月）～４日（水）、５日(木)を予備日として企画・実施した。対象は３年次生71名であった。実施内容は、「血糖測定、皮下注射事例」「上気道吸引・吸入、ガウンテクニック、呼吸音聴取事例」「無菌操作」「膀胱留置カテーテル挿入事例」「浣腸、陰部洗浄事例」「点滴管理、全身清拭事例」「沐浴事例」の7事例を行った。

６）　総合看護学演習

４年次後期前半

市瀬 孝道、小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、
草野 淳子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳

４年次生後期に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。医療・保健現場において遭遇しやすい事例（成人老年、小児、母性、精神、在宅）を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身につけること、検討した事例について、根拠に基づき、対象者のニーズや状況にあわせて判断し、安全・安楽な看護技術を提供できることを目標とした。グループワークおよびロールプレイを行い、さらに、発表後のディスカッションを通じて、自らのグループを含む全てのグループの発表を適切に評価し、学習を深めた。

７）　総合看護技術演習

４年次後期後半

市瀬 孝道、小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、
草野 淳子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳

卒業前の学生に対して、基本的な看護技術を確実に修得させ、自信を持たせることにより、臨床における看護技術実践への橋渡しの機会とすることを目的に行った。昨年度と同様に、必須項目を「蘇生法」、選択項目は「静脈血採血」、「点滴静脈内注射」、「筋肉内注射」の中から１つを学生自らが選択し、技術チェックを行った。

８）　第一段階看護技術演習

２年次生後期

市瀬 孝道、小野　美喜、秦 さと子、桑野 紀子、赤星 琴美、石岡 洋子、
石田 佳代子、植田 みゆき、草野 淳子、後藤 成人、佐藤 弥生、中釜 英里佳

看護技術修得プログラムの目的は、確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護実践を実施できるための知識・技術・態度、および判断能力を身につける目的で、＜ファーストステップ＞、＜セカンドステップ＞、＜サードステップ＞、＜ファイナルステップ＞の４段階で構成されている。
＜ファーストステップ＞の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることで、具体的には以下の３点を習得することが目的である。

1）患者に応じた援助の根拠を明確にし、援助方法の選択ができる。
2）援助の際のリスクを判断し、患者の安全・安楽を確保した実践ができる。
3）患者の反応をとらえ実践に反映させるとともに、援助全体の評価を行う。

チェック内容は、「血圧測定およびアセスメント」」と生活援助に焦点をあてた７事例「歩行・更衣」、「フィジカル・ストレッチャー」、「膀胱留置カテ指導時の排便介助・陰洗」、「おむつ交換・体位変換」、「車いす移乗・足浴」、「持続点滴中のシーツ・寝衣交換、口腔ケア」、「洗髪」を実施した。

９）　在宅看護論

３年次前期、後期後半

桜井 礼子、平野　亙、佐藤 弥生、吉田 智子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。新カリキュラムとなり、３年次前期に講義が早まったことから、２年次の看護アセスメント学実習と在宅看護実習Ⅰ（介護老人施設）での体験をもとに、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例などを提示しつつ教授した。また、4段階実習終了後の後期後半では、外部講師を招き、「在宅酸素療法」、「認知症者の看護」について講義を設けた。

10）　老年看護学実習

３年前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子、水野 優子、栗林 好子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、後藤 成人、中垣 紀子

地域に在住しデイケア・デイサービスに通所している高齢者の生活支援を学ぶことを目的に実習を行った。実習施設は大分市内および由布市内にある介護老人保健施設6施設、介護老人福祉施設６施設の合計12施設とした。地域高齢者を知ることで、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題について考えることができた。

11）　在宅看護論実習

４年次前期

桜井 礼子、佐藤玉枝、赤星 琴美、岡元 愛、小田 千尋、河野 梢子、栗林 好子、桑野 紀子、佐藤弥生、田中 佳子、巻野 雄介、水野 優子、吉田 智子

在宅看護論実習は、訪問看護ステーションでの実習を通して、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケースマネジメントを行い、訪問看護の必要性と援助方法の実際、様々な機関や他職種との連携・協働について理解することを目的とした。１週間と短期間ではあるが、１事例を受け持ち、看護過程を展開し看護計画に基づいた実践と評価までを行った。また、訪問看護師に同行させていただき多くの家庭での訪問看護を体験させていただくことができた。これらの体験を通して、在宅看護における訪問看護師の役割や他の職種や機関との連携、また対象者本人と家族に対する個別的な看護の重要性について学ぶことができていた。しかし、実習期間が１週間であることから、受持ちの訪問回数が1回のみの学生もおり、看護過程の展開については課題が残った。次年度からは、実習期間が２週間になるため、看護過程の展開に力を入れるとともに、地域包括ケアとケアマネジメント、在宅医療・介護の連携などにも焦点をあてた実習を組み立てていきたい。

実習施設：県内訪問看護ステーション19施設
大分市5施設、別府市2施設、由布市2施設、日出町１施設、杵築市１施設、
日田市１施設、中津市１施設、国東市１施設、豊後高田市１施設、
豊後大野市2施設、臼杵市１施設、佐伯市１施設

12)　総合看護学実習

４年次前期

看護系教員全員（専任教員５名）

総合看護学実習は、看護学実習の最終段階（第５段階）にあたり、各学生がこれまでの学習の達成度を評価し、これを強化、発展させ、看護職として働く環境を理解し、将来の活動につなげることをねらいとしている。総合看護学実習は、これまでの実習と異なり、実習計画から実施・評価まで学生自身が自分の手で創り上げていく実習であり、このために、１月末に学生へのオリエンテーションを実施し、２月に自身が希望する実習施設を選択し調整の上実習施設が決定され、２月末から適宜担当教員の指導を受け実習に向けた準備が行われた。また、実習開始までに実習施設の指導者と学生、担当教員により実習内容についての調整が行われたが、実習施設では、学生の希望を最大限に受け入れ、実習環境を整えていただいた。実習施設は、母性看護や在宅看護など新たに４施設に依頼をした。

実習期間中は、施設指導者に主の指導をしていただき、学生が自律した実習を行うことができていた。実習の成果についても、学生が立案した実習目標をもとに自己評価が行われ、多くの学生が目標を達成できていた。

13)　看護科学研究

３年次後期後半

佐伯 圭一郎，梅野 貴恵，平野 亙，福田 広美，市瀬 孝道，石田 佳代子，首藤 信通，品川 佳満，赤星 琴美

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目標とし、研究テーマの設定から文献収集、研究計画書の作成といった過程のすすめ方，研究デザインの決定やデータ解析技法の知識と実践といった一連の内容を教授した。講義内容と担当は次の通りである。

1)看護研究の意義（梅野），２．研究の倫理と安全（平野），3)質的研究（福田），4)実験研究（市瀬），5)文献研究（石田），6)調査研究（佐伯），7)文献検索と読み取り（佐伯），8)統計学の考え方（首藤），9)データ解析の方法（首藤），10)研究計画の作成（佐伯），11)文献検索＆抄読演習1（佐伯），12)文献検索＆抄読演習2（佐伯），13)データ解析演習1（首藤，品川），14)データ解析演習2（首藤，品川），15)論文の書き方，発表の仕方（赤星）

14)　看護研究・卒業研究

４年次通年

教員全員

平成24年度は81名の学生が卒業研究に取り組んだ。81名の学生が17研究に配属され、それぞれ配属された研究室において教員の指示のもと、卒業研究テーマを決定して、研究を実施した。11月30日に論文要旨を提出し、12月７日に卒業論文を提出した。12月10日と11日に卒業研究発表会を実施し、それぞれの卒論生が自分の行った卒業研究を発表した。

３－８　大学院における教育活動

３－８－１　博士（前期）課程

１）　看護アセスメント学特論

１年次後期

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライエントに対するマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従い、身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。１つは看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討し、ディスカッションした。２つは小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。３つ目は在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

２）　精神保健学特論

３年次前期

影山 隆之、大賀 淳子

今年度は昼間の履修者だけだったので、地域保健・職域保健・学校保健活動としての精神保健活動につながる内容を中心に、精神健康のモデルと評価法、精神保健のシステムと活動、精神保健の法制と政策等について、講義形式で開講した。

３）　基盤看護学演習

１年次前後期

影山 隆之、藤内 美保、志賀 壽美代、伊東 朋子

基盤看護学演習における研究の手法について、さまざまな視点からその手技方策を具体的に解説した。４名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式の演習によって展開した。「看護の安全と看護管理」、「精神健康測定法と睡眠測定法」、「看護師の臨床判断と形成過程」、「看護研究と自律神経機能評価指標」の4つを実験や提出されたレポートをもとに討議した。信頼性のある方法論を用いることの意義と看護実践におけるエビデンスを検証する場合に必要とされる研究手法について教授した。

４）　成人看護学特論

１年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、伊東 朋子

平成25年度は１名が履修した。成人看護学の急性期・慢性期・終末期に関する研究、教育の動向について４名の講師がオムニバス方式で教授した。

５）　広域看護学演習

２年次後期

佐藤 玉枝、桜井 礼子、崔 明愛

開講せず。

６）　老年ＮＰ特論

１年次後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、増井　玲子
木本 ちはる

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NPとしての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NPの看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。今年度は学習を統合させる目的で、学生の身近な高齢者ケースをアセスメントしマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。課題を当初からオリエンテーションしていたため、十分に時間をかけた取り組みができていた。また発表に対する意見交換によって各自の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。

７）　老年疾病特論

１年次後期

麻生 哲郎、安東 優、糸永 一朗、伊奈 啓輔、兒玉 雅明、小寺 隆元、財前 博文、竹下 泰、
藤富 豊、吉留 宏明、三浦 芳子、影山 隆之、中林 博道

老年期にある対象者に適切なプライマリケアを提供するために、老年期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。実際にNP実習を指導している医師および地域の医療機関で診療を行っている医師を、が非常勤講師となり各専門領域の講義を展開した。ただし各診療領域の時間数は限られており、すべての疾患を取り扱うことは難しく、学生の授業外の主体的な学習は必要であることは、例年通りの課題である。さらに、診療ガイドラインを用いて基本的な治療を学習することを強化していきたい。

８）　老年臨床薬理学特論

１年次後期

吉田 成一、伊東 弘樹、佐藤 雄己

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。しかし、今年度は、全ての履修者が所定の学習修得レベルに到達し、単位取得できた。

９）　老年診察診断学特論

１年次前期後半・後期前半

中林 博道、岩波 栄逸、矢野 庄司、糸永 一朗、安東 優、兒玉 雅明、山口 豊、大久保 浩一、阿部 航、吉岩 あおい

老年NPコースの大学院生に対して全身の臓器・器官系ごとに老年者を対象とした診察や診断において必須の知識や技術について講義した。

10）　老年アセスメント学演習

２年次前期前半

立川 洋一、永松公明、麻生 哲郎、中林 博道、小野 美喜、桜井 礼子、石田 佳代子、松本 初美、福田 広美

老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）に対して、包括的健康アセスメントおよび看護的治療マネジメントを行うことを目的に、専門的知識と技術を修得するうえで必要なシミュレーショントレーニングを行った。トレーニングには、臨床に即した代表的な事例として、初期診療を必要とする症例と、慢性期にあり継続的な診療を必要とする症例について演習を行った。

11）　老年薬理学演習

２年次前期前半

濱田 一

成人や高齢者の初期治療や症状マネジメントに使用される薬物処方について、アセスメントおよび医療処置管理が行えることを目的に、事例に適した薬物の選択やマネジメントに関する演習を行いトレーニングを行った。高齢者に生じやすい副作用や薬価についても演習を行い、これらを考慮した薬物選択について事例を通して学習を行った。

12）　老年実践演習

２年次前期後半

佐藤 博、古川　雅英、山本 真、石川 純也、小野 美喜、福田 広美、松本 初美、藤内 美保、前田 徹、竹内 山水

老年期の対象者に看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。NPに必要なデブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換、気管挿管、X線読影のスキルが向上する演習を展開した。学生には授業時間だけでなく課外の自主トレーニングも実施できる環境を整え全体的な到達度があがった。

13）　老年ＮＰ実習

２年次前期後半・後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、石田 佳代子、中林 博道、立川 洋一、
小寺 隆元、財前 博文、増井 玲子、石丸　修、麻生　哲郎、川上 克彦、酒井 浩徳、井伊 暢美、江月 優子

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的にNP実習を展開した。昨年度同様に、病院施設8週間、老人保健施設2週間、診療所4週間の合計12週間で構成した。7名の学生が履修し、医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との実習施設合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解と評価の共有を行うなど大学と各施設との連携をとった。医療事故なく実習を終了することができた。

14)　老年ＮＰ探求セミナー

２年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、石田 佳代子、井伊 暢美、江月 優子、中林 博道

老年NP実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートの作成をした。ケース発表会では担当教員や他学生との意見交換をとおして知識強化し、全学生との共有を促進した。さらに次段階の実習準備として介護老人保健施設での研修を設けた。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する高齢者の健康問題とNP役割を考察につなげられた。

15)　小児ＮＰ特論

１年次後期後半

高野 政子、草野 淳子、式田 由美子、黒木 雪絵、後藤 愛、佐藤 玉枝

講義はEBNに基づいたケアを展開できる実践能力を高めるために、臨床実践で活躍している糖尿病認定看護師と小児NPを含め６名でオムニバス形式で実施した。米国・韓国における小児NPの活躍を講義し、日本版小児NPについて考える講義となるよう解説した。その他の内容としては、小児看護で用いる理論、予防接種、小児医療における倫理、糖尿病をもつ小児と家族への看護、障害をもつ家族への支援などを講義した。家族看護のレポート課題や講義中に発表などで評価した。

16)　小児疾病特論

１年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、大野 拓郎、岩松 浩子、金谷 能明、糸永 伸能、別府 幹庸、福永 拙、小野 重遠

講義はオムニバス形式で実施した。1.小児医療と小児慢性特定疾患の現状と課題、2.小児医療におけるインフォームド・コンセントとチームアプローチ、3.小児の神経系の病気と治療、4.小児の内分泌・代謝系の病気と治療、5.小児感染症と治療、6.先天性心疾患と治療、7.小児の血液・造血器系の病気と治療、8.小児の呼吸器系の病気と治療、9.小児の腎・泌尿器系の病気と治療、10.小児の運動器系の病気と治療、11.小児の消化器系の病気と治療、12.小児の悪性腫瘍、免疫系の病気と治療、13.小児虐待、14.小児の心の病気と治療などであった。最後は筆記試験を行い理解度などを評価した。

17)　小児臨床薬理学特論

１年次、後期前半

吉田　成一、松本 康弘、高野 政子、草野 淳子

講義は、前半６コアは、薬理学の概要、薬物作用様式と作用機序、薬物動態、医薬品に関与する医療事故の概要、薬害など総論を講義した。後半24コマは、小児領域の薬理に関するテーマを講義した。例えば、1)小児の薬物動態、2)小児の薬容量の考え、オフラベルの問題など小児の特殊性、3)小児の発達障害等の社会心理的疾患の薬理、4)抗てんかん治療薬、5)小児糖尿病治療薬、6)免疫抑制剤、7)授乳婦と妊婦の薬の乳児への影響などである。評価は筆記試験で８割以上で合格とした。

18）　小児診察診断学特論

１年次後期前半

江口 春彦、別府 幹庸、鈴木 正義、堀 文彦、佐藤 圭右、高野 政子、草野 淳子

講義は、各講師の専門領域によりオムニバス形式として、学内とクリニックなど学外で開講した。病歴のとり方、診断の進め方、初期診療の基本検査の進め方と評価、X線画像の読み方、心電図波形の読み方、超音波画像の読み方を講義し、後半は、小児の主要症状の診かたと検査所見の解釈、成長・成熟に関する異常など、診察や診断において必須の知識や技術について講義した。

19）　ＮＰ論

１年次前期前半

藤内 美保、小野 美喜、桜井 礼子、高野 政子、村嶋 幸代、草間 朋子

米国および韓国から学ぶＮＰの歴史的変遷、ＮＰの役割と実践活動と、日本におけるＮＰの必要性と教育カリキュラム、ＮＰの求められる能力について教授し、今後の自分たちの目指すＮＰの活動の場と実践内容について検討した。また、ＮＰ卒業生からＮＰ活動の実際を知る機会とした。

実際に卒業生が働く臨地にて体験実習を行い、ＮＰが組織の中でどのように役割をとり、実践しているのかを学んだ。実習終了後には学生間で討議を行い、プライマリケア領域におけるＮＰの役割と今後の自らの学習課題を確認できた。

20）　フィジカルアセスメント学特論

１年次前期後半

藤内 美保、中林 博道、石田 佳代子

クライエントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように中間試験と総合試験を実施した。試験は筆記試験およびOSCEを行った。OSCEの実施の後は、学生全員とOSCEのビデオを視聴しながら、振り返りを行った。

21）　生体機能学特論

１年次前期前半

中林 博道、安倍 眞佐子、岩崎 香子

大学院のNPならびの管理コースの学生に対して、生体（人体）の構造（解剖学）や仕組み、働き（生理学、生化学）、さらに組織学に関する講義を行った。

22） 病態生理学特論

１年次後期

崔 明愛

Course Description:
This course is designed to provide the student with knowledge on alterations in human physiological functions that result from disease processes. Knowledge gained in this course will prepare the student for subsequent clinical nursing courses or clinical practice. Understanding these fundamentals enables the student to apply that knowledge to other disorders that will be encountered in clinical practice or in subsequent courses in specialized areas of pathophysiology.

Course objectives:
1. To understand the basic concepts of disease processes
2. To understand cause (etiologic process), mechanism of disease development (pathogenesis) and functional consequencies (clinical manifestation) of alterations in physiological functions that result from diseases
3. To understand research papers related to alterations in human physiologic functions
4. To enable students to apply the knowledge to clinical practice or their own research

23） 病態機能学特論

１年次前期後半

市瀬 孝道

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の個々の疾患についてプリントとパワーポイントを用いて詳しく講義した。また、４症例について、病理解剖時の所見とともに死に至る迄の経過や病気の病態像をパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

24） 人間関係学特論

１・２年次後期

関根 剛、吉村 匠平

毎回、参加学生と関連するテーマを中心に関連書籍や文献の講読・紹介を行った。その上で、全員で討議すると共に、講師らが問題や今後の発展の方向性などについて解説をした。なお、今年度は終末期、育児、出産、看護体制、コミュニケーション、教育など、幅広い分野について検討した。夜間開講のみであった。

25)　看護科学研究特論・健康科学研究特論

１・２年次前期

小嶋 光明、村嶋 幸代、甲斐 倫明、藤内 美保、平野 亙、吉村 匠平、関根 剛、福田 広美

EBNの基礎をなす看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

1.　看護研究の意義	村嶋
2.　研究テーマ・デザイン	村嶋
3.　研究の倫理と安全	平野
＜研究方法＞	
4.　調査研究	吉村
5.　観察研究	甲斐
6.　介入研究	小嶋
7.　既存のデータ分析	関根
8.　質的研究	藤内
9.　文献検索の方法	小嶋
＜原書講読＞	
10. 調査研究	吉村
11. 調査研究２	福田
12. 観察研究	甲斐
13. 介入研究	小嶋
14. 文献研究	関根
15. 質的研究	藤内

26)　看護管理学特論

１・２年次後期

桜井 礼子、福田 広美、甲斐 仁美

看護管理特論は、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる理論とその展開について学び、具体的な管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能について考えることを目標とした。履修学生は管理コース、NPコース、研究コースの学生であり、それぞれにこれまでのキャリアが異なっており、看護実践に関連して様々な場での経験を有していた。このため、これまでの自身の経験から看護管理に関する知識やスキルを学んでもらえるよう、またお互いの経験を活かしてもらえるよう、講義形式だけでなく、ディスカッションやプレゼンテーションを含めた組立とした。

主な講義・演習内容は、「看護管理の理論と管理プロセス」、「 保健・医療・福祉に関する法制度」、「保健・医療・福祉施設における看護組織」、「人的管理のあり方」、「看護職の業務管理のあり方」、「看護業務と安全管理」、「看護職の専門性と倫理的責任」、「看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方」、「看護の質評価の方法論と看護管理研究」、「組織診断等の看護管理演習」である。

27)　看護理論特論

１年次後期

李 笑雨、藤内 美保、高野 政子、猪俣 理恵、秦 さと子、桑野 紀子、伊東 朋子

This course is an introduction to the nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing. Origins of and strategies for theory development in nursing were examined. Analysis of the role of theory in nursing practice and research were explored.

Class time was provided for critics for the proposals of the nursing meta-paradigm in nursing theories. Class time was also provided for groups to meet to discuss the proposals for the nursing meta- paradigm study. And addition to that, Class time was provided for groups to meet to discuss comparative theory evaluation.

The issues for discussion were those concerning how one chooses among theories.

28)　看護教育特論

１年次後期後半

高野 政子、梅野 貴恵、石田 佳代子、宮崎 文子

看護を担う人材の育成が、質の高い看護教育に基礎をなすという観点から、教育的機能を理解することを目的として教授した。1)看護教育の歴史的変遷と法的基盤、2)看護教育制度、3)看護教育カリキュラム、評価など基本的な基盤とした。その後、各教授陣の領域を題材に、4)看護教育方法論を展開した。また、自己学習（教育）力や生涯教育能力の開発、継続教育を教授した。最後は「それぞれの立場で看護教育を考える」という課題を提出、発表し全員で討論した。

29)　看護コンサルテーション論

１・２年次前期後半

大賀 淳子、吉村 匠平、関根 剛

看護コンサルテーションについての正しい理解を得るために、原著を用いて演習形式で概念とプロセスを確認した。その後、各論として対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の具体的方法について学んだ。最後にこれらを統括し、看護コンサルテーションの実際を演習形式で体験し、コンサルタントとコンサルティーの関係性についての理解を深めるとともに、各自の課題についてディスカッションを行った。

30)　看護倫理学特論

１・２年次前期

平野 亙、小野 美喜、関根 剛

倫理的思考は、すべての看護職に不可欠であることから、各受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的とした。11回の講義と３回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「Profession の責任と倫理」、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」、「倫理的判断の方法」、「自己決定権と人間の尊厳」、「個人の尊重とプライバシー権」、「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」、「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根、「看護職の責任と倫理規程」、「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野が担当した。事例演習は、３名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は３名の教員すべてが出席してコメントし、評価を行った。

31)　看護政策論

１年次後期前半

村嶋 幸代、小池 智子（学外講師）、甲斐 仁美（学外講師）、小山 秀夫（非常勤講師）、影山 隆之、Kathy Magilvy

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策がどのようなプロセスで決定されるか、さらには決定された政策が看護の現場にどのように影響を及ぼすか考えるために、学外講師によりオムニバス形式で講義を行った。国政レベルで保健医療政策、看護における労働問題、大分県における看護政策、医療経済と保険、保険診療制度に仕組みに関するなど、今日における看護政策課題などの講義から学生自らが看護政策を立案するための視点を教授した。

32)　保健情報学特論

１・２年次前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、首藤 信通

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。各回の内容は以下の通り。

1～2.情報管理・処理のためのコンピュータ技術
3～4.医療・保健分野でのデータ処理
5.情報システムの構築と管理
6～7.統計データとは，データの要約
8～9.確率，確率分布
10.推測統計総論
11.推定
12.検定
13.統計ソフトウェア演習１
14.検定各論
15.統計ソフトウェア演習２

33)　健康社会科学特論

１・２年次後期

平野 亙

人間の健康に関する考察・研究においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、人間行動に対する社会学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的な思考と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。講義は、「社会システム論１　法と行政」、「社会システム論２　社会保障と生存権」、「障がい論、自立と差別の考察」、「社会学の方法」、「医療人類学の方法」、「医療経済学の方法」の各講で、課題演習は、１）日本における医療・保健・介護の政策に関するレポート作成と解題、２）医療・保健領域における社会諸科学の方法論による文献の抄読を行った。

34)　英語論文作成概論

１年次前期前半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)論文を科学的に構成する5つのステップ、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方、5)実験研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方

35） Intensive English Study

１年次前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

36） 原書講読演習

１年次後期

宮内 信治

共通教材として、原著論文「Nurse Practitioners and Physicians: Patients' Peerceived Health and Satisfaction with Care」を教材として英文解釈の基礎に取り組んだ。発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の増強・習得、英文法の基礎の確認と演習を取り入れ、原著論文の読解へとつなげた。

37） 広域看護学概論

１年次前期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美、藤内 修二

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

38） 地域保健特論

１年次前期

佐藤 玉枝、赤星 琴美、品川 佳満、浜野 清子

地域で生活する個人・家族、集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。

受講生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

39） 学校保健学特論

２年次前期

桜井 礼子、大賀 淳子、小野 治子（非常勤）

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について、また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的手法について教授した。また、養護教諭経験者を学外講師とし、学校保健活動や健康相談活動（ヘルスカウンセリング）の実際についての講義をいただいた。さらに、文献を用いて、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健との連携や組織的な解決手法について考える機会とした。

40） 産業保健特論

１年次前期

赤星 琴美、江口 美和

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割・具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論やモデルを用いて教授した。

常に資料やパワーポイントなど活用することで、学生が産業保健分野で活動する看護職をイメージでき、理解が深められるよう教授した。

41） 健康危機管理論

１年次前期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、桜井 礼子、甲斐 倫明、藤内 修二、玉井 文洋、佐藤 京子

健康障害のある個人、家族、集団を対象として保健師がおこなう支援の基本的な考え方が理解できるように講義した。さらに、地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する考え方や保健師活動の展開方法および多職種連携について理解を深めるために時間を十分にかけた。

保健所の保健師を講師として招くことで、地域での健康危機管理の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義を行った。

また、大分DMATで活躍している講師による講義を通して災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、学習に深みを持たせられるよう配慮した。

42） 広域看護アセスメント学演習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、村嶋 幸代、佐伯 圭一郎、品川 佳満

最も重要なスキルである地域看護診断を用いて地域社会の健康問題の抽出とその評価と、それに対する改善策について講義と演習を行った。既存資料の利用、地区視診をおこなうことで対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康問題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。

内容としては、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いながら、地域の健康問題の抽出を行った。

43)　広域看護活動研究実習

2年次前期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体のQOLを向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

保健所および市、産業において、９週間の合計４５日で構成した。３名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

８月７日(水)に実習施設の方々、学内の教員など２２名の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

44)　健康増進技術演習

１年次前期

関根 剛、安部 眞佐子、稲垣 敦

本講義では、発達段階や健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、効果的な疾病予防・健康増進の支援ができる知識と能力を養うことを目標に、運動指導、栄養指導、心理相談の３テーマから講師による講義を行った。

運動指導（合計６回）は、健康作りのための施策と運動、運動の健康効果、体力と身体活動量の測定と評価、健康作りの運動、運動メニューの作成、運動指導の心理・社会学。

栄養指導（合計７回）は、エネルギー代謝、栄養素について、消化と吸収、食事摂取基準、食事バランスガイド、ライフステージ別栄養のトピックス、食品と食品表示。

心理相談（合計８回）は、心理相談の技術（１）講義（２）傾聴技法（ロールプレイ）（３）積極技法（ロールプレイ）、グループダイナミックス（１）リーダーシップ（２）構成的エンカウンターグループ・リラクゼーション（自律訓練・行動療法）、ＰＴＳＤの予防と被害者や被災者への支援、社会資源の利用とリファーの仕方。

45)　健康教育特論

１年次前期

赤星 琴美、佐藤 玉枝

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう心がけた。

健康教育に関連した理論を教授し、教育的働きかけのあり方と保健師の地区活動の展開方法の具体的事例を挙げ、基礎知識・技術が習得できるような講義内容とした。

レポート課題を教員・学生で共有し、ディスカッションを繰り返しながら、健康教育のデモンストレーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

46)　健康リスクアセスメント演習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝

開講せず

47） 疫学特論

１年次前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を身につけることを目的としてテキストの講読とディスカッションを行った。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

48） 保健統計学

１年次前期

佐伯 圭一郎、首藤 信通

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を教授した。内容は以下の通りである。

１．健康情報の基盤となる理論
２．人口統計
３．傷病に関する統計
４．その他の保健統計
５．統計学的基礎
６．調査計画と推測統計手法
７．人口統計における統計手法
８．地域保健医療データの統計解析

49） 疫学・保健統計学演習

１年次前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、首藤 信通

開講せず

50） 環境保健学特論

１年次前期

甲斐 倫明

環境と健康との関係を理解するために、社会的ニュースを事例にして、物理的要因、化学的要因、生物的要因および社会的要因と健康との関係についての基礎概念の整理を行い、最新の研究論文を紹介しながら問題意識を高める工夫をした。講義内容は次の通りである。1)環境保健とは何か、2) WHOレポート(Global Health Riskと環境曝露)、3)DALYs（障害調整生存年数）およびその他の健康指標、4) 因果関係、5)IARCモノグラフ、6) 喫煙・ETSのリスク、7) 放射線のリスク、8)携帯電話とがんリスク、9) 化学物質のリスク、10) 感染症のリスク、11) 食の安全、12) 生活因子/社会因子/遺伝因子、13) リスクガバナンス

51）　社会保障システム特論

１年次前期

平野 亙

社会保障制度の理念と構造を理解するために、生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、社会資源としての諸制度に対する理解を深めることを目的に、講義を構築した。具体的には、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい者福祉の諸制度である。受講生が１名であったため、ゼミのような一問一答の討論も可能であった。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の２回のレポート提出により行った。

52）　保健医療福祉政策論

１年次後期

平野 亙、阿部 実

保健師として各種保健事業を企画・執行するのに必要な、政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状、保健活動と社会福祉の評価、ノーマライゼーションと障がい論、自立支援、権利擁護について講義し、さらに締めくくりとして、県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿部講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画と実際について2回の講義をいただいた。成績評価は、実際の大分県の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

53）　疾病予防学特論

１年次前期

佐藤 玉枝、藤内 修二、池邉 淑子、小野 重遠、増井 玲子、三浦 源太

さまざまな健康レベルにある個人、個人を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を習得できるように教授した。

54）　実践薬理学特論

１年次前期前半

吉田 成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が１名であったため、受講者の学習状況を把握しながら講義が行えたため、高い学習効果であったと考える。

55） 薬剤マネジメント学特論

１年次後期

赤星 琴美、平川 英敏

ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬物管理（残薬管理等）と服用方法などについて教授した。さらに、健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法や内服方法、効能などについての薬剤指導法（DOTS、抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮静剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服用方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。

56） 地域生活支援実習

１年次後期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美

開講せず

57） 地域マネジメント実習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、村嶋 幸代

開講せず

58） 助産学概論

１年次前期

梅野 貴恵

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。授業方法は、半分は資料を用いた講義形式、半分は課題を提示し、学生がプレゼンテーション、意見交換を行った。「出産の満足度」をとりあげた研究論文を各自でクリティークし発表、その後、ディスカッションした。助産とは何か、社会に求められる助産師の役割を検討することができた。今後は、助産師としてのアイデンティティを培うことができるような授業展開を行うことが課題である。

59） 周産期待論

１年次前期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、後藤 清美、梅野 貴恵

マタニティサイクルにある女性と胎児及び新生児に関する助産診断を行うために、妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常を判断するために、主な疾患の病態・検査・治療やNICUにおける新生児管理、新生児救急蘇生法について教授した。すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。評価は、筆記試験を実施した。

60） 母子成育支援特論

１年次前期

石岡 洋子、高野 政子、平野 亙、吉村 匠平、桑野 紀子、上野 桂子、井上 祥明

母子関係をめぐる問題を中心に、家族の機能とその支援方法について講義を行った。
具体的には、発達心理学からみた女性のライフサイクル、発達心理学からみた親子関係、発達心理学からみた夫婦関係、生殖医療を取り巻く社会環境とその課題、生殖医療への不妊治療をうける対象の理解、社会的支援が必要な母子への援助、家族と社会、日本と世界の子育て、子育て支援である。講義だけでなく、ゼミ形式もとりいれた。成績評価は、レポート提出により行った。

61） リプロダクティブ・ヘルス特論

１年次後期

井上 貴史、中村 聡、嶺 真一郎、宇都宮 隆史、谷口 一郎、堀永 孚郎、梅野 貴恵

女性の性や生殖に関連する健康問題を判断し対応できる能力を習得するために、性分化の機序をはじめ、生殖器に関する携帯機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識や最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防も含めた子宮頸癌の動向についても教授した。すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。評価は、筆記試験を実施した。

62） ウイメンズヘルス特論

１年次前期

梅野 貴恵、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、赤星 琴美、桑野 紀子、實崎 美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に係わる健康問題を検討し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を考慮したオムニバス形式で実施し、各講師からのレポート課題で評価した。

63） 妊娠期診断技術特論

１年次前期

石岡 洋子、梅野 貴恵、安部 真紀、吉田 成一、安部 眞佐子、小嶋 光明、渡辺 しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、妊娠の生理と診断に必要な情報とアセスメント、助産師外来の実際、妊娠期のフィジカルアセスメント、妊産褥婦の栄養摂取と栄養指導、妊産褥婦と薬剤、妊婦の日常生活適応への支援と保健指導、母子に対する放射線の影響、出生前診断を受ける妊婦への支援、MFICUにおける妊婦管理、ハイリスク妊婦の支援である。成績評価は、筆記試験と出席状況により行った。

64） 分娩期診断技術特論

１年次前期

石岡 洋子、樋口 幸、生野 末子、渡邊 めぐみ

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためにフィジカルアセスメントや助産診断を行うために必要な基礎知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、分娩開始の診断、産婦の健康生活状態の診断、胎児の発育と発育状態の診断及び胎児付属物のアセスメント、産婦の支援、ハイリスク・異常分娩時のアセスメントと対応である。成績評価は、出席状況、筆記試験により行った。

65)　産褥・新生児期診断技術特論

１年次前期・後期

梅野 貴恵、樋口 幸、和田 美智代

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践するための内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせて行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU課題探究セミナー」の導入とした。評価は、筆記試験、レポート、演習参加度から実施した。

66)　周産期診断技術演習

１年次前期

樋口 幸、佐藤 昌司、河野 富美代

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。

胎児の健康状態の診断については、高機能シュミレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCEで到達度チェックを行った。さらに、CTG波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティービクス、産褥体操など分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授したうえで、実際に体験した。

また、新生児の栄養について、桶谷式乳房ケアを行う臨床助産師を講師に招き、乳房トラブルの予防やマッサージの方法など、実際に乳房モデルや模型を使用して演習を行った。なお、様々な新生児の健康状態に合わせて対応できるよう、人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

67)　助産保健指導演習

１年次前期

石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀、梅野 貴恵

女性とその家族の個別性を理解し、各発達段階にある個人及び集団を対象とした、保健相談、健康教育、援助活動について演習を行った。思春期教育は、実際に近隣の小学校で実施した。成績評価は、レポート、演習内容により行った。

68)　分娩期実践演習

２年次前期

石岡 洋子、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀

助産実践に必要な基本的分娩介助の修得にむけた演習を実施した。産婦とその家族にとっての安全で安楽な分娩について考えるとともに、助産師の役割についても理解を深める機会となった。
評価は、筆記試験、技術試験、出席状況を考慮して行った。

69） 助産過程展開演習

１年次後期

梅野 貴恵、石岡 洋子

助産を実践するための基本的な助産過程の展開を、ペーパーペイシェントを用いて習得し実践への応用能力を身につけさせるために教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦1事例、正常経過をたどる分娩期の事例1例、正常から逸脱する可能性の高い分娩期の事例1例の計3事例を用いて助産過程の展開を実施させた。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークや各自の発表を行った。発表の後、教員が解説することで理解を深めることができていた。評価は、提出されたレポート、発表内容等から実施した。

70） 助産マネジメント論

１年次後期

梅野 貴恵、宮﨑 文子、宮崎 豊子、生野 末子、戸髙 佐枝子、越田 津矢美、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等をとりあげ、オムニバス形式で実施した。評価は、筆記試験を実施した。

71） 地域母子保健学特論

２年次後期

梅野 貴恵、赤星 琴美、疋田 理恵、力徳 広子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするために教授した。母子保健の変遷、母子保健施策、母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境についてオムニバス形式で実施した。

72） 助産マネジメント演習

２年次後期

梅野 貴恵、生野 末子、菊池 聖子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習科目とした。地域周産期医療センターに母体搬送される事例をもとに、受け入れ施設の助産師として求められる役割と助産ケアについてディスカッションしたあと、シミュレーション学習をした。さらに、助産院の院長について日常的な助産管理の全般を経験し学びを深め、助産師としてのアイデンティティを培うことにつながった。

73） 分娩介助実習

２年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別性に即した助産ケア実践能力を養うことを目的に７週間の実習を行った。実習施設は、診療所１施設である。分娩介助目標例数を13例以上として取り組んだが、９～13例の実施となった。多重課題の対応に混乱した学生には担当・専任教員が面談するなどして対応し、安全面に配慮して教員、臨床指導者の指導のもとで実習を行った。実習終了後に自己の課題を明確化することができた。他学生は助産師としての知識・技術・態度を十分身につけることができた。夜間・休日の実習は行われたものの、学部生よりも回数は少なく体調面の心配はみられなかった。

74） ハイリスク妊産婦ケア実習

２年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に３週間の実習を行った。実習施設は、総合周産期母子医療センターである。受持ち対象者のリスク状況に差はあったものの、母児の安全に配慮し助産過程を展開できた。緊急母体搬送の場面に遭遇し、助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携等について学びを深めることができた。

75） 妊娠期課題探究セミナー

１年次後期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断ができ、それをもとに、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるために、前半の８週間で大分県立総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、後半に堀永産婦人科、別府医療センターに分かれ実習した。２月からは、７月に出産する予定の妊婦を継続事例として受持ち、健診日に実習した。臨地での産科医師による指導や助産師の指導を受けながら、次第に個別に応じた保健指導が行えるようになった。超音波を用いた妊婦健康診査20例と保健指導の実際12例以上の目標は、到達することができた。

76） ＮＩＣＵ課題探究セミナー

１年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、基本的ニーズに応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立総合周産期母子医療センターNICUで、２週間実習を行った。学生１名がハイリスク新生児１名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護場面の見学や他部門との連携を見学することで、母子分離された両親への愛着形成促進のためのケアや助産師として果たすべき役割について学んでいた。

77） 地域母子保健演習

２年次後期

梅野 貴恵、別府市保健師

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習科目とした。別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。４か月児健康診査、１歳６か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組、他機関との連携を理解した。

78） 特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：影山隆之、崔 明愛
副指導教員：吉村 匠平、藤内 美保、桜井 礼子、関根 剛、福田 広美、定金 香里

下記の研究テーマの論文指導を行った。
1)後藤 成人 ：中高年一般住民における精神的不調者と自殺念慮者の特徴 -精神的健康及び自殺念慮とソーシャルサポート及び人生観の関連-
2)平井 和明：日本の救命救急センターにおけるIPV(Intimate Partner Violence)被害者への対応 -看護管理者と看護師への質問紙調査-
3)巻野 雄介 ：The effect of hot pack on small intestinal motility by Doppler ultrasound and subjective feelings in normal adults

79） 課題研究（ＮＰ）

通年

指導教員：平野 亙、林 猪都子、小野 美喜
副指導教員：定金 香里、秦 さと子、吉田 成一、松本 初美、桑野 紀子

下記の研究テーマの論文指導を行なった。
1)高根 利依子 ：特定看護師による「在宅看取り」プログラム構成要素の検討
2)庄山 由美 ：災害慢性期における特定看護師に期待される医療ニーズ
3)西田 裕子：特定看護師の健康上の問題を抱える入所者へのアプローチ ―介護老人保健施設での活動プロセス―

80） 課題研究（リカレント）

通年

指導教員：藤内 美保、高野 政子
副指導教員：甲斐 倫明、宮内 信治、安部 眞佐子、猪俣 理恵

下記の研究テーマの論文指導を行った。
1)佐藤 弥生 ：訪問看護における緊急時の判断と対応の為のプロトコールの試作 ー看護師の質向上と標準化及び医師との連携ー
2)西村 まゆみ：外来看護師の仕事意欲と職場環境との関連 ー対象者の属性に焦点を当ててー

81)　課題研究（助産学）

通年

主指導教員：梅野 貴恵
副指導教員：石岡 洋子、樋口 幸、市瀬 孝道、佐伯 圭一郎

下記の研究テーマの論文指導を行った。
1)三田 愛：20～30歳代女性の冷え改善のためのレッグウォーマー着用による効果の検討
2)安武 陽子：産後３か月の母親の児への愛着と授乳方法との関連～出産前からの希望授乳方法と実際の授乳方法からみた比較～

82)　課題研究（広域看護学）

通年

指導教員：甲斐 倫明、村嶋 幸代
副指導教員：松本 初美、岩崎 香子、首藤 信通、赤星 琴美

江口 由紀子: 小児慢性疾患治療研究事業申請児と家族への支援の検討　ーA保健所管内の児と家族の困りごとに着目してー
木村 真由美：「糖尿病未治療者訪問」から見出された糖尿病重症化予防対策の要点
武石 綾美：医療機関の退院支援の質向上に向けた支援の方策　-病院看護部長の考えに着目して-

83)　放射線保健学特論

2年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

医療で用いられる放射線・放射性物質及び環境中の放射線源とそれから被ばくに伴う健康影響についての基礎的な知識、さらに、医療および原子力災害において、看護職が患者等との対応に必要な知識と放射線の健康リスクについて教授した。

84)　放射線健康科学演習

２年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明

開講せず

85)　放射線生物物理演習

２年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

開講せず

86)　英語論文作成概論

１年次前期後半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文作成に必要な英文アブストラクを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)構造化抄録および論文の構成、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有の英語表現の事例、5)実験研究データ特有の英語表現の事例、6)アブストラクトの事例、7)アブストラクの書き方

87）　特別研究（健康科学専攻）

通年

指導教員：
副指導教員：

なし

３－８－２　博士（後期）課程

１）　保健情報科学特論

１年次前期

佐伯 圭一郎、首藤 信通、品川 佳満

生物統計学を中心に疫学・情報処理について、自己の研究を遂行する能力を高めるべく、具体的な課題に基づいて学習を進めた。受講者が１名であったため、マンツーマン形式で演習を含んだ内容であった。

統計学については、自分で理解することに加えて、基本的な指導を行えるレベルを目標に進行し、目標は達成された。

２）　精神保健学特論

１年次後期

影山 隆之

精神健康原論、産業メンタルヘルス、および自殺予防論を主なテーマとして、セミナー形式で行った。

３）　看護基礎科学演習

１−３年次後期

甲斐 倫明、市瀬 孝道、安部 眞佐子、稲垣 敦、佐伯 圭一郎、影山 隆之、吉村 匠平

チュートリアル方式で、各分野の教員が課題あるいは論文を与え、レポートあるいは課題に対するプレゼンを行うことで実施し討論を行った。

４）　生活支援看護学特論

１年次前期

藤内 美保、村嶋 幸代、伊東 朋子

オムニバス方式であり、生活援助に関する視点、援助技術の検証に関する視点、地域で生活する健康保持増進のための生活支援の３つの視点と博士論文のテーマに関するものと関連づけ、看護実践に必要とされる理論的枠組み、生活支援の在り方を理論展開できるための文献検索およびまとめを行った。

５）　発達看護学特論

１年次後期後半

高野 政子、小野 美喜

今年は受講者が１名、小児領域の学生であった。障害児とその保護者に対する知識を深めるために、文献購読したものを総説としてまとめたものを提出するようにした。

６）　健康運動科学特論Ⅱ

１年次前期・後期

稲垣 敦

博士論文に関連する論文精読を行った。また、博士論文の構成について検討し、メタアナリシスおよび統計解析等について、博士論文や投稿論文の指導を行った。

７）　放射線健康科学特論Ⅱ

１年次前後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

医療放射線被ばくの評価方法および健康影響推定に関する英語論文資料を抄読することを課題としてレポートを提出させ、論文ごとに解説する方式で行った。取り上げたテーマは次の通りである。1) 我が国の小児陽子線治療の現状、2)小児陽子線治療に伴う線量評価、3)放射線治療に伴う二次がん、4)小児CT検査による放射線被ばくと白血病と脳腫瘍リスクに関する後ろ向きコホート研究、5)PHITSコードを用いたモンテカルロシミュレーション、6)ICRP Publication 116 (Conversion Coefficients for Radiological Protection Quantities for External Radiation Exposure)

８）　メンタルヘルス特論Ⅱ

１年次前期

影山 隆之

開講せず。

９）　対人援助特論Ⅱ

１年次後期

吉村 匠平

行動制御システムとしてのアタッチメント理論についての、概論書を精読し、情緒的な結びつきとして語られることの多いアタッチメントが心理学の領域でどのように理解されているのかについて学習した。その上で、国内で発行された論文を読み、アタッチメント研究の基本的なフレームワーク、アタッチメントの測定技法についての理解を深めた。

10）　特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：影山 隆之、甲斐 倫明
副指導教員：桜井 礼子

博士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる討論によって、研究方法、結果の分析およぶ考察などの各指導が進められた。
下記の論文は論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（看護学）が授与された研究である。

實崎 美奈：不妊患者の通院開始後早期の満足度とその要因分析
　　-ケア開発に向けての基礎的研究-
田渕 康子：子宮内膜症患者の月経随伴症状とQOLに関する研究
　　-子宮内膜症の早期発見に向けて-

３－９　ボランティア活動

１）　日本ALS協会大分県支部総会

伊東 朋子
卒業生：佐藤 健成
4年生：神田 由佳、福良 知世
3年生：松坂 初美
1年生：長澤 涼子、阿南 早紀子、安部 芙衣子、金子 陽菜、岡 杏樹、林田 結似、後藤 悠、廣瀬 千恵里、長谷川 聡美、増田 恵理、永松 ゆきの、宮田 綾香

第19回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどい(平成25年５月26日)に参加した。学生は会場設営に始まり、受付、患者移送や物品販売、司会補助などを支部運営委員のメンバーとともに協同して行い、患者とも交流しながら、総会運営に貢献した。今年度は大学院生、４年次学生など、ALSに興味と関心のある学生も参加し、会の運営に寄与した。

２）　第37回コロニー久住「収穫祭」

伊東 朋子
１年次生：阿南 早紀子、安部 芙衣子、石井 奈々、伊藤 愛、井俣 美穂、金子 陽菜、久寿米木 夏海、久保 杏奈、後藤 悠、新貝 知美、永長 知佳、増田 恵理、水口 あや、宮田 綾香、山崎 紗英

10月30日　福祉農場コロニー久住にて、第37回収穫祭が行われ、ボランティア活動の要請があり15名の学生が参加した。障がい者の付き添い、模擬店販売補助などを行い、障がい者、保護者の方とも交流した。

３）　第28回Young Wing Summer Camp

高野 政子、草野 淳子
４年次生：小野 由稀、神田 由佳、迫田 愛
３年次生：秋田 さやか、２年次生：粟根 由芙子、中村 実咲、大学院１年：菅谷 愛美

第28Yng Wing Summer Camp 2013は、小児糖尿病のサマーキャンプである。８月７日～12日まで国東市国見町伊美の国見ユースホステルで開催された。参加学生は５月より月２回程度の企画実行委員会にヘルパーとして参加し、開催のために大分大学や別府大学の学生と協働して活動した。

４）　大分県立新生支援学校「運動会」

平野 亙
１年次生：８名
４年次生：１名

大分県立新生支援学校の「運動会」（5/25）で進行補助を担当した。

５）　寿志の里「七夕祭り」

河野 梢子
３年次生：７名

寿志の里の「七夕祭り」（7/17）で、入所者の移送、屋台、TAKIOソーラン踊り等を行った。

６）　本学「オープンキャンパス」

広報委員会
１年次生：20名

本学の「オープンキャンパス」（7/22）で、掲示物作成・掲示、受付、案内、TAKIOソーラン踊り、各種体験イベントの補助を行った。

７）　富士見が丘団地「夏祭り」

宮内 信治
１年次生：19名

トキハインダストリー富士見が丘店周辺で開催された富士見が丘団地「夏祭り」（8/10-11）で、会場設営、盆踊り、屋台、各種イベント参加を行った。

８）　大分大学附属特別支援学校「九重宿泊」

井伊 暢美
１年次生：20名

九重青少年の家で開催された大分大学附属特別支援学校の「九重宿泊」（7/22-24）に参加し、生徒と宿泊生活をともにしながら、食事・入浴やリクリエーション活動の指導補助を行った。

９）　大分県チャレンジ検定

４年次生：大石梨紗、地本 里美、下迫 絵里、森原 慎大、加藤 亮介

大分県教育委員会特別支援課が本年度開始した、特別支援学校の生徒を対象にした
生活面の能力をチャレンジ検定という試験を行うために学生がボランティア参加した。
受付や生徒の誘導、安全確認などをボランチィア活動した。大変貴重な経験をさせて頂き、特別支援課からは本学学生の支援や態度を高く評価された。

10）　大分市「おおいたスポーツ広場2013」

稲垣 敦
１年次生：15名

コンパルホールで開催された「おおいたスポーツ広場2013」（9/16）で、参加者および選手の健康・体力チェックを行った。

11)　大分県こころとからだの相談支援センター「こころとからだの健康フェスティバル」

平野 亙
１年次生：10名

大分県こころとからだの相談支援センターの「こころとからだの健康フェスティバル」（11/3）で、イベント補助等を行った。

12)　野津原地区「ななせの里まつり」

広報委員会、河野 梢子
１年次生：12名

みどりマザーランドで開催された野津原地区の「ななせの里まつり」（11/3）で、参加者の健康チェック、大学紹介展示、イベント参加を行った。

13)　大分トリニータホームゲーム「健康・体力チェック」

稲垣 敦、河野 梢子、吉田 智子
４年次生：14名

大銀ドームで開催された大分トリニータホームゲーム（9/21）で観客の健康・体力チェックを行った。

14)　富士見が丘団地「文化祭」

宮内 信治
１年次生：16名

富士見が丘団地の「文化祭」（11/16-17）で、町中ギャラリーの手伝い等を行った。

15)　大分大学附属特別支援学校「学習発表会」

井伊 暢美
１年次生：10名

大分大学附属特別支援学校の「学習発表会」（11/23）で、設営や進行の手伝いを行った。

16)　大分トリニータホームゲーム「健康・体力チェック」

稲垣 敦、佐藤 玉枝、伊東 朋子
３年次生：12名、大学院生：１名

大銀ドームで開催された大分トリニータホームゲーム（7/10）で観客の健康・体力チェックを行った。

17)　あいネットワーク大分「音楽会」

伊東 朋子
１年次生：５名、岩坂 茉穂、内田 真鈴、下田 優輝、森 友莉佳、矢野 亜紀子

iichiko総合文化センターで開催されたあいネットワーク大分の「音楽会」(3/9)で、知的障害者の付き添いや介助等を行った。

18)　富士見が丘連合自治会「森林探検ウォーキング」

稲垣 敦、桜井 礼子
１年次生：27名

富士見が丘団地周辺で開催された富士見が丘連合自治会の「森林探検ウォーキング」（3/29）で、参加者の血圧測定を行い、ウォーキングに参加した。

19)　大分トリニータホームゲーム「健康・体力チェック」

稲垣 敦、河野 梢子、江月 優子
４年次生：14名、大学院生：１名

大銀ドームで開催された大分トリニータホームゲーム（11/10）で観客の健康・体力チェックを行った。

20)　おおいたこどもの健康週間2013

高野 政子、草野 淳子、足立 綾
１年次生：４名

大分市スポーツ公園で開催された「こどもの健康週間2013」（10/14）で、野外活動で子どもたちと交流し、バルーンアートの遊びの支援を行った。

21)　大分空港「健康・体力チェック」

稲垣 敦、吉田 智子、河野 優子
４年生：13名

大分空港で空港利用者および空港スタッフを対象に健康・体力チェックを行った（12/8）。

22)　大分空港「健康・体力チェック」

稲垣 敦、河野 優子
４年生：15名

大分空港で空港利用者および空港スタッフを対象に健康・体力チェックを行った（12/15）。

23)　大分空港「健康・体力チェック」

稲垣 敦、赤星 琴美、河野 梢子、田中 佳子、吉田 智子、河野 優子
３年生：12名

大分空港で空港利用者および空港スタッフを対象に健康・体力チェックを行った（2/2）。

24)　大分空港「健康・体力チェック」

稲垣 敦、吉田 智子、河野 優子、植田 みゆき
３年生：14名

大分空港で空港利用者および空港スタッフを対象に健康・体力チェックを行った（2/9）。

25）　ホルトホール大分開館記念イベント「健康・体力チェック」

稲垣 敦、桜井 礼子、佐藤 弥生、吉田 智子、田中 佳子、植田 みゆき、大津留 麗理
１年生：18名

ホルトホール大分開館記念イベント（7/21）で来場者を対象に健康・体力チェックおよびヨーガ体験教室を行った。

26）　大分市「森林セラピートレイルランニング大会」救護班

稲垣 敦、田中 佳子、巻野 雄介

大分県県民の森「平成森林公園」特設クローバーコースで開催された大分市主催「森林セラピートレイルランニング大会」（3/16）で救護班を務めた。

27）　福祉農場コロニー久住「盆踊り大会」

伊東 朋子、１年次生：５名、阿南 早紀子、安部 茉衣子、大津留 実華、久寿米木 夏海、後藤 悠

8月24日（土）大分市野田にある第一博愛寮で福祉農場コロニー久住主催の「盆踊り大会」が開催され、障害者の補助、模擬店での物品販売などのボランティア活動を行った。

28）　福祉農場コロニー久住「運動会」

伊東 朋子、１年次生；５名

10月5日（土）に大分市野田の第一博愛寮において福祉農場コロニー久住主催の「運動会」が行われ、障がい者の誘導や運動会の運営補助等を行った。

４　学内セミナー

４－１　CALL英語学習システム講座

CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、７月22日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後１セッションずつ合計２回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

５　学内プロジェクト研究

５－１　特定看護師の能力到達度の縦断的変化および特定行為実践の評価

研究者　NPプロジェクト 藤内 美保、 福田 広美、石田 佳代子、江月 優子、小野 美喜、
甲斐 倫明、草野 淳子、佐伯 圭一郎、桜井 礼子、高野 政子、中林 博道、松本 初美、
宮内 信治、村嶋 幸代

厚生労働省は、「特定行為に係る看護師の研修制度」を提案し、41特定行為を包括指示もとに実施できるよう法改正に向け取組んでいる。日本NP協議会は、個人の能力の質担保のための試験や修了後の実践能力の向上、41特定行為以外の特定行為を増やし、必要な行為をタイムリーに実施できる必要性を考えている。そこで、特定看護師の臨床実践能力の質向上のため、1）患者関係、チーム医療等の臨床実践していく態度・能力2）特定行為の実施状況の２側面から現状評価をし課題を明らかにする。態度・能力の到達度は、患者関係、チーム医療、安全管理は比較的早期に「できる」レベルになっているが、問題解決能力や医療福祉システムの活用能力などは「できる」までには時間を要している。特定行為は、大学院修了生は、特定行為を幅広く実施し、41特定行為には含まれていない検査は最も多く実施していた。高い頻度で実施した特定行為と41特定行為では、解離があった。

５－２　健康増進プロジェクト

研究者　稲垣 敦、桜井 礼子、佐藤 弥生、吉田 智子、赤星 琴美、岡元 愛、河野 梢子、
田中 佳子、植田 みゆき、河野 優子

1. 大分県姫島村住民の健康寿命と運動機能について

大分県北東部にある姫島村は人口2,189人、高齢化率33.6%、要介護認定率は11.6%（大分県18.4%、全国16.2%）であり、住民の健康寿命は男性76.10歳（県内3位、全国70.42歳）、女性82.19歳（県内1位、全国73.62歳）である。本研究では姫島村住民の体力・運動機能面における健康要因を検討した。対象者は多段抽出した姫島村在住の65歳以上の男性90名（71.1±5.2歳）、女性102名（70.8±4.6歳）であり、姫島村在住60年以上は112名（58%）、40年以上は159名（83%）であった。全国値と比較すると、身長は男性で有意に低く、体重は女性で有意に高かった。また、BMIは男性でやや高く、女性では65-69歳で高く、70-74歳で低かったが、有意差は認められなかった。しかし、BMIによる肥満区分では、女性の75-79歳で有意差が認められ、痩せ及び肥満が少なく、普通（18.5以上、25.0未満）が多かった。運動機能では、長座体前屈（男性）、開眼片足立ち（男女）が有意に低かったが、10m全力歩行速度は有意に高かった。以上の点から、姫島村住民の長い健康寿命には、高い歩行能力と少ない痩せや肥満、あるいはこれらに関係する事柄が一因である可能性が示唆された。

2. 大分市の森林セラピーロードを歩いた時の代謝特性

大分市にある8箇所の森林セラピーロードのうち４箇所（高崎山、宇曾山、鎧ヶ岳、平成森林公園）を歩いた時のエネルギー代謝量の測定を行った。被験者は、運動習慣を有さない健康な30歳の男性であった。測定は呼気ガス代謝測定システムK4b2を用いて、心拍数、酸素摂取量、二酸化炭素排出量を測定し、Mets、エネルギー消費量、糖質動員率、脂質動員率を算出した。そして、各ロードの各区間毎に基準体重に相当する値に換算した。これらの結果は、各ロード入口の看板に掲載された。

3. 温泉入浴におけるリラクゼーション因子

大分の特色である温泉がリラクゼーション効果をもたらす要因を「温泉リラクゼーション因子」と命名し、その効果を明らかにすることを目的とした。被験者は健康な男性20名、女性14名であった（21.8±1.76歳）。被験者は県内の温泉施設を利用した際、入浴前後に気分を測定するための日本版POMSおよび40項目からなる温泉リラクゼーション因子チェックリストに記入した。分析の結果、入浴前後でのPOMSの6つの下位尺度得点は、T-A（緊張・不安）、D（抑うつ・落ち込み）、A-H（怒り・敵意）、F（疲労）、C（混乱）が有意に低下し、V(活気)は有意に増加した。そして、不安や緊張の低減には、和風の建築や香りの良い脱衣所が効果的、抑うつの低減には、香りのよい脱衣所、木材を使った浴室、石・岩を使った内湯が効果的、怒りや敵意の低減には、木材を使った浴室、涼しい脱衣所、石・岩を使った内湯、鍵の無いロッカーは効果的であることが示唆された。一方、活気の増加には、木材を使った浴室、暗い脱衣所が効果的、疲労の低減には、広い駐車場が効果的、混乱の低減には、暗い脱衣所や木材を使った浴室が効果的であることが示唆された。また、特に、今回、脱衣所の香りがリラクゼーション効果に強く影響していることが示された。今後、被験者を増やし、チェックリストを吟味し、性差や交絡要因、間接的効果等を考慮して温泉リラクゼーション因子を再検討してゆく必要がある。

4. 一回の登山が達成動機および自己効力感に及ぼす影響

本研究では登山による自己効力感や達成動機の変化とその持続性を明らかにし、行動変容技法としての登山の可能性を検討した。被験者は、健康な21～22歳の大学生男性1名、女性6名であった。登山は由布岳（標高1583m、大分県由布市）であり、その前後に達成動機尺度と一般セルフエフィカシー尺度の調査を実施した。分析の結果、自己充実的達成尺度得点は①登山前と③下山後に有意な増加、②頂上と⑤1週間後に有意な減少が認められた。達成動機には動機づけの内在化（自律性）が重要であり、これには①有能さへの欲求、②自律性への欲求、③関係性への欲求が関係している。この点、登山は登頂することで有能感を刺激し、自分から被験者を希望したことで自律性を刺激し、一緒に登った人々との関係性を高める可能性があり、これらが自己充実的達成動機を高めたのではないかと推測される。本研究では課題に対して非特異的である一般的な達成動機を測定したことから、登山が一般的な自己充実的達成動機を高める一つの方法であり、行動変容技法として応用可能と考えられる。また、登山の特性から生活習慣病予防や介護予防に適した運動と考えられる。

６　先端研究

６－１　保健指導対象者の生活習慣を改善するための支援の在り方についての一考察

研究者　赤星 琴美

本研究の目的は、人工透析を受けながら地域で生活している住民の健康に対する思いや疾病の予防行動が取れなかった理由等を把握し、生活習慣を改善するための支援のあり方を検討することである。対象は研究協力が得られた40～70歳代の人工透析患者70名（男性47名,女性23名）である。生活習慣病発症後も「食事」「飲酒」「喫煙」「運動」など6割以上の者の生活習慣は改善されておらず、透析開始後も生活習慣の変化は見られていなかった。理由として、「知識（病識）不足」「治療の継続が不十分」等が挙げられていた。健診後の要管理・治療者に対しいかに自己管理の意識を持たせた食事・生活改善のための保健指導を行うか、必要に応じて継続的治療に結びつけるかが保健師の重要な役割であると考える。健診での要管理者に対して定期的な保健指導を行っていくこと、要治療者が継続的に受療できるよう保健医療で連携した体制づくりの改善が急務であると考えられる。

６－２　乳幼児食物アレルギー発症の季節変動に及ぼす親のアレルギーと食習慣の影響

研究者　安部 眞佐子

食物アレルギーは乳幼児の1割が人生の初期に最も多くおこすアレルギーである。発症要因の一つとして、季節の影響をみるため、年間を通じたアンケート用紙回収を行っている。（方法）1歳６か月健診票と共に発送し、健診の来場者の90%のアンケートを回収している。（結果）現在4000部をめざして収集中である。途中報告であるが、男児の場合、母親が妊娠中に葉酸摂取が無い場合の食物アレルギー発症率は、夏、秋生まれは12.1、12.3%、冬生まれは14.2%であった。母親が妊娠中に葉酸摂取をしている場合、夏、秋、冬生まれは、それぞれ、11.3%、18.0%、14.1%であった。また、各季節での親のアレルギー保有についてみたところ、父親が食物アレルギー、アトピー，ハウスダストアレルギーを持っている場合、季節による発症率の変動がみられた。今後は、さらに収集を続け、妊娠期の葉酸摂取と、親のアレルギーを合わせて解析したいと考えている。

６－３　正常新生児における胎脂過酸化脂質の経時的変化

研究者　樋口 幸

近年、早期新生児期の保清方法にドライテクニックが導入されている。過酸化脂質は、皮膚の顆粒層にダメージを与えるといわれている。過酸化脂質の初期生成物であるヘキサノイルリジン（HEL）と最終生成物であるマロンジアルデヒド（MDA）の経時的変化を明らかにし、皮膚に影響を及ぼす時期について推定することを目的とした。

正常正期産児10名（男女各5名）から胎脂を採取し、HELとMDAを経時的に計5回測定した。

現在も実験中であるが、胎脂の過酸化脂質は経時的に増加していくことが推測される。HELも細胞損傷を引き起こすことは先行研究で明らかにされており、胎脂を長時間温存することで皮膚へダメージを与える可能性が示唆された。今後は、過酸化脂質の生成と皮膚への影響をダメージ指標としての炎症反応、皮膚のバリア機能の状態を合わせて評価していく必要がある。

６－４　微小粒子（PM2.5、二次生成有機エアロゾル)による雄性生殖機能への影響

研究者　吉田 成一

大気中の浮遊粒子状物質が雄性生殖機能に影響を与えることを明らかにしてきた。しかし、最近特に注目されている、PM2.5などの微小粒子による雄性生殖機能への影響は不明である。そこで、本研究では、実際、我々が呼吸により吸入曝露されうる微小粒子を用い、マウスに投与し雄性生殖機能にどのような影響を与えるのか明らかにする必要がある。

ICR系マウスに北九州市で煙霧発生時に中国より越境飛来した粒子を多く含むPM2.5（100μg/匹、4回)を気管内投与した。最終投与の翌日、心臓採血後、精巣及び精巣上体を摘出した。精巣を用い造精機能評価、発現遺伝子解析、病理解析、精巣上体を用い精子性状解析を行った。

造精機能の低下および病理組織像の変性が認められ、越境飛来したPM2.5が雄性生殖機能を悪化させることを示している。しかし、精子性状に影響は認められなかった。含まれる、成分が異なるが、黄砂やディーゼル排ガスと言った粒子状物質は造精機能の低下を示すとともに、精子性状の悪化も示すことから、これらの粒子と比較すると、今回用いたPM2.5の雄性生殖機能への影響は小さい可能性がある。今後、どの様な成分が造精機能や精子性状の悪化に寄与するのか明らかにする必要がある。

７　奨励研究

７－１　看護研究を行う際の倫理的配慮に関する実態調査　助産師に焦点をあてて

研究者　石岡 洋子

勤務助産師が研究を行う際の倫理的配慮についての実態を明らかにすることを目的とし、全国の産科を開設している施設に勤務している助産師に対し、無記名式自記式質問紙調査を行った。その結果、研究の実践において、研究の依頼は研究者自身で行っていると回答した助産師が多く、その理由として研究者自身が説明を行うことが研究者の責任と考えている助産師が多かった。質問紙の回収期間と回収方法については、倫理的配慮が行えていたが、その理由は「業務の都合」等倫理的配慮を念頭においたものではなかった。
助産師は、研究に関する倫理綱領や規定に対する知識が十分とはいえず、研究の倫理を理解して研究を行っていないことが考えられ、倫理的配慮が行えるような研修会等の検討や倫理綱領や研究規定の普及にむけた対応が必要である。

７－２　細胞の動態変化に伴う活性酸素種量及び遺伝子突然変異の蓄積性の検討

研究者　石川 純也、小嶋 光明

細胞が不可逆的に分裂を停止することを細胞老化という。これは細胞分裂の際に発生する遺伝子突然変異の蓄積を防ぐ機構とされている。しかし一方で、がん細胞周囲には老化した細胞が多く認められ、このため細胞老化は、がんの前段階でもあると考えられている。このように発がんと細胞老化とは密接に関係している。著者らは、細胞老化により活性酸素種等の蓄積が生じ、これにより遺伝子突然変異の発生率が上昇することでがん化につながると仮定した。そこで本研究では発がん機構の解明の一環として、ヒト胎児肺由来の正常線維芽細胞を用い、分裂回数の異なる細胞群における老化マーカー発現量、活性酸素種産生量、DNA損傷数、遺伝子突然変異数の変化について調査した。

７－３　産後６か月の母親の身体症状要因の検討

研究者　植田 みゆき

少子化が進む中、家族形態の変化や晩婚化などから、妊娠・出産・育児への切れ目ない支援が課題である。しかし、育児期の研究は、児に関すことが多く、母親の健康面についての報告は少なく、実態が明らかになっていない。そこで本研究の目的は、産後6か月の母親の身体症状の実態を明らかにし、その要因の検討を行った。
平成25年10月～12月に1065部郵送配布し、297部（27.9%）郵送回収した。そのうち早産、児に疾患がある7部を除外し290部（27.2%）を分析対象とした。産後6か月の母親の98.2%はさまざまな気になる身体症状の自覚症状があった。各身体症状について初経産別で検定を行ったが、初経産別では「体重・体型について」以外では有意差がみられなかった。
病気ではないとされる産後6か月の女性は様々な身体の自覚症状を抱えており、女性自身の身体的健康に配慮した継続的な支援が重要であると考えられる。また、気になる身体の自覚症状の要因として初経産は体重・体型のみであることから、母親の身体症状の要因は、出産・子育て経験以外の要因であると考えられる。

７－４　在宅で医療的ケアが必要な障害児の母親がケアを判断し実施ができる力量を身に付けるプロセス

研究者　草野 淳子

厚生労働省は、平成15年「医療体制の改革ビジョン」の中で、地域医療連携、在宅支援機能の強化に取り組んでいる。その結果、在宅で生活する重症心身障害児は増加しているが、家族の力を中心に在宅療養をしている。医療依存度の高い小児は、生命の危機に直結しやすいため、身体的・精神的・心理的な疲弊を感じている。

そこで、本研究の目的は医療的依存度が高い児の母親が子どもの身体状況を理解し、ケアを判断・実施できるプロセスを明確にすることで説明できる概念の生成を行うことである。

７－５　模擬患者参加型教育方法の効果と課題

研究者　栗林 好子、伊東 朋子、秦 さと子、水野 優子、巻野 雄介、藤内 美保

コミュニケーション能力育成のためにSP参加型教育方法を実践し、コミュニケーション尺度（藤本・大坊のコミュニケーション・スキル尺度：ENDCOREs）を用いて、その効果と課題を検証した。コミュニケーション・スキルを構成する階層構造には基本スキル（自己統制・表現力・解読力）とより高次の対人スキル（自己主張・他者受容・関係調整）があるが、学生全体の演習前後のコミュニケーション・スキルの平均は全ての項目で上昇していた。また、対人スキルの下位尺度である他者受容のみ有意差が見られ、SP参加型のコミュニケーション演習は特に対人スキル育成に効果があったと言える。しかし、事例別にみると基本スキルの下位尺度である自己統制、表現力などの下位尺度が演習後に低下をしている事例も多くみられた。コミュニケーションにおいて対人スキルも大切であるが、まずは基本スキルの育成を考える必要があり、そのためにも段階的な演習計画や、基本スキル向上を視野に入れた事例シナリオの作成、学生個々が苦手とするコミュニケーションに合わせた演習内容の検討も考慮することが示唆された。

７－6　三次元動作解析装置VICONを用いた腰部にかかる負担度の評価の試み

研究者　巻野 雄介、秦 さと子

身体動作に伴う特定部位の負担度を測定するには、断片的に力の程度を測定するよりも動作の一連の動きにそって加わる負担を動作の流れと共に評価する必要がある。そこで、本研究は3次元的に継時的動作を解析することを得意とするVICONに注目し、日常生活動作が腰部に与える負担度をVICONにて継時的に測定し評価することが可能かを検討した。被験者は、腰部の負担度に影響すると言われる骨盤傾斜角度の異なる20歳代の女性3名に対して、三次元動作解析装置VICONと筋電計を用いて、歩行と前屈動作時の動作解析を行った。その結果、筋電図同様に身体にかかる負担度の変化の情報が経時的に得られるだけでなく、関節角度や重心の変化等、腰部にかかる負担度が何に起因しているかを分析することが可能であった。その中で、被験者毎に腰部のモーメントの経時的な変化が異なることがわかった。VICONは、腰部にかかる負担度の継時的評価に大いに活用できる可能性が確認できた。

８　インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第10巻第１号が平成24年６月、第10巻第２号が11月に刊行された。刊行された論文と執筆要綱等は、本学ホームページ（http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html）に公開されており、誰でも無料で投稿、購読することができる。

第11巻第１号　目次

研究報告
「臨地実習における学生の患者情報取り扱い上の問題およびその指導法」
夏目 美貴子、太田 勝正

＜特集＞「特定看護師」
特集にあたって
「医療提供者として患者さんから選択される『特定看護師』を目指して」
草間 朋子

ケースレポート
「介護老人保健施設における特定看護師の介入と効果 －血糖コントロール不良の虚弱高齢者事例を通して－」
廣瀬 福美

「地域拠点病院における特定看護師のプライマリ・ケア領域活動の実際」
塩月 成則

「訪問看護ステーションの特定看護師の活動の実際」
光根 美保

「特定看護師としての活動 ～褥瘡を有する在宅療養者の症例から～」
村井 恒之

第11巻第２号　目次

原著
「子宮内膜症患者の月経に伴う自覚症状の特徴と診断・治療の実態」
田渕 康子、草間 朋子、伴 信彦、吉留 厚子

資料
「思春期のてんかん患者の病気認知に関する研究」
足立 綾、高野 政子、三宅 希実

＜企画＞「大分県立看護科学大学 第14回看護国際フォーラム」
'End-of-Life care in Australia: Issues and trends'
Margaret O'Connor

'End-of-Life care in Korea: Issues and trends'
So-Hi Kwon

「日本における看とりのチーム医療：現状と課題」（太田秀樹先生の講演から）
江月 優子

第12巻第１号　目次

原著

「模擬患者用ストレス調査票（SPSSQ）2013年度版の開発と信頼性・妥当性の検証 －模擬患者の健康と継続参加を志向したストレス状態の包括的測定－」
會田 信子、半谷 眞七子、阿部 恵子、村岡 千種、久田 満、
鈴木 伸一、青松 棟吉、安井 浩樹、藤崎 和彦、植村 和正

＜特集＞「食品の安全」

総説

「健康障害を生じるおそれのある化学物質の1日摂取量 －農薬等、環境汚染物質、金属類、食品添加物－」
松本 比佐志

資料

「大分県における最近の食中毒の傾向について」
小河 正雄

「加工食品及び小麦アレルギー代替食品中の特定原材料（小麦）の測定」
高松 伸枝、村松 毅、近藤 康人

９　業績

著書

岩崎 香子、大和 英之，慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常（CKD-MBD）改訂版，医薬ジャーナル，大阪府，2013.

岩崎 香子、大和 英之，CKD-MBDハンドブック　2nd edition，日本メディカルセンター，東京都，2013.

教材

佐藤 弥生、高野 政子、伊東 朋子、福田 広美、銅直 茜，「在宅での確実な吸引手技による感染予防と停電時の対応」DVD，平成25年度大分県在宅医療従事者資質向上事業公立大学法人大分県立看護科学大学，大分市，2014.

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子，訪問看護パワーアップのためのフィジカルアセスメントDVD，平成25年度大分県在宅医療従事者資質向上事業 公立大学法人大分県立看護科学大学，大分市，2014.

研究論文

足立 綾、高野 政子、三宅 希実, 思春期のてんかん患者の病気認識に関する研究, 看護科学研究, Vol.11, 42-47, 2013.

石岡 洋子、平野 亙、小野 美喜, 看護学生を対象にした質問紙調査を行う際の倫理的配慮に関する実態調査　看護教員の倫理的配慮に関する認識と実践, 日本看護倫理学会誌, 5(1), 12-21, 2013.

Y. Fukushi, H. Yoshino, J. Ishikawa, M. Sagisaka, I. Kashiwakura, A. Yoshizawa., Synthesis and anticancer properties of phenyl benzoate derivatives possessing a terminal hydroxy group., Journal of Materials Chemistry, B2, 1335-1343, 2013.

M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, H. Takano, M. Nishikawa, G. Sun, T. Shibamoto., Induction of immune tolerance and reduction of aggravated lung eosinophilia by co-exposure to Asian sand dust and ovalbumin for 14 weeks in mice., Allergy Asthma Clin Immunol, 9(1), 19, 2013.

M. He, T. Ichinose, Y. Song, Y. Yoshida, K. Arashidani, S. Yoshida, B. Liu, M. Nishikawa, H. Takano, G. Sun., Effects of two Asian sand dusts transported from the dust source regions of Inner Mongolia and northeast China on murine lung eosinophilia., Toxicol Appl Pharmacol, 273(3), 647-655, 2013.

B. Liu, T. Ichinose, M. He, F. Kobayashi, T. Maki, S. Yoshida, Y. Yoshida, K. Arashidani, H. Takano, M. Nishikawa, G. Sun, T. Shibamoto., Lung inflammation by fungus, Bjerkandera adusta isolated from Asian sand dust (ASD) aerosol and enhancement of ovalbumin-induced lung eosinophilia by ASD and the fungus in mice, Allergy Asthma Clin Immunol, 10(1), 10, 2013.

市瀬 孝道，実験研究による黄砂の毒性評価，医学のあゆみ，247(8), 998-1003, 2013.

市瀬 孝道，PM2.5とその健康影響，健康教室，753, 64-67, 2013.

H. Tanaka, Y. Iwasaki, H. Yamato, Y. Mori, H. Komaba, H. Watanabe, T. Maruyama, M. Fukagawa., p-Cresyl sulfate induces osteoblast dysfunction through activating JNK and p38MAPK pathway., Bone, 56, 347-354, 2013.

Y. Iwasaki, J.J. Kazama, H. Yamato, H. Shimoda, M. Fukagawa., Accumulated uremic toxins attenuate bone mechanical properties in rats with chronic kidney disease., Bone, 57, 477-83, 2013.

河原 聡美、梅野 貴恵, 母乳栄養率・母乳育児支援の出産施設別の比較と母親が望む育児支援の検討, 母性衛生, 54(2), 317-324, 2013.

森 幹雄、小野 美喜, 特別養護老人ホームで働く看護職の専門職的自律性に寄与する要因, 日本看護倫理学会誌, 6(1), 46-52, 2014.

K. Ono, T. Hiraoka, A. Ono, E. Komatsu, T. Shigenaga, H. Takaki, T. Maeda, H. Ogusu, S. Yoshida, K. Fukushima, M. Kai., Low-dose CT scan screening for lung cancer: comparison of images and radiation doses between low-dose CT and follow-up standard diagnostic CT., SpringPlus, 2, 393-400, 2013.

杉本 圭以子、影山 隆之, 一地域の救急医療機関および精神科医療機関を受診した自殺企図者に関する調査 医療者による「死ぬ意図」の確認に注目して, こころの健康, 28(2), 39-50, 2013.

平井 和明、影山 隆之, 犯罪被害者の医療の必要性に関する犯罪被害者支援センタースタッフの判断, こころの健康, 28(2), 51-58, 2013.

草野 淳子、高野政子、中垣紀子, 子育て中の看護師の復職プロセスと対策に関する文献的研究 ワーク・ライフ・バランスに着目して一, 第44回（平成25年度）日本看護学会論文集看護総合, 2014.

K. Sadakane, T. Ichinose, H. Takano, R. Yanagisawa, E. Koike, KI. Inoue., The alkylphenols 4-nonylphenol, 4-tert-octylphenol and 4-tert-butylphenol aggravate atopic dermatitis-like skin lesions in NC/Nga mice., J Appl Toxicol, [Epub ahead of print], 2013.

K. Sadakane, T. Ichinose, H. Takano, R. Yanagisawa, E. Koike., Effects of oral administration of di-(2-ethylhexyl) and diisononyl phthalates on atopic dermatitis in NC/Nga mice., Immunopharmacol Immunotoxicol, 36(1), 61-69, 2014.

K. Sadakane, T. Ichinose, H. Takano, R. Yanagisawa, K. Inoue, H. Kawazato, A. Yasuda, K. Hayakawa., Organic chemicals in diesel exhaust particles enhance picryl chloride-induced atopic dermatitis in NC/Nga mice., Int Arch Allergy Immunol, 162(1), 7-15, 2013.

石川 雄一、信岡 かおる、市瀬 孝道、定金 香里、吉田 成一、長谷部 建美, 完熟ゆず果皮の抗アレルギー能とそれを活用した健康飲料の商品化　　アレルギーの臨床, 447(3), 80-85, 2013.

橋本 勇人、品川 佳満, 医療系学生による患者情報に関する事故の概要と対応 教育機関が把握しておくべき法的対応を中心として, 川崎医療短期大学紀要, 33号, 49-54, 2013.

山内 美奈子、高野 政子, 保育所（園）における発熱児と保護者に対する支援の実態, 第43回（平成24年度）日本看護学会論文集　小児看護,　98-101, 2013.

徳丸 裕恭、高野 政子、中垣 紀子, 入院中の幼児の安静度の違いによる看護師の遊びの支援に関する研究, 第43回（平成24年度）日本看護学会論文集　小児看護, 58-61, 2013.

藤内 美保、中林 博道、石田 佳代子、松本 初美, プライマリケア領域における看護師の高度な臨床実践能力の修得・維持・向上のためのOJT（On the Job Training）研修プログラムの提案, 平成24年度総括分担研究報告書　厚生労働科学研究費補助金　地域医療基盤開発推進研究事業, 2014.

乾 つぶら、 林 猪都子、 猪俣 理恵、 坂口 隆之, 分娩施設に関する情報の活用についての調査, 日本母子看護学会誌, 7巻2号, 33-39, 2014.

A. Taguchi, T. Naruse, Y. Kuwahara, S. Nagata, S. Murashima., Home visiting nurse agencies for community dwelling elderly at nighttime in Japan., Home Health Care Management & Practice, 25(6), 256-263, 2013.

A. Taguchi, T. Naruse, Y. Kuwahara, S. Nagata, S. Murashima., Identification of the need for home visiting nurse: development of a new assessment tool., International Journal for Integrated Care, in press, 2014.

M. Matsuzaki, M. Haruna, K. Nakayama, M. Shiraishi, E. Ota, R. Murayama, S. Murashima, SA. Yeo., Adapting the Pregnancy Physical Activity Questionnaire for Japanese Pregnant Women., Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing, 1, 107-116, 2014.

M. Shiraishi, M. Haruna, M. Matsuzaki, E. Ota, R. Murayama, S. Sasaki, SA. Yeo, S. Murashima., Relationship between plasma total homocysteine level and dietary caffeine and vitamin B6 intakes in pregnant women., Nursing & Health Science, in press, 2013.

S. Nagata, C. Teramoto, R. Okamoto, R. Suzuki, K. Koide, M. Nishida, M. Nomura, T. Tada, E. Kishi, Y. Sakai, N. Jojima, E. Kusano, S. Iwamoto, M. Saito, S. Murashima., Tsunami impact on mortality: A town severely damaged by the Great East Japan Earthquake on 11 March 2011., Disasters Journal,　　in press, 2014.

T. Naruse, A. Taguchi, Y. Kuwahara, S. Nagata, M. Sakai, I. Watai, S. Murashima., The effect of skill mix with non-nursing assistant on work engagement among home visiting nurses in Japan., The Journal of Nursing Management, in press, 2014.

永田 智子、桑原 雄樹、田口 敦子、成瀬 昂、村嶋 幸代, 利用者の状態像別にみた訪問看護業務の内容と時間, 日本在宅ケア学会誌, 16(2),　61-68, 2013.

岩 りほ、有本 梓、成瀬 昂、村嶋 幸代, 首都圏で幼児を育てる母親以外の役割の捉え方 就業の有無別の検討, 小児保健研究, 72(3), 377-385, 2013.

戸村 ひかり、永田 智子、村嶋 幸代、鈴木 樹美, 退院支援看護師の個別支援における職務行動遂行能力評価尺度の開発, 日本看護科学会誌, 33(3), 3-13, 2013.

坂田 祥、成瀬 昂、田口 敦子、村嶋 幸代, 幼児をもつ母親の育児困難感と子どもの行動特性, 日本公衆衛生雑誌, 61(1), 3-15, 2014.

成瀬 昂、田口 敦子、永田 智子、桑原 雄樹、村嶋 幸代, 居宅介護支援専門員によって同一日に訪問サービスを頻回に必要と判断される要介護者の発現率と対象像の明確化, 日本公衆衛生雑誌, 60(6), 370-376, 2013.

村嶋 幸代、田口 敦子、永田 智子、成瀬 昂、桑原 雄樹、福田 敬、山田 雅子、田上 豊　訪問看護ステーションにおける夜間・早朝サービス提供体制の変化 2003年と2009年の全国調査から, 厚生の指標, 60(2), 1-9, 2013.

馬場 千恵，村山 洋史，田口 敦子，村嶋 幸代,乳児を持つ母親の孤独感と社会との関連について 家族や友達とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート, 日本公衆衛生雑誌, 60(12), 727-737, 2013.

堀越 直子、桑原 雄樹、田口 敦子、永田 智子、村嶋 幸代, 離島で暮らす高齢者の在宅療養・死亡場所にかかわる特徴 入院施設の有無に着目して, 日本公衆衛生雑誌, 60(7), 412-421, 2013.

堀越 直子、桑原 雄樹、田口 敦子、小澤 卓、永田 智子、村嶋 幸代, 離島地域における医療・福祉サービスと島内での看取りとの関連, 厚生の指標, 60(6), 9-14, 2013.

M. He, K. Inoue, S Yoshida, M. Tanaka, H. Takano, G. Sun, T. Ichinose., Effects of airway exposure to di-(2-ethylhexyl) phthalate on allergic rhinitis., Immunopharmacol Immunotoxicol, 35(3), 390-5, 2013.

A. Honda, Y. Matsuda, R. Murayama, K. Tsuji, M. Nishikawa, E. Koike, S. Yoshida, T. Ichinose, H. Takano., Effects of Asian sand dust particles on the respiratory and immune system., J Appl Toxicol, 34(3), 250-7, 2014.

吉田 成一、西川 雅高、押尾 茂、賀 森、 市瀬 孝道, 日本で採取した風送黄砂がマウス造精機能および精子運動能に与える影響, 大気環境学会誌, 48(4), 175-180, 2013.

K.S. Lee, J.S. Jeong, M.A. Choe, J.H. Kim, G.J. An, J.H. Kim, G.S. Shin, Y.K. Kim, Y.M. Lee, S.H. Chu, S.M. Choi, S.M, Development of standard syllabus for 4subjects (Structure and Function of Human Body, Pathogenic Microbiology, Pathophysiology, Mechanisms and Effects of Drug) of bionursing., Journal of Biological Nursing Science, 15(1), 33-42, 2013.

J.K. Koh, M.S. Jung, M.A. Choe, Y.I. Park, K.S. Bang, J.A. Kim, M.S. Yoo, H.Y. Jang, Modeling of nursing competencies for competency-based curriculum development., The Journal of Korean Academic Society of Nursing Education, 19(1), 87-96, 2013.

M.K. Cho, G.S. Shin, M.A. Choe, A study of clinical nurses' knowledge, need and clinical performance about pathphysiology., Journal of Korean Biological Nursing Science, 15(3), 39-146, 2013.

Y.I. Park, J.A. Kim, J.K. Koh, M.S. Chung, K.S. Bang, M.A. Choe, M.S. Yoo, H.Y. Jang, An identification study on core nursing competency., The Journal of Korean Academic Society of Nursing Education, 19(4), 663-674, 2013.

その他の論文

甲斐 倫明, 放射線の健康リスクに対する現状認識とその防護の考え方, 学術の動向, 5, 2-6, 2013.

A.J. Gonzalez, M. Akashi, J.D. Boice Jr, M. Chino, T. Homma, N. Ishigure, M. Kai, S. Kusumi, J.K. Lee, H.G. Menzel, O. Niwa, K. Sakai, W. Wiess, S. Yamashita, Y. Yonekura., Radiological protection issues arising during and after the Fukushima nuclear reactor accident, J Radiol Prot, 33, 497-571, 2013.

影山 隆之, 学校における自殺予防とメンタルヘルスリテラシー, 自殺予防と危機介入, 33(1), 1-3, 2013.

影山 隆之, 編集者からみた「受理したい論文」の書きかた, こころの健康, 28(2), 59-67, 2013.

影山 隆之, 子どもの自殺予防対策を考える, 地域保健, 45(2), 12-39, 2014.

河野 梢子, 囚われの倫理から本当の倫理へ, 看護展望, 38 (6), 34-39, 2013.

佐伯 圭一郎, インターネットを利用した調査・テスト, 保健の科学, 55(10), 670-674, 2013.

村嶋 幸代, 多様な保健師教育の現状と今後の方向性, 保健師ジャーナル, 69(9), 681-684, 2013.

村嶋 幸代, 高齢社会における都市の健康と地域包括ケア Aging in Placeを目指して , 第75回全国都市問題会議文献集「都市の健康 人・まち・社会の健康づくり」, 147-153, 2013.

吉田 成一, 越境大気汚染物質の黄砂による雄性生殖機能への影響, Endocrine Disrupter News Letter-Japan Society of Endocrine Disrupters Research , 16 (1), 6, 2013.

学術講演等

市瀬 孝道、賀 淼、吉田 成一、吉田 安宏、嵐谷 奎一, PM2.5を多く含む黄砂と含まない黄砂のアレルギー性気道炎症への影響, 衛生薬学環境トキシコロジー（2013）： フォーラム1., 福岡県, 2013.9.

岩崎 香子, 腎臓と骨質, 第56回日本腎臓学会学術集会, 東京都, 2013.5.

岩崎 香子, 動的粘弾性による骨評価 具体的な測定値 , 第5回骨形態フォーラム, 福島県, 2013.9.

岩崎 香子, CKDと骨質, 第15回日本骨粗鬆症学会, 大阪府, 2013.10.

小野 美喜, 特定行為に係る看護師を養成する教育, 日本救急看護学学会, 福岡県, 2013.9.

小野 美喜, 特定行為に係る看護師の研修制度の法制度化に向けて, 大分県職能合同交流集会, 大分市, 2013.8.

小野 美喜, 専門職として時代・社会のニーズにこたえていく看護職を目指して一特定行為に係る看護師を大学院修士課程で養成する試み, 全国看護師交流集会Ｉシンポジウム, 千葉県, 2013.6.

M. Kai., Experience and current issues with recovery management from the Fukushima accident, ICRP 2013: 2nd International Symposium on the System of Radiological Protection, UAE, 2013.10.

甲斐 倫明, 放射線発がんの数理モデルの現状と課題, 日本放射線影響学会第56回大会シンポジウム, 青森県, 2013.10.

甲斐 倫明, 低線量・低線量率のリスク推定のための理論とデータ, 日本放射線影響学会第56回大会シンポジウム, 青森県, 2013.10.

影山 隆之, 苦しくともじっと耐える人は地域とのつながりが弱い？ 大分県の住民調査から, 総合自殺予防学インテンシブコース　地域における自殺対策の科学的エビデンスと展望, 秋田県, 2013.10.

影山 隆之、小林 敏生, 三交替勤務者の夜勤連続時における睡眠を改善するための生活習慣改善の試み, 第86回日本産業衛生学会, 愛媛県, 2013.5.

後藤 成人, The Features of a Mentally Unhealthily and Suicidal Ideation in the Middle-Aged General Population – The Relation of Mental Health and Suicidal Ideation, Social Support, and View of Life -, 第16回看科大ソウル大研究交流会, 大分市, 2014.3.

藤内 美保, 看護師の能力認証に関する制度モデル事業を通して　医師・看護師の連携・協働を考えるシンポジウム 教員の立場から, 第44回日本看護学会　看護総合学術集会, 別府市, 2013.9.

藤内 美保, 「特定行為に係る看護師研修制度について」および「教員の立場から」, 大分県看護協会特定行為に係る看護師と大分県下の看護職交流会, 大分市, 2014.1.

平野 亙, 患者の権利オンブズマンの活動と苦情調査, 大分県医療コンフリクトマネジメント研究会第1回定期セミナー, 大分市, 2013.4.

平野 亙, 意思決定を支える論理と倫理　患者・家族の思いと医療の倫理, 第12回大分県神経難病地域支援ネットワーク研修会, 別府市, 2014.3.

村嶋 幸代, 在宅ケアのシステム構築を目指して 地域看護の立場から, 国立長寿医療研究センター 第３回CGSSセミナー, 愛知県, 2013.5.

村嶋 幸代, 公衆衛生看護活動の専門性と展望, 東京都医学総合研究所 夏のセミナー「難病の地域ケアコース」, 東京都, 2013.6.

村嶋 幸代, 地域ケアから長寿のふるさとを, 第34回世界健康フォーラム2013・兵庫 ミレニアムフォーラム, 兵庫県, 2013.11.

村嶋 幸代, 共に支え、共に歩く エビデンスは大きな武器になる, 第２回訪問看護フォーラム・九州ブロック学術集会, 大分市, 2013.12.

村嶋 幸代, Nurses' Roles and Strategies for Long Term Care in Japan, 第16回大分看科大ソウル大研究交流会, 大分市, 2014.3.

村嶋 幸代, 看護実践の改善に役立つ看護研究 「研究」は看護実践の意味を示し、実践を楽しくする, 看護研究交流センター　第1回看護研究交流会, 大分市, 2014.3.

吉田 成一, 越境大気汚染の黄砂・PM2.5と内分泌かく乱作用, 第27回環境ホルモン学会講演会, 東京都, 2013.6.

吉田 成一, 越境大気汚染物質「黄砂」と雄性生殖機能の低下, 日本アンドロロジー学会・第32回学術講演会, 大阪府, 2013.7.

M.A. Choe, 大分県立看護科学大学における国際看護学教育の取り組み, The 16th Annual Meeting of Japanese Society for International Nursing, Japanese Society of International Nursing, Yokohama, 2013.9.

M.A. Choe, A study of clinical nurses' knowledge, need and clinical performance about pathophysiology., The 9th International Nursing Conference, Korean Society of Nursing Science, Korea, 2013.10.

M.A. Choe, Perspectives on Bionursing Science., 2013 winter conference, Korean Society of Biological Nursing Science, Korea, 2013.11.

学会発表

足立 綾、高野 政子、草野 淳子, 高機能シミュレータ を用いた小児のフィジカルアセスメントの実際 呼吸・心音聴取と血圧測定の効果的な演習, 第14回九州・沖縄小児看護教育研究会, 長崎県, 2013.8.

安部 眞佐子, 妊娠期の葉酸摂取と児のアレルギー疾患の発症について, 第8回大分県母性衛生学会, 大分市, 2013.11.

安部 眞佐子, 乳幼児期の食物アレルギー発症に及ぼす妊娠中の母親の葉酸サプリメント摂取の影響, 第35回日本臨床栄養学会, 京都府, 2013.11.

安部 眞佐子, The effect of maternal folic acid intake during pregnancy on incidence of child food allergy, European academy of allergy and clinical immunology 2013, Italy, 2013.6.

石川 純也、林 直樹、山口 平、門前 暁、柏倉 幾郎, 放射線ばく露ヒト造血幹/前駆細胞のサイトカイン非存在下における分化・増殖能の変化, 若手放射線生物学研究会 第3回勉強会, 大阪府, 2013.8.

石川 純也、廣内 篤久、伊藤 巧一、千葉 満、中野 学、門前 暁、吉野 浩教、羽澤 勝治、中野 光、山口 平、田中 公夫、柏倉 幾郎, 致死線量放射線ばく露マウスに対するc-Mpl作動薬の作用, 第56回日本放射線影響学会, 青森県, 2013.10.

西山 彩香、石川 純也、山口 平、廣内 篤久、柏倉 幾郎, 放射線曝露個体における血中ストレスマーカーの変動, 第56回日本放射線影響学会, 青森県, 2013.10.

村上 翔、廣内 篤久、石川 純也、山口 平、柏倉 幾郎, 放射線曝露個体におけるマスト細胞への分化・増殖能の変化, 第56回日本放射線影響学会, 青森県, 2013.10.

K. Ishida, The Necessary Advanced Skills of Nurses for Black-tagged Casualties in Disasters: The DMAT Nurse's Opinions, ICN(The International Council of Nurses)25th Quadrennial Congress, Australia, 2013.5.

Y. Song, T. Ichinose, T. Kanazawa, Y. Yoshida., Asian sand dust induces autophagic markers and activates NF-κB in immune cells., 100th American association of Immunology annual meeting, Honolulu, 2013.5.

Y. Song, T. Ichinose, T. Kanazawa, Y. Yoshida., Intratracheally administration of Asian sand dust activates NF-κB in immune cells., 15th International congress of Immunology, Milano, 2013.8.

市瀬 孝道、He Miao、吉田 成一、嵐谷 奎一、高野 裕久，発生源の異なる２つの黄砂の好酸球性気道炎症の増悪作用，第54回大気環境学会年会，新潟県，2013.9.

市瀬 孝道、賀 淼、高野 裕久，Toll様レセプターKO喘息モデルマウスを用いた黄砂のアレルギー増悪作用の検討，第63回に本アレルギー学会，東京都，2013.11.

M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, H. Takano, M. Nishikawa, G. Sun, T. Shibamoto., Role of atmospheric samples collected from Asian sand dust storm in allergic airway inflammation and immune tolerance., 18th Congress of Asian Pacific Society of Respirology, Kanagawa, 2013.11.

Y. Song, T. Ichinose, K. Morita, T. Nakanishi, T. Kanazawa, Y. Yoshida., TLR4 is involved in Asian sand dust-induced peripheral inflammation, 第36回日本免疫学会総会, 千葉県, 2013.12.

稲垣 敦, 介護予防運動機能向上標準プログラム（大分県版）の効果, 日本体育測定評価学会第12回大会, 神奈川県, 2013.2.

稲垣 敦, 体育・スポーツ科学で生まれた数理モデルや解析法（１）多変量回帰分析モデルの多母集団への拡張, 日本体育学会第64回大会, 滋賀県, 2013.8.

稲垣 敦, 離島住民の健康寿命と運動機能：大分県姫島村について, 第72回日本公衆衛生学会総会, 三重県, 2013.10.

稲垣 敦, スポーツの得点構造分析, 第5回大分県スポーツ学会学術集会, 大分市, 2013.12.

岡藤 梨歩、岩崎 香子, 尿毒症物質CMPFは骨芽細胞機能障害を惹起する, 第56回日本腎臓学会学術集会, 東京都, 2013.5.

Y. Iwasaki, J.J. Kazama, H. A. Matsugaki, T. Nakano, Yamato, M. Fukagawa., Accumulated uremic toxins deteriorates bone mechanical properties in rats with chronic kidney disease., 2nd Joint Meeting of International Society of Bone Mineral Society and The Japanese Society of Bone and Mineral Research, Hyogo, 2013.5.

岩崎 香子、桑原三恵子、菅野 三喜男、風間 順一郎, 腎機能低下における骨弾性率と骨密度との関連, 第58回日本透析医学会学術集会・総会, 福岡県, 2013.6.

岩崎 香子、風間 順一郎、松垣 あいら、中野 貴由、深川 雅史, 慢性腎臓病における骨脆弱性には骨密度変化よりもむしろ材質特性変化が関与する, 第15回日本骨粗鬆症学会, 大阪府, 2013.10.

Y. Iwasaki, J.J. Kazama, H. Yamato, M. Fukagawa., Altered material properties are responsible for bone fragility in rats with chronic kidney disease., Kidney Week 2013 (American Society of Nephrology), USA, 2013.11.

吉田 紀子、梅野 貴恵, 退院後の母乳育児を継続させる要因に関する文献的検討 社会的サポートに焦点をあてて, 第54回日本母性衛生学会, 埼玉県, 2013.11.

小嶋 光明, 放射線誘発AMLの発症機構における造血系細胞の動態変化の評価, 第46回日本保健物理学会, 千葉県, 2013.6.

小嶋 光明, 集積線量毎に見た線量率と二動原体染色体発生頻度の関係, 第56回日本放射線影響学会, 青森県, 2013.10.

森 幹雄、小野 美喜, 特別養護老人ホームで働く看護職の専門職的自律性と個人要因・職場要因との関連, 日本看護倫理学会第6回年次大会, 鹿児島県, 2013.5.

森瀧 彩香、河野 梢子、小野 美喜, 高齢者の終末期ケアに対する意思を家族内で共有するために一在宅高齢者（親）とその子の語りからー, 日本看護倫理学会第6回年次大会, 鹿児島県, 2013.5.

小野 美喜、江月優子、廣瀬 福美, 介護老人保健施設における特定看護師介入前後の入所者入院状況の変化, 第33回日本看護科学学会学術集会, 大阪府, 2013.12.

甲斐 倫明, 医療職者と放射線教育の現状と課題, 日本放射線影響学会第56回大会, 青森県, 2013.10.

甲斐 倫明、東村 拓実, 甲状腺がん罹患率の地域差の分析とリスク因子に関する考察, 日本保健物理学会第46回研究発表会, 千葉県, 2013.6.

西嶋 康二郎、亀井 修、小野 孝二、小嶋 光明、甲斐 倫明, 患者個人ボクセルファントムを用いた乳房放射線治療における臓器吸収線量の推定, 日本保健物理学会第46回研究発表会, 千葉県, 2013.6.

亀井 修、吉武 貴康、西嶋 康二郎、小野 孝二、小嶋 光明 、甲斐 倫明, X線CT検査時に伴う臓器線量の体型による影響　臨床データを用いた体型の異なるボクセルファントムによるシミュレーション, 日本保健物理学会第46回研究発表会, 千葉県, 2013.6.

吉武 貴康、小野 孝二、長谷川 隆幸、勝沼 泰、甲斐 倫明, CT 画像診断における検査種類別の患者被ばく線量（CTDI）の施設間比較, 日本保健物理学会第46回研究発表会, 千葉県, 2013.6.

佐藤 薫、高橋 史明、遠藤 章、小野 孝二、長谷川 隆幸、 勝沼 泰、吉武 貴康、伴 信彦、甲斐 倫明, CT診断からの臓器線量評価に用いる 成人日本人ファントムの体型変形手法の構築, 日本保健物理学会第46回研究発表会, 千葉県, 2013.6.

小野 孝二,　吉武 貴康, 黒木 春奈, 亀井 修, 高橋 史明, 佐藤 薫, 伴 信彦, 遠藤 章, 甲斐 倫明, WAZA-ARIに導入する非標準型ファントムの体型パターンの分析, 日本保健物理学会第46回研究発表会, 千葉県, 2013.6.

影山 隆之、後藤 成人, 中高年住民の精神的不調と自殺念慮に関する住民調査（第2報）精神的不調にあっても自殺念慮を抱かない住民の特徴, 第37回日本自殺予防学会総会, 秋田県, 2013.9.

影山 隆之, 苦労やストレスにじっと耐える住民のサポート資源の特徴；地域自殺対策のために, 日本精神衛生学会第29回大会, 宮城県, 2013.9.

桃谷 裕子、山本 晴義、伊藤 桜子、影山 隆之, IT企業従業員の活気と抑うつに関与するストレス要因、緩衝要因、コーピングについての検討, 第29回日本ストレス学会学術総会, 徳島県, 2013.11.

桑野 園子、矢野 隆、影山 隆之, 風車騒音に関する調査研究（その4：アンケート調査手法と基礎集計結果）, 日本騒音制御工学会平成25(2013)年秋季研究発表会, 熊本県, 2013.9.

矢野 隆、影山 隆之、桑野 園子, 風車騒音に関する調査研究（その5：アンケート調査結果における暴露反応関係と非音響要因の影響）, 日本騒音制御工学会平成25(2013)年秋季研究発表会, 熊本県, 2013.9.

影山 隆之, 地域での自殺対策啓発活動に効果はあるか？ 自殺についての認識と自殺念慮者への対応, 第72回日本公衆衛生学会総会, 三重県, 2013.10.

影山 隆之、杉本 圭以子、大分県東部保健所自殺予防対策実行委員会, 救急医療機関・精神科医療機関を受診した自傷・自殺企図患者への医療者による「死ぬ意図」の確認に関連する要因, 第31回大分県公衆衛生学会, 大分市, 2014.3.

河野 梢子, 放射線専門看護師への期待 新聞記事のレビューから, 第2回放射線看護学会, 長崎県, 2013.9.

S. Kawano, The effect of school closure in pandemic flu: Analysis based on mathematical models involving a weather condition., EPIDEMICS 4th Conference, Amsterdan, 2013.11.

草野 淳子、高野 政子、中垣 紀子, 子育て中の看護師の復職プロセスと対策に関する文献的研究 ワーク・ライフ・バランスに着目して一, 第44回日本看護学会, 別府市,　　2013.9.

草野 淳子、高野 政子,　小児救急外来を受診した保護者のインターネット利用実態と受診判断, 第19回大分県小児保健学会, 大分市, 2013.9.

S. Kuwano, T. Yano, T. Kageyama, S. Sueoka, H. Tachibana, Social survey on community response to wind turbine noise in Japan., Inter-Noise 2013, Austria, 2013.9.

T. Yano, S. Kuwano, T. Kageyama, S. Sueoka, H. Tachibana, Dose-response relationships for wind turbine noise in Japan., Inter-Noise 2013, Austria, 2013.9.

桑野 紀子、崔 明愛, 大分県立看護科学大学における国際看護学教育の取り組み, 第16回国際看護研究会学術集会, 神奈川県, 2013.9.

後藤 成人、影山 隆之, 中高年住民の精神的不調と自殺念慮に関する住民調査（第1報）最近一年間の自殺念慮は精神的不調のみでは説明できない, 第37回日本自殺予防学会総会, 秋田県, 2013.9.

後藤 成人, 救急部門を受診した自殺未遂者への救急部看護師の対応の実際, 第33回日本社会精神医学会, 東京都, 2014.3.

佐伯 圭一郎、品川 佳満、西川 浩昭、柳井 晴夫, 受験者アンケートによる看護系大学共用試験（CBT）の評価, 日本テスト学会第11回大会, 福岡県, 2013.8.

佐伯 圭一郎, 看護系大学における統計教育ならびに臨床看護職者への統計に関する研究支援の現状, 第33回日本看護科学学会学術集会, 大阪府, 2013.12.

桜井 礼子、町屋 晴美、伊藤 眞奈美、福田 広美, プライマリ領域における特定看護師の高齢者総合診療に関する研修プログラムの構築, 第33回日本看護科学学会学術集会, 大阪府, 2013.11.

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, アトピー性皮膚炎モデルマウスに対するビスフェノールA経口曝露の影響, 第44回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会, 神奈川県, 2013.7.

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, ベンゾ[a]ピレン低用量経口曝露によるアトピー性皮膚炎増悪作用, 第63回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京都, 2013.11.

関根 剛, 救急救命センター看護師の二次受傷対策の実態 救急救命センターを持つ病院を対象に , 九州心理学会第74回大会, 沖縄県, 2013.11.

高野 政子, 小児病棟と原籍校、病院内学級の連携マニュアルの必要性に対する看護師長の認識, 日本小児看護学会第23回学術集会, 高知県, 2013.7.

M. Takano, The Evaluation of an Internet-Based TV Conference System(TVCS) to link childre undergoing chemotherapy in hospital class and their regular school class., The 44th Congress of the internatinal Society of Pediatric Oncology, China, 2013.9.

高野 政子, 特別支援学校で医療的ケアに従事する看護師と関係者との連携と課題, 日本看護科学学会学術集会, 大阪府, 2013.12.

後藤 愛、高野 政子, 重症心身障害児（者）施設における特定看護師の役割と多職種との連携, 第40回日本重症心身障害学会, 京都府, 2013.9.

諫山 榛香, 田中 佳子, 非被災地の看護師が東日本大震災における活動によって受けた影響 看護師への心的支援について , 日本看護倫理学会, 鹿児島県, 2013.6.

藤内 美保、中林 博道、松本 初美, プライマリケア領域修了者の特定行為習得に関する縦断的調査, 日本NP協議会NP研究会, 東京都, 2013.11.

H. Nakabayashi, Y. Araki, A novel fluorinated stilbene inhibits tumor activity of glioblastoma cells., European Congress of Pathology 2013, Portugal, 2013.9.

H. Nakabayashi, T. Yawata, NF-κB activation inhibitor IV inhibits tumor activity of glioblastoma cells., European Cancer Congress 2013, Holland, 2013.11.

林 猪都子, Comparison of Sleep between Women in the Third Trimester of Pregnancy　- Living at Home and those Staying in the Hospital-., XI World Congress of Perinatal Medicine Moscow, Russian, 2013.6.

宮丸 遥、林 猪都子, 震災が妊産婦に及ぼす影響に関する文献研究, 第54回日本母性衛生学会総会・学術集会, 埼玉県, 2013.10.

青山 愛加、林 猪都子, 中学生の性教育のあり方に関する文献研究, 第54回日本母性衛生学会総会・学術集会, 埼玉県, 2013.10.

乾 つぶら、林 猪都子、猪俣 理恵, 直接母乳哺育している母親の姿勢と児の抱き方　昼夜の違いと入院中から産後4ヶ月の変化 , 第27回日本助産学会学術集会, 石川県, 2013.5.

乾 つぶら、島田 三恵子、林 猪都子、猪俣 理恵, 妊娠後期・産褥1ヶ月・産後4ヶ月の入眠困難と中途覚醒の理由, 第38回日本睡眠学会, 秋田県, 2013.6.

松本 初美, 療養指導システムに関する文献検討 糖尿病療養指導士の療養指導に関する文献より, 第44回日本看護学会, 秋田県, 2013.10.

庄山 由美、林 猪都子、吉田 成一、松本 初美, 災害慢性期における特定看護師の期待される医療ニーズについて, 第2回NP協議会研究会, 東京都, 2013.11.

M. L. Uayan, M. Matsuzaki, S. Kobayashi, S. Murashima., A comparative study on the functional and disability status of Filipino elderly in different care settings., The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (IAGG 2013), Korea, 2013.6.

戸村 ひかり、永田 智子、村嶋 幸代、成瀬 昂, 退院支援看護師の実践能力と関連要因の検討 全国調査の結果より , 第16回日本地域看護学会学術集会, 徳島県, 2013.8.

戸村 ひかり、永田 智子、村嶋 幸代, 全国の病院における看護師の退院支援の実践状況 「退院支援看護師」と「退院支援担当の病棟看護師」との比較, 第51回日本医療・病院管理学会学術総会, 京都府, 2013.9.

戸村 ひかり、永田 智子、村嶋 幸代, 退院支援看護師と退院支援担当の病棟看護師による実践能力向上のための取り組み, 第23回日本保健科学学会, 東京都, 2013.10.

有本 梓、岩　りほ、村嶋 幸代、田　悦子, 1歳6か月児の母親における保健師への相談の状況および相談の有無による特徴の比較, 第72回日本公衆衛生学会総会, 三重県, 2013.10.

永田 智子、小川 薫子、田口 敦子、成瀬 昂、村嶋 幸代, 滋賀県草津市での「訪問看護利用支援試行事業」が退院後の訪問看護利用に与えた影響, 第2回日本公衆衛生看護学会学術総会, 神奈川県, 2014.1.

吉田 成一、嵐谷 奎一、賀 森、市瀬 孝道, 黄砂に付着した有機化合物による雄性生殖機能への影響, フォーラム2013：衛生薬学・環境トキシコロジー, 福岡県, 2013.9.

吉田 成一、嵐谷 奎一、賀 森、市瀬 孝道, 胎仔期黄砂曝露による雄性胎仔および出生仔生殖機能への影響, 第54回大気環境学会, 新潟県, 2013.9.

吉田 成一、嵐谷 奎一、小林 史尚、賀 森、市瀬 孝道, 黄砂エアロゾルによる精子形成・精子運動能への影響因子の探索, 第58回日本生殖医学会学術講演会, 兵庫県, 2013.11.

吉田 成一、小林 史尚、市瀬 孝道, 黄砂の胎仔期曝露が出生仔の免疫担当細胞に与える影響, 日本薬学会第134年会, 熊本県, 2014.3.

吉村 匠平、森田 慶子, ペア学習における交流活動アセスメントシート作成の試み（２）, 第20回大学教育研究フォーラム, 京都府, 2014.3.

10　地域貢献

講演等

石田 佳代子

フィジカルアセスメント循環器系, 平成25年度大分中村病院看護師研修会, 大分市, 2013.7.
看護過程の展開, 平成25年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2013.8.
看護過程, 平成25年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2013.8.
臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編, 平成25年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2013.9.
フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚), 平成25年度ブランクのある方の技術研修, 大分市, 2013.9.
NANDAの看護診断の入門編・基礎編, 平成25年度中村病院看護師研修会, 別府市, 2013.9.
看護過程の展開, 平成25年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2014.2.
フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚), 平成25年度ブランクのある方の技術研修, 大分市, 2014.3.

稲垣 敦

内臓脂肪を計ろう！, 大分県立看護科学大学若葉祭,大分市, 2013.5.
健康と運動・スポーツ, ヘルスサポーター養成講座, 竹田市, 2013.6.
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.7.
健康・体力チェック, ホルトホール大分開館記念イベント, 大分市, 2013.7.
運動プログラムの考え方と実践, 二次予防モデル事業研修会, 大分市, 2013.7.
健康スポーツ学概論, 第4回スポーツ救護講習会, 大分市, 2013.8.
統計相談, 日本体育学会第64大会測定評価専門領域企画, 滋賀県, 2013.8.
健康・体力チェック, おおいたスポーツ広場, 大分市, 2013.9.
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.9.
プラチナ通り健康づくりイノベーション事業について, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.9.
体力測定概論・各論, 第１回体力チェックサポーター養成研修会, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.9.
呼気ガス代謝測定 高崎山コース（１）, 大分市森林セラピー事業, 別府市, 2013.9.
呼気ガス代謝測定 高崎山コース（２）, 大分市森林セラピー事業, 別府市, 2013.9.
呼気ガス代謝測定 高崎山コース（３）, 大分市森林セラピー事業, 別府市, 2013.10.
体力測定概論・各論, 第２回体力チェックサポーター養成研修会 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 別府市, 2013.10.
身体活動量測定, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.10.
転ばぬ先の杖, 西別府病院健康フェア, 別府市, 2013.10.
健康チェック, 第37回富士見が丘団地体育祭, 大分市, 2013.10.
第１回健康教室, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.10.
健康チェック, ななせの里まつり, 大分市, 2013.11.
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.11.
第２回健康教室, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.11.
体力測定概論・各論, 第３回体力チェックサポーター養成研修会 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.11.
第３回健康教室, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.11.
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.12.
第４回健康教室, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.12.
呼気ガス代謝測定 宇曾山コース, 大分市森林セラピー事業, 大分市, 2013.12.
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013.12.
第５回健康教室, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.12.
呼気ガス代謝測定 鎧ヶ岳コース, 大分市森林セラピー事業, 大分市, 2014.1.
めじろん元気アップ体操, 二次予防モデル事業強化研修会, 大分市, 2014.1.
ロコモティブ・シンドローム, 姫島健康づくり事業, 姫島村, 2014.1.
プラチナ通り健康づくりイノベーション事業参加者対象報告会, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2014.1.

健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2014.2.
めじろん元気アップ体操, 姫島健康づくり事業, 姫島村, 2014.2.
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2014.2.
呼気ガス代謝測定 大分県県民の森「平成森林公園」特設クローバーコース, 大分市森林セラピー事業, 大分市, 2014.3.
大分市森林セラピートレイルランニング大会救護班 大分県県民の森「平成森林公園」特設クローバーコース, 大分市森林セラピー事業, 大分市, 2014.3.
プラチナ通り健康づくりイノベーション事業報告会, 大分県地域課題提案事業, 豊後高田市, 2014.3.
健康チェック, 森林探検ウォーキング, 富士見が丘連合自治会, 大分市, 2014.3.

岩崎 香子

骨粗鬆症研究の最先端 基礎研究結果からの提案 ， 先端骨粗鬆症セミナー， 新潟県， 2013.10.

梅野 貴恵

助産師教育課程, 平成25年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2013.6.
第二次性徴と妊娠, 平成25年度大分市立三佐小学校, 大分市, 2013.12.

影山 隆之

職場のメンタルヘルス（管理監督者の役割）, 大分県職員研修所平成25年マネジメント研修, 大分市, 2013.4.
メンタルヘルス, 大分県職員研修所平成25年度新任監督者研修, 大分市, 2013.5.
メンタルヘルス, 大分大学経済学部基盤演習１, 大分市, 2013.5.
学生のためのサバイバルガイド:心の健康のマネジメント, IVY技術工学院特別講義（大分県自殺対策事業）, 大分市, 2013.7.
惨事ストレス：消防職員が知っておきたいこと, 消防庁惨事ストレス対策説明会, 福岡県, 2013.7.
自殺対策の基本と地域での支え合い, 玖珠町自殺対策連絡協議会自殺対策研修, 玖珠郡, 2013.8.
自殺対策の基本的な知識 地域での支え合い, 平成25年度豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修, 豊後大野市, 2013.9.
自殺対策の基本的な知識 地域での支え合い, 平成25年度中津市自殺対策ゲートキーパー養成研修, 中津市, 2013.9.
教職員が知っておきたい子どもの自殺予防, 大分県教育委員会研修会, 別府市, 2013.11.
職場復帰の支援, 日本医師会認定産業医制度産業医学研修会, 大分市, 2014.1.
消防団員の惨事ストレス対策, 消防団員安全管理セミナー（消防団員等公務災害補償等共済基金）, 宮崎県, 2014.2.
心の健康づくり, 平成25年度宇佐市メンタルヘルス研修会, 宇佐市, 2014.2.
自殺予防のためにひとりひとりができること, 宇佐市自殺予防・対策専門研修会, 宇佐市, 2014.3.

河野 梢子

喀痰の吸引等を必要とする重度障がい児・者等の障害および支援緊急時の対応及び危険防止に関する講義, 介護職員等による喀痰吸引等研修会, 大分市, 2013.7.
フィジカルアセスメント脳神経系，運動系, フィジカルアセスメント, 大分市, 2013.8.
スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, トリニータホームゲーム健康・体力チェック, 大分市, 2013.10.
スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 体力チェックサポーター養成研修会, 大分市, 2013.10.
第 1 回健康教室, 地域課題提案事業, 豊後高田市, 2013.10.
インフルエンザ流行時における学級閉鎖の効果－2009年新型インフルエンザを振り返る－, 大分市学校保健研究大会, 大分市, 2014.2.
観察〔各種資器材による観察〕, 消防職員専科教育救急科（第16期）, 大分市, 2014.3 .

桜井 礼子

ヘルスケアサービスの情報活用とマネジメント, 大分県看護協会看護管理者認定看護師セカンドレベル教育課程, 大分市, 2013.11.
今とこれからの「健康」と「生活」のあり方を考える, のつはる七瀬大学, 大分市, 2013.9.

定金 香里

色が変わる不思議な花束, 大分県理科・化学懇談会主催「夏休み子供サイエンス2013」, 大分市, 2013.8.

佐藤 弥生

教育体制の構築：訪問看護ステーション所内教育（OJT）について, 大分県看護協会平成25年度訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2013.4.
家族看護, 大分県看護協会平成25年度訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2013.8, 12.
事例のまとめ方・発表の仕方, 平成25年度大分県訪問看護ステーション連絡協議会研修会特別講演, 大分市, 2013.7.
在宅における看護活動：訪問看護の役割, 大分県立雄城台高校：「総合的な学習の時間」ゲストレクチャー, 大分市, 2013.10.
在宅療養における訪問看護の役割と活用, 平成25年度大分県立看護科学大学公開講座, 中津市, 2014.3.

品川 佳満

看護研究の実際I, 大分県看護協会　教育研修, 大分市, 2013.6.
データ解析入門, 鹿児島大学　医学部保健学科　公開講座, 鹿児島県, 2013.7.
看護研究の実際II, 大分県看護協会　教育研修, 大分市, 2013.8.
ヘルスケアサービス管理論, 大分県看護協会　認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程, 大分市, 2013.11.

関根 剛

メンタルヘルス, 大分県庁新任班総括研修, 大分市, 2013.4.
メンタル対策と危機管理, 大分県教育委員会, 大分市, 2013.5.
相談対応の基本, 大分県県警察学校専科教育, 大分市, 2013.6.
被害者支援の歴史・意義必要性・人を援助するということ・エクササイズ, 紀の国被害者支援センター被害者支援養成講座, 和歌山県, 2013.6.
カウンセリングの基礎、被害者支援のあり方, NPO法人　山口被害者支援センター, 山口県, 2013.6.
メンタルヘルス（全３回）, 大分県市町村職員研修センター新任係長研修, 大分市, 2013.7.
人材育成, 全国被害者支援ネットワーク新任事務局長研修, 東京都, 2013.7.
カウンセリングの原理と実際（全２日間）, 大分県看護協会, 大分市, 2013.8.
面接技術（演習）, 大分県看護協会, 大分市, 2013.8.
被害者の心情に関する講話（全８回）, 大分刑務所ゲストスピーカー, 大分市, 2013.8.
看護協会コミュニケーション技術（演習）, 大分県看護協会訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2013.8.
危機時のこころのケア総論, 大分県こころの緊急支援チーム研修会, 大分市, 2013.8.
思春期とストレス, 南大分公民館, 大分市, 2013.9.
支援マニュアル作成について、ロールプレイ, 紀の国被害者支援センター, 和歌山県, 2013.9.
相談援助に携わる職員のためのストレスケア, 大分県こども・女性相談支援センター, 大分市, 2013.9.
指揮業務のポイント, 大分県こころの緊急支援チーム研修会, 大分市, 2013.9.
犯罪被害者に対するカウンセリングスキルの基礎, 山口県警察学校, 山口県, 2013.10.
性犯罪被害者の心理, 大分県警察学校, 大分市, 2013.10.
地方自治体の役割, 平成25年度犯罪被害者等施策研修会, 香川県, 2013.10.
被害者支援ネットワークにおける人材育成の考え方, 全国被害者支援ネットワーク秋期全国研修会分科会, 東京都, 2013.10.
センターにおける役割と実務 リーダー、ファシリテーター、コーディネィターの違い , 全国被害者支援ネットワーク秋期全国研修会分科会, 東京都, 2013.10.
共感力と想像力 ひとを傷つけないためのキーワード , 大分県立日田高校人権教育講演会, 日田市, 2013.10.
こころの健康づくりー自殺のサインと対応方法ー, 別府市自殺予防ゲートキーパー研修会, 別府市, 2013.11.
地方自治体の役割, 平成25年度犯罪被害者等施策研修会, 福岡県, 2013.11.
惨事ストレス対策, 大分県消防学校, 大分市, 2013.11.
コミュニケーション技術, 大分県看護協会訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2013.12.
スーパービジョン, 大分県いのちの電話協会, 大分市, 2013.12.
研修の構造・理解しておくべきこと（前期）, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネィター研修会, 東京都, 2014.1.
他団体との共同支援活動, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネィ

ター研修会, 東京都, 2014.1.
教育研修の企画, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネィター研修会, 東京都, 2014.1.
研修の構造・理解しておくべきこと（後期）, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネィター研修会, 東京都, 2014.1.
自殺のサインと具体的な対応(概論）, 中津北保健所自殺予防対策研修会, 宇佐市, 2014.2.
自殺のサインと具体的な対応(ケース検討）, 中津北保健所自殺予防対策研修会, 中津市, 2014.2.
育成の技術, 全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄地区ブロック研修会, 福岡県, 2014.2.

高野 政子

特別支援学校における医療的ケア, 平成25年度大分県立別府支援学校医療的ケア校内研修会, 別府市, 2013.7.
特別支援学校における医療的ケア, 平成25年度大分県立臼杵支援学校教職員研修会, 臼杵市, 2013.8.
けいれん発作の対応と看護ケア, 平成25年度大分県立新生支援学校校内研修会, 大分市, 2013.8.
呼吸と救急時の対応、たんの吸引の基礎、健康状態の把握と誤嚥、経管栄養の基礎, 平成25年度大分県教育委員会主催　医療的ケア研修会, 大分市, 2013.8.
特別支援学校の医療的ケアに従事する看護師のための研修会, 平成25年度大分県教育委員会主催　医療的ケア看護師研修会, 大分市, 2013.8.
医療的ケア研修会（たんの吸引、経管栄養の指導のポイント）, 第２回医療的ケア看護師研修, 大分市, 2013.8.
看護基礎教育の目指す方向性、授業設計　授業案の作成, 平成25年度専任教員継続研修会, 大分市, 2013.8.
保育所における看護と健康管理, 平成25年度健康安全保育研修会, 別府市, 2013.9.
小児看護学, 平成25年度実習指導者講習会, 大分市, 2013.9.
小児看護の倫理-教育最前線, 大分県立看護科学大学公開講座　看護教育の最前線, 大分市, 2013.9.
家族看護, 平成25年度大分県看護協会教育研修, 大分市, 2013.9.
臨床指導の実際−小児看護学−, 平成25年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2013.9.

田中 佳子

臨床に役立つフィジカルアセスメント, 平成25年度大分看護協会研修会, 大分市, 2013. 5.
健康チェック, ホルトホール大分開館記念イベント, 大分市, 2013. 7.
いつもとちがうぞ！病気のサイン？症状から声なき声を聴く ーフィジカルアセスメントを知り早期に医療機関につなぐ大切さを知るー, 介護福祉支援センター富士見ヶ丘　朝勉！オープン研修会, 大分市, 2013. 10.
第３回体力チェックサポーター養成研修会, スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2013. 11.
健康・体力チェック, スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 国東市, 2014. 2.
救護員, 森林セラピートレイルランニング大会, 大分市, 2014. 3.
各種資器材による観察, 消防職員専科教育救急科, 大分市, 2014. 3.

藤内 美保

臨床に役立つフィジカルアセスメント, 大分県看護協会研修会, 大分市, 2013.5.
フィジカルアセスメントの基本, 中村病院　看護師研修, 大分市, 2013.5.
専任教員再教育研修　統合実習の実際と評価, 大分県福祉保健部医療政策課, 大分市, 2013.8.
フィジカルアセスメント, 大分赤十字病院　新人看護師, 大分市, 2013.8.
フィジカルアセスメント, 別府医師会看護学校, 別府市, 2013.9.
チーム医療, 認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程, 広島県, 2013.10.
専任教員継続研修フォローアップ研修会, 大分県福祉保健部医療政策課, 2013.12.

林 猪都子

大学の教育課程・自己啓発, 平成25年度　保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2013. 6.

平野 亙

福祉における権利擁護　権利としての自立とその支援, 大分県社会福祉介護研修センター　県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市, 2013.5.
医療事故発生のメカニズムと安全管理のポイント, 大分県看護協会　訪問看護専門分野研修会, 大分市, 2013.5.
ＡＳＤ児の未来のために　専門職に寄せる親の願い , 大分県　平成25年度発達障がい者支援専門員養成研修（初級）, 大分市, 2013.6.
発達障がいのある生徒の特性理解と基本的な支援スキル, 大分県人権教育研究協議会　第3回オープン講座, 別府市, 2013.6.
安全教育とリスク・マネジメント, 大分県看護協会　保健師・助産師・看護師実習指導者講習会特別講演, 大分市, 2013, 6
福祉における権利擁護　自立と尊厳を保障するために, 大分県社会福祉介護研修センター　第1回相談業務担当職員研修会, 大分市, 2013.7.
自閉症スペクトラムの特性理解と支援のあり方　保護者の視点から, 大分県立大分支援学校　第2回特別支援学校校内研修支援　研修会, 大分市, 2013.8.
訪問看護における患者の権利と意思決定の支援, 大分県看護協会 平成25年度訪問看護基礎研修, 大分市, 2013.9.
臨床倫理の基礎「患者の権利を守るために 苦情から学ぶ文化」, 大分三愛メディカルセンター医療安全管理講習会, 大分市, 2013.10.
医療事故発生のメカニズムと安全管理のポイント, 大分県看護協会　訪問看護専門分野研修会, 大分市, 2013.10.
発達障がいのある生徒の特性理解と基本的な支援スキル, 平成25年度大分豊府中学校・高等学校職員研修, 大分市, 2013.10.
自閉症スペクトラム障害の特性と支援ニーズ, 大分県障害者相談支援事業推進協議会「相談支援従事者専門コース別研修」, 大分市, 2013.12.
保護者の支援ニーズと大分県自閉症協会の活動, 平成25年度発達障害者支援者実地研修事業, 豊後大野市, 2013.12.
患者の諸権利, 豊後大野市民病院倫理研修会, 豊後大野市, 2014.1.
保護者の支援ニーズと大分県自閉症協会の活動, 平成25年度発達障害者支援者実地研修事業, 豊後大野市, 2014.1.
プライバシー権と個人情報, 豊後大野市民病院倫理研修会, 豊後大野市, 2014.2.

村嶋 幸代

保健師教育の質を確保するための臨地実習について 保健師の専門性を育てる効果的な指導体制と内容 , 全国保健師長会兵庫県支部研修会, 兵庫県, 2013.4.

これからの保健師活動と保健師教育 保健師の専門性を育て、活用するには , 石川県看護協会保健師職能交流会, 石川県, 2013.5.

目指す保健師教育を探るリレートーク 修士課程を始めてみて , 全国保健師教育機関協議会 研修会, 東京都, 2013.6.

次世代のリーダー保健師の育成について 保健師の専門性を育て、伝承するには , 全国保健師長会千葉県支部 総会, 千葉県, 2013.6.

保健師教育課程について, 大分県看護協会 保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2013.6.

大学病院における退院支援のための地域との連携体制構築について, 大分大学医学部附属病院 看護管理者研修, 大分市, 2013.7.

保健師の仕事が楽しくなる地区診断：地域の課題を共有し、協働するために, 教育保健所整備モデル事業 新任保健師実地指導者等研修会, 大分市, 2013.7.

地域の健康課題に基づいた取り組み 保健師活動の原点を考える , 日本公衆衛生協会 保健師等ブロック別研修会, 大分市, 2013.8.

保健師活動の展開について、新任保健師へどう伝え、どう導くか, 教育保健所整備モデル事業 新任保健師実地指導者等研修会, 大分市, 2013.9.

退院支援の重要性と退院支援に関わる看護管理者の役割, 豊肥保健所 退院支援に係る関係者研修会, 大分市, 2013.10.

「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」について, 公立大学協会 公立大学学長会議特別シンポジウム, 岩手県, 2013.10.

大分県立看護科学大学の現在の状況と大分県の看護の未来, 厚生学院同窓会「草の実会」総会, 大分市, 2013.10.

実践知の蓄積・活用と看護の科学化 継続教育の意義と期待 , 木村看護教育振興財団22周年記念講演会 パネルディスカッション, 東京都, 2013.11.

地域で医療を支える看護, 佐伯市医師会立佐伯准看護学院 50周年記念式典, 大分市, 2013.11.

24時間在宅ケアシステムの構築に向けて 看護と介護の連携・協働と地域包括ケア , 中部保健所管内看護職員等研修会, 大分市, 2013.12.

新任期に経験したいこと・経験してほしいこと, 平成25年度保健指導ミーティング in 石川, 石川県, 2013.12.

大分県の看護水準向上に向けた看護科学大学の取り組みと展望, 大分県自治体病院開設者協議会 定時総会, 大分市, 2014.2.

吉田 成一

PM2.5の健康影響, 福岡県保健環境研究所 環境科学部大気課 集談会, 福岡県, 2013.5.

吉村 匠平

コミュニケーション論１, 大分医師会立アルメイダ病院 初任者研修, 大分市, 2013.6.
モチベーションマネジメント　自己決定理論から, 大分医師会立アルメイダ病院　プリセプター研修, 大分市, 2013.7.
研究倫理・安全について, 名桜大学, 沖縄県, 2013.8.
リーダーシップ研修, 国立病院機構別府医療センター, 別府市, 2013.9.
コミュニケーション論２, 大分医師会立　アルメイダ病院　初任者研修, 大分市, 2013.10.

研究指導

大分県立病院	石田 佳代子、関根 剛
独立行政法人国立病院機構大分医療センター	岩崎 香子、猪俣 理恵
大分赤十字病院	定金 香里、井伊 暢美
大分中村病院	平野 亙、石岡 洋子
アルメイダ病院	吉村 匠平、秦 さと子
大分県竹工芸・訓練支援センター	伊東 朋子
国立病院機構西別府病院	高野 政子、吉田 成一
中津市民病院	桜井 礼子、安部 真佐子
株式会社花王 生物化学研究所	岩崎 香子

学会その他の役員等

石田 佳代子

大分県看護協会教育委員会　委員
中津ファビオラ看護学校　非常勤講師

市瀬 孝道

環境省黄砂問題検討会委員
大気環境学会九州支部会役員
福岡市黄砂影響検討会委員
大分県大気汚染常時監視測定局再配置検討委員

伊東 朋子

日本ＡＬＳ協会大分県支部運営委員
介護職員等による吸引等研修会講師

稲垣 敦

猪俣 理恵

第10回大分県母性衛生学会運営実行委員会委員
大分県母性衛生学会副事務局長

岩崎 香子

ROD21研究会幹事
日本骨粗鬆症学会評議員
第15回日本骨粗鬆症学会学術集会プログラム委員

植田 みゆき

大分県母性衛生学会事務局
一般社団法人日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会
別府大学附属看護専門学校非常勤講師

梅野 貴恵

大分県母性衛生学会理事

小嶋 光明

日本保健物理学会企画検討委員
日本放射線影響学会評議委員
大分大学医学部臨床研究審査委員

小野 美喜

日本看護倫理学会評議員
日本看護科学学会　看護倫理検討委員

甲斐 倫明	社団法人日本リスク研究学会会長 国際放射線防護委員会(ICRP) 第4専門委員会委員 九州大学非常勤講師 人事院安全専門委員会委員 日本放射線影響学会評議員 日本医学放射線学会放射線防護委員会委員 鹿児島県地域防災計画検討有識者会議委員 鳥取県原子力防災専門家会議委員 久留米大学認定看護師教育センター非常勤講師 弘前大学大学院保健学研究科高度実践被ばく医療専門家委員会委員 公益社団法人日本アイソトープ協会ICRP111解説編集委員会副委員長 公益財団法人放射線影響研究所科学諮問委員 福岡県防災会議専門委員 国連科学委員会国内対応委員会委員 純真学園大学非常勤講師 大分県防災会議委員 国際放射線防護委員会(ICRP) Task Group 93, chair
影山 隆之	大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員 大分県自殺対策連絡協議会副会長 豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者 日本精神衛生学会常任理事・編集委員長 日本学校メンタルヘルス学会理事・編集委員 日本社会精神医学会評議員 大分県環境影響評価技術審査会委員
河野 梢子	NPO法人ななせ生きがいクラブアドバイザー
佐伯 圭一郎	日本民族衛生学会評議員 大分県情報公開・個人情報保護審査会委員 日本看護科学学会和文誌編集委員
桜井 礼子	大分地方労働審議会委員 大分県社会福祉審議会民政委員審査専門分科会委員 大分県看護協会認定看護管理者運営委員会委員 日本災害看護学会国際交流委員会委員 からだが喜ぶ食育応援店普及推進協議会委員 大分市市営陸上競技場および津留運動公園有料公園施設指定管理予定者選定等委員会委員
定金 香里	平松学園　大分リハビリテーション専門学校非常勤講師 大分県理科・化学懇談会幹事 大分県環境影響評価技術審査会委員 大気環境学会健康影響分科会幹事
佐藤 弥生	大分県看護協会訪問看護推進協議会委員 大分県看護協会看護師職能Ⅱ委員 平成25年度訪問看護・介護連携推進事業における「訪問看護・介護連携による支援の実践・評価検討会」委員 平成25年度訪問看護ステーション等看護職員定着促進事業推進部会委員 日本訪問看護認定看護師協議会役員
品川 佳満	日本放射線看護学会評議員 別府医療センター附属大分中央看護学校非常勤講師

秦 さと子	大分県脳卒中懇話会世話人
高野 政子	大分県医療的ケア連絡協議会委員 大分県特別支援学校第三者評価委員会委員 日本小児看護学会評議員 日本看護研究学会九州沖縄地方会幹事 九州沖縄小児看護教育研究会幹事 大分県小児保健協会理事 日本小児がん看護学会第11回学術集会抄録査読委員 日本看護学会第44回学術集会（看護総合）抄録選考委員
藤内 美保	大分県医療費適正化推進協議会委員 日本看護系大学協議会高度実践看護師専門委員会委員 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本型地域ケア実践開発研究事業」事業評価委員会委員 日本看護協会看護学会（総合看護）学会準備委員 日本看護協会看護学会（総合看護）査読委員 東京医療保健大学非常勤講師 名桜大学非常勤講師 中津ファビオラ看護学校非常勤講師 日本NP協議会事務局次長 第44回日本看護協会看護学会総合看護抄録選考委員会委員
林 猪都子	大分県ナースセンター事業運営委員 大分県看護協会　インターンシップ推進委員 第28回　日本助産学会学術集会査読委員 日本放射線看護学会　評議委員 大分県母性衛生学会　学術集会運営委員 大分県母性衛生学会　副会長（事務局長）
平野 亙	福岡大学法科大学院非常勤講師 九州大学大学院非常勤講師 医療事故防止・患者安全推進学会理事 大分県発達障がい研究会理事 大分県人権尊重社会づくり推進審議会副会長 大分県地域・職域連携推進部会委員 大分県特別支援連携協議会委員 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会委員 大分県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員会委員 九州大学病院心臓移植外部評価委員大分健生病院倫理委員会委員
松本 初美	大分県准看護師試験委員
宮内 信治	大分県立芸術文化短期大学非常勤講師 日本英語音声学会評議員

村嶋 幸代	日本学術会議連携会員 一般社団法人 日本看護系大学協議会理事 日本看護系学会協議会理事 一般社団法人 全国保健師教育機関協議会会長 日本保健師連絡協議会代表幹事 日本地域看護学会理事長 日本地域看護学会評議員 日本地域看護学会日本学術会議対策委員会委員長 日本地域看護学会地域看護学学術委員会副委員長 日本地域看護学会「看保連」対策委員会副委員長 日本公衆衛生学会理事 日本在宅ケア学会評議員 日本老年看護学会評議員 国立保健医療科学院評価委員会委員 東京都地方独立行政法人評価委員会委員 学校法人産業医科大学評議員 一般財団法人日本公衆衛生協会理事 公益財団法人医療科学研究所評議員 大分県地域包括ケア研究会世話人 大分県医療審議会委員 生涯健康県おおいた21推進協議会委員 大分県国民保護協議会委員 大分県石油コンビナート等防災本部本部員 大分市教育委員会「教育に関する事務の管理および執行の状況についての点検および評価」学識経験者 大分市子ども・子育て会議 日本NP協議会 事務局長 日本公衆衛生学会 公衆衛生看護のあり方に関する委員会委員長
吉田 成一	平成25年度光化学オキシダント等大気汚染物質文献レビュー検討会委員 日本薬学会学術誌編集委員会委員 日本薬学会 代議員 日本アンドロロジー学会 評議員 第33回アンドロロジー学会学術大会 プログラム編集委員 精子形成・精巣毒性研究会 評議員 東京理科大学薬学部客員准教授
吉村 匠平	平成25年度小・中学校等特別支援教育充実事業に係わる専門家チーム委員

11　助成研究

石田佳代子

災害時における黒タグ者に対する活動モデルの開発

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(C)

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

大陸に由来するアジアンスモッグ（煙霧）の疫学調査と実験研究による生体影響解明

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(A)

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

環境化学物質による発達期の神経系ならびに免疫系への影響におけるメカニズムの解明

環境省環境研究総合推進費

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、賀 淼

黄砂エアロゾル及び付着微生物・化学物質の生体影響とそのメカニズム解明に関する研究

環境省環境研究総合推進費

市瀬 孝道

バイオエアロゾルが引き起こすヒト健康への影響とその大気防疫システムの構築

三井物産環境基金研究助成事業

伊東 朋子

筋萎縮性側索硬化症患者における催眠レベル測定値を用いた睡眠評価法の開発

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(C)

稲垣 敦

脳卒中患者の機能回復のための二筋同時電気刺激装置の開発

東九州メディカルバレー医療機器研究開発補助事業

稲垣 敦

身体活動量を増やすための新しい健康教室およびハイブリッド・ウォーキングの開発

大分県地域課題提案事業

稲垣 敦

体力チェックサポーター養成プログラムの開発と実用化

文部科学省　スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業

稲垣 敦

森林セラピーウォーキング時の呼吸循環器系動態とエネルギー代謝

大分市森林セラピー事業

稲垣 敦

大分空港の施設改善に関する研究

大分県産学官連携共同調査研究費補助金

岩﨑 香子

慢性腎臓病における骨折寄与因子の検討-骨組成変化に着目した解析-

日本学術振興会科学研究費　基板研究(C)

岩﨑 香子

尿毒症状態下での骨細胞機能ー骨ミネラル代謝および力学強度への寄与ー

日本腎臓財団公募助成腎不全病態研究

梅野 貴恵

母乳育児経験のある更年期女性の脂質代謝・動脈硬化プロフィールと更年期症状

日本学術振興会科学研究費　基盤研究（C）

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

細胞動態のシステマティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写

環境省　原子力災害影響調査等事業（放射線の健康影響に係わる研究調査事業）

甲斐 倫明

人の体型を考慮したCT診断時臓器線量の個人差を評価できるWEBシステムの開発

日本学術振興会科学研究費　基盤研究（C）

影山 隆之

学校現場の日常的活動の場で実施できる児童生徒の自殺予防プログラムの開発と応用

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(C)

影山 隆之

男性労働者のソーシャルキャピタルに注目した職域から地域に繋がる健康支援の研究

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(C)

後藤 成人

自殺未遂者と精神科医療を繋ぐために救急部看護師が果たせる役割についての実態調査

日本学術振興会科学研究費　研究活動スタート支援

定金 香里

手指消毒薬の成分がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響とその作用機序に関する研究

日本学術振興会科学研究費 基盤研究(C)

秦さと子

唐辛子添加食品による加齢性の嚥下機能低下予防法の検証

日本学術振興会科学研究費　若手研究(B)

高野 政子

光ブロードバンド回線を利用して病院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援

日本学術振興会科学研究費　挑戦的萌芽研究

藤内 美保、佐藤 弥生

フィジカルアセスメントに基づく日常生活行動・薬剤投与量の調節の判断のツール開発

日本学術振興会科学研究費 基盤研究(C)

村嶋 幸代

修士課程における保健師教育の開発と評価－日本からの発信

日本学術振興会科学研究費　挑戦的萌芽研究

12　各種研究・研修派遣

協同教育学習法ワークショップ（ベーシック）

派遣先　大分県別府市大字別府字野口原3030-1
　　大分県社会教育総合センター

協同学習は、グループ学習の一部で、ジョンソン兄弟の考え方である肯定的相互依存・促進的相互交流・個人の責任・集団スキルの促進・活動の評価がベースにある学習法である。その方法として、「シンク=ペア=シェア」や「ラウンド=ロビン」「ジグソー学習法」などの技法を、実践を交えて学んだ。

協同学習の実践により、講義・演習が活性化されアクティブラーニングにつながる。その結果、受動的に与えられる学習ではなく能動的に獲得する学習体験により、学生の自己効力感につながりより高い学習の効果が得られることを学んだ。

13　学外研究者の受入

本学教員　黄砂とPM2.5の生体影響

受入者　He Miao

黄砂とPM2.5のアレルギー性気道炎症に対する増悪作用とそのメカニズムについての研究をマウスや培養細胞などを用いて行った。

本学教員　黄砂の生物学的影響因子の解析

受入者　Ren Yahao

黄砂に含まれるグラム陰性菌のリポポリサッカライド（LPS）のアレルギー性気道炎症増悪作用をマウス喘息モデルを用いて行った。

本学教員　低線量・低線量率放射線による

受入者　伴 信彦

平成25年度環境省受託研究「細胞動態のシステマティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写」の共同研究員として受け入れ、マウスの放射線誘発白血病に関する研究に従事した。

本学教員　低線量・低線量率放射線による

受入者　和泉 志津恵

平成25年度環境省受託研究「細胞動態のシステマティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写」の共同研究員として受け入れ、マウスの放射線誘発白血病に関する研究に従事した。

本学教員　CT診断からの被ばく線量評価

受入者　小野 孝二

科学研究費補助金によるWAZA-ARI 2に開発の共同研究を行った。

本学教員　CT診断からの被ばく線量評価

受入者　吉武 貴康

科学研究費補助金によるWAZA-ARI 2に開発の共同研究を行った。

14 教職員名簿

専任教員

生体科学	教授	中林　博道	
	准教授	安部　眞佐子	
	助教	岩﨑　香子	
生体反応学	教授	市瀬　孝道	
	准教授	吉田　成一	
	助教	定金　香里	
健康運動学	教授	稲垣　敦	
人間関係学	准教授	吉村　匠平	
	准教授	関根　剛	
	非常勤助手	森田　慶子	
環境保健学	教授	甲斐　倫明	
	講師	小嶋　光明	
	助手	石川　純也	H25.4.1 採用
健康情報科学	教授	佐伯　圭一郎	
	講師	品川　佳満	
	助教	首藤　信通	H26.1.31 退職
言語学	教授	G.T.Shirley	
	准教授	宮内　信治	
	非常勤助手	田原　歩	H26.3.31 退職
基礎看護学	教授（兼担）	藤内　美保	
	准教授	伊東　朋子	
	講師	秦　さと子	
	助手	栗林　好子	H26.3.31 退職
	助手	水野　優子	
	助手	巻野　雄介	
看護アセスメント学	教授	藤内　美保	
	准教授	石田　佳代子	
	助教	河野　梢子	
	助手	田中　佳子	
成人・老年看護学	教授	小野　美喜	
	講師	松本　初美	
	助教	井伊　暢美	H26.3.31 退職
	助教	江月　優子	
	助手	中釜　英里佳	
	臨時助手	堀　裕子	H26.3.31 退職
	臨時助手	河野　優子	H26.3.31 退職
	臨時助手	川野　明子	H25.4.1 採用
			H25.12.20 退職
小児看護学	教授	高野　政子	
	助教	草野　淳子	
	助手	足立　綾	
	短期実習臨時助手	永井　真美	H25.8.26 採用
			H25.12.6 退職
母性看護学	教授	林　猪都子	
	講師	猪俣　理恵	
	助手	植田　みゆき	

助産学	教授	梅野　貴恵	
	助教	樋口　幸	
	助教	石岡　洋子	
	助手	安部　真紀	
精神看護学	教授	影山　隆之	
	准教授	大賀　淳子	H25.6.30 退職
	助手	後藤　成人	
	短期実習臨時助手	杉本　圭以子	H25.9.1 採用
			H25.11.30 退職
保健管理学	教授	桜井　礼子	
	准教授	平野　亙	
	助手	佐藤　弥生	H25.4.1 異動
	臨時助手	吉田　智子	H25.4.1 採用
			H26.3.31 退職
地域看護学	講師	赤星　琴美	
	助手	鈴木　彩乃	H25.10.1 採用
	助手	岡元　愛	
	臨時助手	小田　千尋	H25.10.31 退職
	短期実習臨時助手	三ヶ田　万知代	H25.4.22 採用
			H25.7.20 退職
	短期実習臨時助手	川野　明子	H26.1.6 採用
			H26.2.28 退職
国際看護学	助教	桑野　紀子	
看護研究交流センター	准教授	福田　広美	H25.4.1 異動
	臨時助手	銅直　茜	H25.6.18 採用
	臨時助手	永井　真美	H26.1.14 採用
			H26.3.31 退職

特任教授

地域看護学	特任教授	佐藤　玉枝	H25.4.1 採用
国際看護学	特任教授	崔　明愛	H25.4.1 採用

就職相談員

就職相談員	小川　三代子

非常勤講師（学部）

澤田　佳孝	美術とこころ
西　英久	哲学入門
西園　晃	微生物免疫論
松田　美香	言語表現法
大杉　至	社会学入門
二宮　孝富	法学入門（日本国憲法）
足立　恵理	文化人類学入門
劉　美貞	韓国語
宮本　修	音楽とこころ
松本　佳那子	健康科学実験
生野　末子	地域助産活動論
宮﨑　文子	地域助産活動論

戸髙　佐枝子	地域助産活動論
松本　昴	微生物免疫論

非常勤講師（大学院）

岩波 栄逸	診察・診断学特論
立川 洋一	老年アセスメント学演習
永瀬 公明	老年アセスメント学演習
古川 雅英	老年実践演習、 小児実践演習
佐藤　博	老年実践演習
山口　豊	診察・診断学特論
大久保　浩一	診察・診断学特論
山本　真	老年実践演習
藤富 豊	老年NP特論
財前　博文	老年疾病特論
鈴木　正義	小児診察・診断学特論、 小児アセスメント学演習
竹島　直純	老年疾病特論
佐藤　昌司	周産期特論、 周産期診断技術演習
飯田　浩一	周産期特論
豊福　一輝	周産期特論
軸丸　三枝子	周産期特論
後藤　清美	周産期特論
中村　聡	リプロダクティブ・ ヘルス特論
嶺　真一郎	リプロダクティブ・ ヘルス特論
前田　徹	老年実践演習
卜部 省悟	病態機能学特論
宮成 美弥	老年NP特論
井上　敏郎	小児疾病特論
大野　拓郎	小児疾病特論
岩松　浩子	小児疾病特論
金谷　能明	小児疾病特論
糸長　伸能	小児疾病特論
黒木　雪絵	小児NP特論
玉井 文洋	健康危機管理論
矢野 庄司	診察・診断学特論
渡邊　めぐみ	分娩期診断技術特論
菊池　聖子	助産マネジメント演習
伊奈　啓輔	老年疾病特論
糸永　一朗	診察・診断学特論、 老年疾病特論
伊東　弘樹	老年臨床薬理学特論
兒玉 雅明	診察・診断学特論、 老年疾病特論
阿部 航	診察・診断学特論
吉岩 あおい	診察・診断学特論
浜崎　一	老年アセスメント学演習

江口　美和	産業保健特論
増井　玲子	老年疾病特論、 疾病予防学特論
井上　祥明	母子成育支援特論
小寺　隆元	老年疾病特論
戸高　佐枝子	助産マネジメント論
生野　末子	分娩期診断技術特論、 助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
宇津宮　隆史	リプロダクティブ・ ヘルス特論
上野　桂子	母子成育支援特論
竹内　山水	老年実践演習
竹下　泰	老年疾病特論
麻生　哲郎	老年疾病特論
塚本　容子	老年NP探究セミナー
宮﨑　文子	看護教育特論、 助産マネジメント論
吉留　宏明	老年疾病特論
小山　秀夫	看護政策論
堀永　孚郎	リプロダクティブ・ ヘルス特論
三浦　芳子	老年疾病特論
江口　春彦	小児診察・診断学特論、 小児NP探求セミナー
佐藤　圭右	小児診察・診断学特論、 小児実践演習、小児NP演習
後藤　愛	初期体験実習（NP）、 小児NP特論
別府　幹庸	小児診察・診断学特論
松本　康弘	小児薬理学演習
小野　重遠	疾病予防学特論 小児疾病特論
阿部　実	保健医療福祉政策論
福永　拙	小児NP演習
谷口　一郎	リプロダクティブ・ ヘルス特論
松田　貴雄	リプロダクティブ・ ヘルス特論
浜野　清子	地域保健特論
三浦　源太	疾病予防学特論
平川　英敏	薬剤マネジメント特論
藤内　修二	広域看護学概論、 健康危機管理論、 疾病予防学特論
池邉　淑子	疾病予防学特論
井上　貴史	リプロダクティブ・ ヘルス特論
式田　由美子	小児NP特論
疋田　利恵	地域母子保健学特論
力徳　広子	地域母子保健学特論
佐藤　京子	地域保健学特論

	實崎　美奈	ウイメンズヘルス特論	
	堀　文彦	小児疾病特論	
	佐藤　雄己	老年臨床薬理学特論	

事務職員

	事務局長	安部　昭邦	H25.4.1 転入 H26.3.30 転出
総務グループ	課長補佐	朝倉　泰三	
	主幹	岩﨑　瑞穂	H25.4.1 転入
	副主幹	美登　弘美	H26.3.31 転出
	副主幹	宮添　春彦	H26.3.31 転出
	主査	池辺　賢一	H25.8.19 異動
	主事	中野　麻梨子	
	主事	江本　華子	
	非常勤職員	釘宮　裕和	H25.6.30 退職
	事務職員	池邉　尚美	
	事務職員	陸　陽	H25.12.31 退職
	事務職員	黒木　亜紀	H26.1.23 採用
	派遣職員	藤田　雅	H25.9.30 派遣終了
	派遣職員	植松　尚子	H25.8.19 派遣
教務学生グループ	副主幹	工藤　哲生	H25.4.1 転入
	主査	江田　真砂実	H25.4.1 転入
	主査	池辺　賢一	H25.8.19 異動 H26.3.31 転出
	主任	神﨑　正太	
	保健師	津留　由美	H26.3.31 退職
	事務職員	佐藤　めぐみ	
	事務職員	佐藤　由美	H26.3.31 退職
図書館管理グループ	非常勤職員	白川　裕子	
	非常勤職員	工藤　信二	H26.3.31 退職
	非常勤職員	姫野　由美	H25.4.1 採用